東京学芸大学紀要　人文社会科学系Ⅰ　**69**: 29－70，2018.

中華書局編輯部編『詩詞曲語辞辞典』に見る唐詩の特徴的な用法について（3）

佐藤　正光[*1]・高橋　未来[*2]・有木　大輔[*3]・西村　　諭[*4]

中国古典学分野

（2017年8月30日受理）

要　　旨

本稿は，唐詩における特殊な用法を分析するものである。唐宋から金元明の詩詞戯曲などには，時代や地域性，社会階層によって生み出された俗語，口語，方言が詠み込まれている。それはオーソドックスな意味と異なるために，精確な解釈にはその特殊語彙（以下，異読と称する）の意味を把握することが必要である。そこで27年度紀要より，異読の用法を多く記載する中華書局編輯部編『詩詞曲語辞辞典』から唐詩の用例を訳出し，検討を加えてきた。本稿でも，中国語のピンイン表記によるAからHまでの36項目を訳出検討した。

検討の結果，六朝以前まで遡る用例や複数の異なる語義を持つ語彙が多く見出された。とくに虚詞の場合は，解釈が詩全体に関わるため，語義の確定の重要性を再認識させられる。全用例に共通して窺われることは，対句と互文の用法に異読が多いことと，唐詩から宋の詩詞，さらに元曲へと語義が継承される過程である。

キーワード：唐詩，唐宋詞，異読，訓読，俗語，語彙解釈

はじめに

唐詩には，時代や地域性，社会階層によって生み出された俗語，口語，方言のたぐいが詠み込まれており，それは宋代以降，金元明の詩詞や戯曲にも継承されている。それらの語彙（以下，異読と称する）は通常の意味と異なるが，日本の伝統的な訓読では異読語彙の意味を捉えきれない場合もあった。そこで唐詩を精確に解釈するために，27年度の紀要以降，異読語彙を多く記載する中華書局編輯部編『詩詞曲語辞辞典』から唐詩の用例を抜き出して訳出，検討している（高橋未来・佐藤正光「中華書局編輯部編『詩詞曲語辞辞典』に見る唐詩の特徴的な用法について」）。本稿では新たに，中国語のピンイン表記によるAからHまでの36項目を訳出し，検討を加えることとする。

異読に関する研究は，中国では張相『詩詞曲語辞滙釈』（中華書局，1954年）以降継続的に行われている。しかし日本では，塩見邦彦『唐詩口語の研究』（中国書店，1995年）を除くと，個々の用例に関する論文は多いものの，体系的な研究はなされていない。そこで新たに異読語彙の全体像を把握し，さらに異読の文学的効果を検証したいと考えている。本稿はその一環である。

＊1　東京学芸大学 日本語・日本文学研究講座 中国古典学分野（184-8501　小金井市貫井北町4-1-1）
＊2　東京学芸大学非常勤講師，茨城女子短期大学表現文化学科（311-0114　那珂市東木倉960-2）
＊3　筑波大学附属駒場中・高等学校（154-0001　世田谷区池尻4-7-1）
＊4　東京学芸大学附属国際中等教育学校（178-0063　練馬区東大泉5-22-1）

1．比bǐ

①従前，往昔の意，時間を表す名詞。杜甫[1]「舎弟観赴藍田取妻子到江陵喜寄三首（舎弟の観 藍田に赴き妻子を取り江陵に到る 喜びて寄す三首）」其三（『全唐詩』[2] 巻231）「比年断酒開涓滴，弟勧兄酬何怨嗟（比年酒を断つも涓滴を開かん，弟勧め兄酬いれば何ぞ怨嗟せん）」，これはかつて断酒していたが，今解禁することを言う。また「酬狄明府（狄明府に酬ゆ）」[3]（『全唐詩』巻222）「梁公曾孫我姨弟，不見十年官済済。大賢之後竟陵遅，浩蕩古今同一体。比看叔伯四十人，有才無命百寮底。今者兄弟一百人，幾人卓絶秉周礼（梁公の曾孫は我が姨弟，十年にして官の済済たるを見ず。大賢の後に竟に陵遅するは，浩蕩たる古今同じく一体なり。比て看る叔伯四十人，才有るも命無く百寮の底。今者兄弟一百人，幾人か卓絶して周の礼を秉る）」，「比」は「今者」と対応しており，「往」「昔」に等しい，つまり上の文の「十年」よりも前ということになる。韋応物[4]「烏引雛（烏 雛を引く）」（『全唐詩』巻194）「雄雌来去飛又引，音声上下懼鷹隼。引雛烏，爾心急急将何如。何得比日捜索雀卵啖爾雛（雄雌来たり去り飛び又引き，音声上下し鷹隼を懼る。雛を引く烏，爾が心 急急として将た何如せん。何ぞ比日雀の卵を捜索して爾の雛に啖らわすを得んや」，張籍[5]「祭退之（退之を祭る）」（『全唐詩』巻383）「公比欲為書，遺約有修章。令我署其末，以為後事程。家人号于前，其書不果成。（公比て書を為らんと欲し，遺約[6]に章を修むる有り。我をして其の末を署せしめ，以て後事の程と為す。家人前に号し，其の書果たして成らず）」，林滋[7]「望九華山（九華山を望む）」（『全唐詩』巻552）「吁予比年愛霊境，到此始覚魂神馳[8]（吁 予 比年霊境を愛す，此に到り始めて魂神の馳するを覚ゆ）」。およそ「比日」「比年」というのは，いずれもちょうど「往日」「往年」というのと同じ。「比」のこの種の用法は，すでに多くの六朝典籍に見られる。『後漢書』[9] 陳蕃伝に「又比年收斂，十傷五六，万人飢寒，不聊生活（又 比年収斂し，十に傷つくこと五六，万人飢え寒え，生活を聊ぜず）」。別に「比来①」「比先」を見よ。

②「本」の意味，語気を表す副詞。元稹[10]「諭宝二首」其二（『全唐詩』巻397）「此物比在泥，斯言為誰発。于今尽凡耳，不為君不説（此の物比泥に在り，斯の言誰が為に発す。于今尽く凡耳[11]，君の為ならざれば説かず）」，また「酬楽天武関南見微之題山石榴花詩（楽天の「武関の南にて微之の山石榴の花に題す詩を見る」に酬ゆ）」[12]（『全唐詩』巻416）「比因酬贈為花時，不為君行不復知（比因花時に為るに酬贈す，君が行の為ならざれば復た知らず）」。この二つの例の語調は同じように転折があり，「比在泥」とはつまり「本在泥」，「比因」とはつまり「本因」である。「不為」は「不謂」に等しく，意外にも，の意で，「比」と対応している。李中[13]「訪章禅老（章禅老を訪ぬ）」（『全唐詩』巻750）「比尋禅客叩禅機，澄却心如月在池。松下偶然醒一夢，却成無語問吾師（比禅客[14]を尋ね禅機を叩う，澄たること却って心月の池に在るが如し。松下に偶然一夢より醒むれば，却って語る無くして我が師に問うを成す）」。意味は，もとより禅を尋ねたいと思い，心を清静無為の境地に求めたところ，結果として夢の中で悟りを覚え，再び問う必要がなくなった，ということを言う。敦煌詞「鵲踏枝」「比擬好心来送喜，誰知鎖我在金籠裡（比擬う好心より来たり喜びを送るを，誰か知らん 我を鎖ざして金籠の裡に在るを）」。意味は上に同じである。別に「比来②」を見よ。（西村）

2．慚愧cánkuì

感幸の辞，多謝（ありがとう），儌幸（巡り合わせのよいこと。思いがけないこと），難得（得がたい，珍しい，めったにない）。字は「慙媿」にも作る。王績[15]「過酒家（酒家に過ぎる）」（『全唐詩』巻37）「来時長道貰，慚愧酒家胡（来りし時は長道に貰，慚愧し酒家胡）」，「長道」は，「常是」というのと同じ。元稹「杏花」（『全唐詩』巻416）に「常年出入右銀台，毎怪春光例早回。慚愧杏園行在景，同州園裏也先開（常年出入す右銀台[16]，毎に怪しむ春光例に早く回るを。慚愧し杏園 行在の景，同州の園裏也先ず開く）」，これは「難得」の意。また「喜五兄自泗州至（五兄の泗州より至るを喜ぶ）」（『全唐詩』巻416）「眼中三十年来泪，一望南雲一度垂。慚愧臨淮李常侍，遠教形影暫相隨（眼中三十年来の泪，一たび南雲を望み一度垂る。慚愧し臨淮の李常侍，遠く形影をして暫く相隨わしむ）」，これは「多謝」あるいは「難得」の意。また元稹「長灘夢李紳（長灘にて李紳を夢む）」（『全唐詩』巻414）「慚愧夢魂無遠近，不辞風雪到長灘（慚愧し 夢魂 遠近無く，風雪の長灘に到るを辞せず」」，これは「難得」の意。また徐凝[17]「題杭州開元寺牡丹（杭州開元寺の牡丹に題す）」（『全

唐詩』巻474）「此花 南地知誰種，慚愧僧閑用意栽（此の花 南地誰か種うるを知る，慚愧し 僧閑に意を用いて栽う）」，これは「難得」の意。張籍「答開州韋使君寄車前子（開州の韋使君の車前子[18]を寄するに答う）」（『全唐詩』巻386）「慚愧使君憐病眼，三千余里寄閑人（慚愧し使君病眼を憐れみ，三千余里 閑人に寄す）」，これは「多謝」あるいは「難得」の意。斉己[19]「早行」（『全唐詩』巻840）「蒼茫平野水，慚愧遠峰明[20]（蒼茫たり平野の水，慚愧し遠峰の明）」，これは「難得」の意。韓偓[21]「春尽」（『全唐詩』巻681）「慚愧流鶯相厚意，清晨猶為到西園（慚愧し流鶯相厚[22]の意，清晨猶お為に西園に到る）」，これは「多謝」あるいは「難得」の意。劉克荘[23]「田舎即事」（『全宋詩』[24]巻3042）「野老逢人説慚愧，長官清白社公霊（野老 人に逢いては慚愧きを説く，長官清白たり社公の霊）」，これは「難得」あるいは「儌幸」の意。蘇軾[25]「浣溪沙」（『全宋詞』[26]）「慚愧今年二麦豊，千畦翠浪舞晴空。化工余力染夭紅（慚愧し今年二麦[27]豊，千畦翠浪 晴空に舞う。化工の余力夭紅を染む）」，これは「難得」の意。黄庭堅[28]「虞美人・至当涂呈郭功甫（当涂に至り郭功甫に呈す）」（『全宋詞』）「当涂舣棹蒹葭外，頼有賓朋在。此身無路入修門，慚愧詩翁清些与招魂（当涂舣棹蒹葭の外，頼に賓朋在る有り。此の身路無く修門に入る，慚愧し詩翁清にして些か招魂を与にす）」，これは「多謝」の意。劉克荘「木蘭花慢」（『全宋詞』）「也慚愧君恩，放還田舎，免詣公車（也慚愧し君の恩，田舎に放還せられ，公車に詣るを免る）」，これも「多謝」の意。金・董解元『董解元西廂記』[29]三「比及到黄昏，没乱煞。花影透窓紗，幾時是黒，得見那死冤家……慚愧唖（吓），僧院已聞鴉。碧天涯幾縷児残霞，漸聴得璫璫地昏鐘児打（夕暮れ時となり，辺りは静まりかえる。花の影が寒冷紗に透けて見える。いったいいつになったら夜になって，あの憎い仇に会えるのか……ありがたい（おどろく），寺院では鳥の啼き声が聞こえ，空の向こうに幾筋かの残霞が見え，ようやく夕暮れ時を告げる鐘を打つ音が聞こえてきた）」，これは日が暮れるのを待ち望む情況を描写している。「慚愧」は「儌幸」というのと同じであり，「謝天謝地（ありがたや，ありがたや）」というのと同じ。また『董解元西廂記』四「越越的哭得灯児滅，慚愧唖（吓），秋天甫能明夜，一枕清風半窓月（ありがたい（おどろく），秋の空もちょうど深夜となり，寝床に清風が吹き，少し開いた窓から月が見える）」，これは夜が明けるのを待ち望む情況を描写している。「明夜」は深夜のことで，ここは，今やっと深夜になったばかりであることを言う。元・石君宝『諸宮調風月紫雲庭』[30]劇「他道是喜的女孩兒感得些風寒証，慚愧呵！謝天地不是相思病（彼が言うにはどうやらあの子は風邪を引いたそうだ，ありがたい。ありがたいことに恋わずらいではなかった）」，元・馬致遠『邯鄲道省悟黄粱夢』劇二「洞賓云：我看着老院公面…（洞賓）爺やの顔に免じて，そなたの命を許そう。（正末）まことにありがたいことにございます」，元・王実甫『西廂記』[31]五の一「紅云：琴童在門首，見了夫人了，使他進来見姐姐，姐夫有書。旦云：慚愧！我也有盼着他的日頭（紅云う：琴童門口にいて，夫人にまみえて彼を進み来させて姫君に会わせた。婿君には手紙があった。旦云う：ありがたい。私もまた彼に会う日があるのだ）」，また五の四「紅上云：我巴不得見他，元来得官回来。慚愧！这是非対着也（紅上り云う：私は彼に会いたくて待ちかねているが，もともと役人になって帰ってきている。ありがたい，ここに善人と悪人とが相対するのだ）」，元・無名氏『朱太守風雪漁樵記』劇三「慚愧！…（ありがたい，わが家の婿は役人になったのだ）」，『謝金蓮詩酒紅梨花』劇一「小生慚愧…（ありがたい。娘には会うことができた）」。すべてこれらの「慚愧」は，いずれも「儌幸」の意，あるいは「謝天謝地（おかげさまで，ありがたい）」の意。また「慚」「愧」「慙」「慙媿」を見よ。

・［慚］cán感謝，多謝の意。『搜神記』[32]巻二〇「董昭之」に「慚君済活，若有急難，当見告語（慚し君に済活せらる，若し急難有らば，当に告語を見るべし）」，「慚」もまた「多承」「多謝」の意。六朝時代にすでにこのような用例を見いだすことができる。皮日休[33]「夏景冲澹偶然作（夏景冲澹偶然の作）」（『全唐詩』巻614）「紅印寄泉慚郡守，青筐与筍愧僧家（紅印は泉に寄せ郡守に慚く，青筐は筍と与にし僧家に愧し）」，「慚郡守」は「謝郡守」と言うのと同じであり，「愧僧家」は「謝僧家」と言うのと同じである。

・［愧］kuì多謝，感謝の意。陸亀蒙[34]「自遣（自ら遣る）」（『全唐詩』巻628）「心搖只待東窓曉，長慚寒鶏第一声（心搖れて只だ待つ東窓の曉，長に愧し寒鶏の第一声）」，いつも寒鶏（寒中の鶏）が朝を知らせてくれるのを感謝していることを言う。李群玉[35]「答友人寄新茗（友人の新茗を寄するに答う）」（『全唐詩』巻570）「慚君千里分滋味，寄与春風酒渇人（愧し君 千里 滋味を分かち，寄与す春風を酒渇[36]の人に）」，君が遠くからうまいものを分けてくれたことに感謝することを言う。

・［慙］cán感謝を表す意味。江淹[37]「別賦」（『文選』[38]巻16）「乃有慙剣客恩，少年報士（乃ち剣客の恩に慙じ，少年の士に報いる有り）」，「慙恩」の意味はとりもなおさず「感恩」である。

・［慙媿］cánkuì感謝を表す意味。『国語』[39]斉語に「故天下小国諸侯，既許桓公，莫之敢背。就其利而信其仁，畏其武。桓公知天下諸侯多与己也，故又大施忠焉。可為動者為之動，可為謀者為之謀，軍譚，遂而不有也，諸侯称寛焉。通斉国之魚塩于東萊，使関市幾而不征，以為諸侯利，諸侯称広焉。築葵茲，晏，負夏，領釜丘，以御戎翟之地，所以禁暴于諸侯也。築五鹿，中牟，蓋与，牡丘，以衛諸夏之地，所以示権于中国也。教大成，定三革，隠五刃，朝服以済河，而無怵惕焉，文事勝焉。是故大国慙媿，小国附協（故に天下の小国諸侯，既に桓公に許して，之に敢えて背く莫し。其の利に就きて其の仁を信じ，其の武を畏る。桓公 天下の諸侯の多く己に与するを知る，故に又大いに忠を施す。為に動くべき者は之が為に動き，為に謀るべき者は之が為に謀り，譚，遂に軍して有たず，諸侯 寛と称す。斉国の魚塩を東萊に通し，関市は幾して征せざらしめて，以て諸侯の利と為す，諸侯 広と称す。葵茲，晏，負夏，領釜丘に築きて，以て戎狄の地を禦ぐは，暴を諸侯に禁ずる所以なり。五鹿，中牟，蓋与，牡丘に築きて，以て諸夏の地を衛るは，権を中国に示す所以なり。教え大いに成り，三革を定き，五刃を隠め，朝服して以て河を済りて怵惕する無く，文事勝れり。是の故に大国は慙媿し，小国は附協す）」。

『管子』[40]小匡もこの話を載せており，文字もほぼ同じで，末尾二句は「是故大国君慙媿小国君附比（是の故に大国の君は慙媿し小国の君は附比す）」に作っている。文中の「慙媿」の語は，古い辞書のいずれにも引用がなく，ただ『聯綿辞典』[41]の「慚愧」の条にかつてこの一例を挙げるのみであるが，ただしそれでも「愧惧（恥じておろおろする），愧恥」の意味で解釈している。文の内容をよく考えてみると，すべてが適切であるとは言えないようだ。文中に述べられている桓公の行いは，すべて「徳で諸侯を安んずる」ことなので，大国や諸侯にはそもそも「愧惧」や「愧恥」の必要は無く，かえって「感荷（感激し敬意を抱く），感服」の意味の方が，文の内容としてはむしろぴったり合う。もしこの説が間違いでなければ，「慚愧」が感謝の意味を表す語源は先秦にまでさかのぼる，つまり『国語』『管子』が後人の改竄が加わったものだと考えると，西漢よりも後になるとは考えられない。（西村）

3．川chuān

陸地である。崔顥[42]「黄鶴楼」（『全唐詩』巻130）「晴川歴歴漢陽樹（晴川歴歴たり漢陽の樹）」，「晴川」は，ちょうど「晴郊」あるいは「晴野」というのと同じである。趙嘏[43]「東望」（『全唐詩』巻549）「微緑合風[44]樹満川（微緑風に合し 樹 川に満つ）」，「満川」は，ちょうど「満野」というのと同じである。邵雍[45]「落花吟」（『全宋詞』）「万紫千紅処処飛，満川桃李漫成蹊（万紫千紅 処処に飛び，満川桃李漫く蹊を成す）」，王安石[46]「出郊（郊に出づ）」（『全宋詞』）に「川原一片緑交加，深樹冥冥不見花（川原一片 緑 交加し，深樹冥冥として花を見ず）」，「川原」は聯用で，「川」はつまり「原」である。程顥[47]「春日偶成」（『全宋詞』）「傍花随柳過前川（花に傍い柳に随いて前川を過ぐ）」，「前川」はちょうど「前村」というのと同じである。朱熹[48]「進賢道中漫成」（『全宋詞』）「夜宿林阜月満川（夜 林阜に宿れば 月 川に満つ）」，「月満川」は，ちょうど「月満地」というのと同じである。（西村）

4. 到了dàoliǎo

ついに，結局。呉融[49]「武関」（『全唐詩』巻686）「貪生莫作千年計，到了都成一夢閒（生を貪るも千年の計を成す莫かれ，到了都て一夢の閑と成る）」，「閑」は「空」である。『汲古閣景鈔南宋六十家集』[50]周文璞[51]「瀬上貞女祠[52]」（『全宋詩』巻2832）「人間多少乗除事，到了英雄恨不消（人間 多少 乗除[53]の事，到了英雄も 恨みは消えず）」。また周弼[54]「四聖観」（『全宋詩』巻3149）「到了恩波攔不住，水窓游出放生魚（到了恩波攔るも住まらず，水窓[55]　游出す 放生[56]の魚）」。また鄭清之[57]「因筆記賊入空室頌（賊の空室に入る[58]を筆記するに因むの頌）」（『全宋詩』巻2904）「自言富可待，到了貧徹骨（自ら言う富は待つべしと，到了貧しきこと骨を徹す）」。晏殊[59]「漁家傲」其十一（『全宋詞』）「水泛落英何処去，人不悟[60]，東流到了無停住（水は落英を泛べ

て何処にか去く，人は悟らず，東流して到了停住する無きを）」。袁去華[61]「念奴嬌」其三（『全宋詞』）「身外紛紛，儻来適去，到了成何事（身外は紛紛として，儻来[62]して適去けば，到了何事をか成さん）」。また「劍器近」（『全宋詞』）「彩牋無数，去却寒暄，到了渾無定拠（彩牋[63]は無数なるも，寒暄を去却すれば，到了渾て定拠無し）」。王沂孫[64]「摸魚児」其一（『全宋詞』）「姑蘇台下煙波遠，西子近来何許？能喚否？又恐怕，残春到了無憑據（姑蘇台[65]下 煙波遠し，西子[66]近来 何許ぞ？能く喚ぶや否や？又た恐怕る，残春 到了憑據[67]無きことを）」。また「掃花游其四・緑陰」（『全宋詞』）「杜郎老去。算尋芳較晩，倦懐難賦。縦勝花時，到了愁風怨雨（杜郎は老い去る。尋芳[68]を算するも較晩く，倦懐は賦し難し。縦い花時に勝るも，到了愁風 怨雨となる）」。また「解連環・橄欖」（『全宋詞』）「崖蜜重嘗，到了輸他清絶（崖蜜[69]重ねて嘗むれば，到了他の清絶を輸る）」。（高橋）

5．到頭dàotóu

「到了」とほぼ同じ。王建[70]「花褐裘」（『全唐詩』巻301）「到頭須向辺城著，消殺秋風称猟塵（到頭 須く辺城に向かいて著れ，秋風を消殺して猟塵を称うべし）」。盧仝[71]「走筆謝孟諫議寄新茶（筆を走らせて孟諫議の新茶を寄するに謝す）」（『全唐詩』巻388）「便為諫議問蒼生，到頭還蘇息否？（便ち諫議の為に蒼生に問わん，到頭 還た蘇息を得るや否や？）」。羅隠[72]「始皇陵」（『全唐詩』巻655）「六国英雄漫多事，到頭徐福是男兒（六国の英雄 漫りに事多かれども，到頭 徐福[73]は是れ男兒なり）」。文同[74]「可笑口号七章（笑うべし口号）七章」（『全宋詩』巻441）「到頭官職難遷転，一似城南蕭次君（到頭 官職 遷転[75]し難し，一に城南の蕭次君[76]の似し）」。『汲古閣景鈔南宋六十家集』葛起耕[77]「支頤」（『全宋詩』3522）「到頭輸与山中叟，楽在耕鋤別不知（到頭 山中の叟に輸与[78]ばず，楽しみは耕鋤に在りて別に知らず）」。柳永[79]「法曲第二・偸期[80]」（『全宋詞』）「怎生向，人間好事到頭少（怎生向せん，人間 好事 到頭少なし）」。また「傾杯楽」（『全宋詞』）「算到頭誰与伸剖（算するも到頭誰と与に伸剖[81]せん）」。楊朝英[82]『楽府新編陽春白雪』[83]二・王観[84]「高陽台」（『全宋詞』）「朱衣引馬黄金帯，算到頭総是虚名（朱衣引馬 黄金帯，算するに到頭総て是れ虚名ならん）」。杜安世[85]「踏莎行」其三（『全宋詞』）「到頭終是悪因縁，当初只被多情誤（到頭 終に是れ因縁を悪む，当初 只だ多情を被るは誤れり）」。巾箱本『琵琶記』[86]二十六「正是善悪到頭終有報，只争来速与来遅（正に是れ善悪は到頭終に報い有り，只だ来たること速きと来たること遅きとを争うのみ）」。（高橋）

6．得dé

①「底，何，怎，那，豈」（どうして）の意味。反発した口調の語は，すべてこの意味に解される。杜甫「後苦寒行二首」其二（『全唐詩』巻222）「巴東之峡生凌澌，彼蒼回幹[87]人得知（巴東の峡 凌澌[88]を生じ，彼蒼[89]の回幹するも 人得ぞ知る）」，「得知」は「怎ぞ知る」である。また「次晩洲（晩洲に次る）」（『全唐詩』巻223）「中原未解兵，吾得終疏放（中原未だ兵を解かざるに，吾得に終に疏放せらる？）」，「吾得」は「吾豈に」で，中原に戦争が起きているのに，私はなぜ結局在野にいるのだという。陳師道[90]「送鄭祠部（鄭祠部を送る）」（『全宋詩』巻1119）「四著儒冠甘送老，数経奇運得銷憂？（四たび儒冠を著くるも老を送る[91]に甘んじ，数しば奇運を経れば得ぞ銷憂せん？）」，奇はすなわち李広の数奇の奇[92]で，厄運をいう。「得銷憂」は，「那ぞ銷憂せん」である。また「別三子（三子に別る）」（『全宋詩』巻1114）「汝哭猶在耳，我懐人得知？（汝の哭は猶お耳に在り，我 人を懐うも得でか知らん？）」，「得知」は「怎でか知らん」である。楊万里[93]「題王宣子新作吉州学前詠帰亭（王宣子が新たに作る吉州学の前の詠帰亭を作るに題す）」（『全宋詩』巻2276）「箇里諸賢高著眼，仕和不仕得相関？（箇里の諸賢 著眼高ければ，仕うると仕えざると得ぞ相い関わる？）」，「得相関」は，「哪ぞ相い干る」である。また「送廬山人（廬山の人を送る）」其二（『全宋詩』巻2276）「有穴[94]牛眠子為尋，剰将朽胔換華簪。家陌只免牛羊到，此外窮通得上心？（牛眠[95]を穴つこと有らば子は為に尋ね，剰つさえ朽胔を将いて華簪に換う。家陌 只だ牛羊の到るを免るれば，此の外 窮通[96]得ぞ心に上らん？）」，「得上心」は「那ぞ心に在らん」である。また「都下和同舎客李元老承信贈詩之韻（都下に同舎の客李元老承信が詩を贈るの韻に和す）」（『全宋詩』巻2278）「論交何必星霜久，白頭得似傾蓋友？（交を論ずること[97]何ぞ必ずしも星霜久しからん，白頭 得ぞ傾蓋の友に似かん）」，「得似」は，「怎ぞ似かん」である。また楊万里「詔追供職学省

暁発鳴山駅（詔により追われて学省[98]に供職し，暁に鳴山駅を発す）」（『全宋詩』巻2280）「帝城万事好，得似早還家？（帝城万事好ろしく，得ぞ早に家に還るに似かん？）」，意味は上の例に同じ。『汲古閣景鈔南宋六十家集』許棐[99]「閨怨」「恨君得似梁間燕？社日辞家社日帰（恨むらくは君得ぞ梁間の燕に似かん？社日[100]に家を辞し 社日に帰る）」，この「得似」は「那ぞ似かん」である。夫が帰ってこないことを恨んでおり，それは燕が家を出てから戻るのに決まった周期があるようではないのである。呉潜[101]「浪淘沙其一・和呉夢窗席上贈別（呉夢窗[102]が席上にて贈別するに和す）」（『全宋詞』）「得似『満庭芳』一曲，美酒千鍾？（得ぞ『満庭芳』一曲，美酒千鍾[103]に似かん？）」，この「得似」は，「何ぞ如かん」である。「歌一曲，酒千鍾は何如」という。

②語気助詞，動詞の後に用いる。杜甫「漫興九絶[104]」其二（『全唐詩』巻227）「恰似春風相欺得，夜来吹折数枝花（恰も似たり 春風の相い欺る得，夜来吹き折る数枝の花）」，黄庭堅「寄上叔父夷仲（叔父の夷仲に寄せ上る）」其三（『全宋詩』巻986）「更懐父子東帰得，手種江頭柳十尋（更に 父子東のかた帰り得るを懐いて，手づから江頭に柳を種うること十尋）」，「得」の字が「欺」字と「帰」字の後ろに続くのが通常の用法である。動詞と隔てる用法もある。杜甫「草堂即事」（『全唐詩』巻226）「蜀酒禁愁得，無銭何処賒（蜀酒愁いに禁え得るも，銭無くんば何れの処にか賒らん）」，これは憂いに耐えられることをいう。楊万里「霜寒轆轤体」其二（『全宋詩』巻2285）「誰能忍寒得，苦死去看書（誰か能く寒さを忍び得りて，苦死して書を看に去かん）」，これは寒さに耐え忍ぶことをいう。楊万里「送郷僧徳璘（郷僧の徳璘を送る）」其一（『全宋詩』巻2280）「不妨参透諸方得，別有宮墻第一層（不妨 諸方に参透[105]し得りて，別に有り 宮墻第一層）」。これは通暁していることをいう。また「和謝昌国送管相士韻（謝昌国の管相士を送るの韻に和す）」（『全宋詩』巻2279）「憐渠識尽公卿得，一馬帰来骨転高（渠を憐しむらくは公卿を識り尽くし得，一馬 帰り来たらば 骨[106]転た高からんことを）」，これは識り尽くすの意味。また黄庭堅「和張沙河招飲（張沙河の招飲に和す）」（『全宋詩』巻1004）「誰料丹徒布衣得，今朝忽有酒如川（誰か丹徒の布衣を料ら得，今朝忽ち酒の川の如き有り）」，これは誰が料り得るかという。陳与義[107]「後三日再賦（後三日，再び賦す）」（『全宋詩』巻1739）「不奈長安小車得，睡郷深処作奔雷（長安の小車を奈んともせざ得，睡郷の深き処 奔雷作る）」，これはどうしようもないことをいう。

③「使，讓」（～させる）の意味，動詞が介詞になる傾向が窺われる。杜甫「遣懐（懐いを遣る）」（『全唐詩』巻222）「憶与高李輩，論交入酒壚。両公壮藻思，得我色敷腴（憶う高李が輩と，交を論じて酒壚に入るを。両公藻思壮んにして，我を得て 色 敷腴たらしむ）」，「敷腴」は，『杜詩鏡銓』[108]巻14注「古楽府『顔色正敷腴』，言暢悦（古楽府に『顔色正に敷腴たり』と，暢悦なるを言う）」。末句は私の心を伸びやかにさせるという。仇兆熬注の『杜詩詳注』[109]巻16は「此叙高，李同游之興，三人相得，成千古文章知己（此れ高，李と同に游ぶの興あり，三人相い得て，千古の文章の知己と成るを叙す）」と解釈し，「得」の字を「相い得る」と解するが，その説は適切ではない。韓愈[110]「招楊之罘（楊之罘を招く）」（『全唐詩』巻340）「之罘南山来，文字得我驚（之罘 南山より来たり，文字 我をして驚か得む）」。白居易[111]「潯陽三題」其一「廬山桂」（『全唐詩』巻424）「無人為移植，得入上林園（人　為に移植し，上林園に入ら得むること無し）」，陳標[112]「黄蜀葵[113]」（『全唐詩』巻508）「能共牡丹争幾許？得人憎処只縁多（能く牡丹と共に争うこと幾許ぞ？人をして憎ま得むる処は只だ縁多きことのみ）」。陸亀蒙「薔薇」（『全唐詩』巻625）「倚墻当戸自横陳，致得貧家似不貧（墻に倚り戸に当たりて自ら横に陳び，貧家に致ら得むるも貧ならざるが似し）」も用法は同じで，「得我」「得人」は「我を使む」「人を使む」，「致得」は「致ら使む」である。王安石「北山」（『全宋詩』巻565）「細数落花因坐久，暖尋芳草得帰遅（細かに落花を教え因りて坐すること久しく，暖かきに芳草を尋ね帰ること遅から得む）」。楊万里「自声音[114]岩泛小舟下高渓（声音岩より小舟を泛べて高渓に下る）」（『全宋詩』巻1275）「舟穏何妨小，波恬爾許平。大魚不相報，抜刺得吾驚（舟穏やかなれば何ぞ小さきを妨げん，波は恬くして爾許[115]平らかなり。大魚相い報せざるも，抜刺[116]吾をして驚か得む）」。また「謝張功父送近詩集（張功父が近詩集を送らるるに謝す）」（『全宋詩』巻2313）「十年不夢軟紅塵，悩乱閑心得我嗔。両夜連翻[117]約斎集，双眸[118]再見帝城春（十年夢みず 軟紅の塵，閑心を悩乱し 我をして嗔ら得む。両夜 連翻す[119]約斎[120]の集，双眸 再び見る帝城の春）」。范成大[121]「送温伯帰福唐納婦且約復游霅川（温伯が福唐に帰りて婦を納るるを送り，且つ復た霅川に游ぶを約す）」（『全宋詩』巻2247）「扶藜処処従君賞，落筆時時得我驚（藜を扶けとして[122]処処 君に従いて賞で，落筆 時時 我をして驚か得む）」。また「送陳朋元赴溧陽（陳朋元の溧陽に赴くを送る）」（『全宋詩』

巻2251）「風流歳晩嫌杯酒，文字功深得鬢霜（風流 歳晩 杯酒を嫌い，文字 功深くして鬢をして霜なら得(し)む）」。また「白狗峡」（『全宋詩』巻2257）「俯窺得目眩，却立恐神驚（俯窺[123]すれば目を眩ま得(し)め，却立すれば恐れて 神をして驚かしむ）」，任二北『敦煌曲校録』[124] 伯3137「南歌子」「攀花折柳得人憎（花を攀じり柳を折りて人に憎まる）」。総じて私を如何にさせる，人を如何にさせる，鬢を白くさせる，目を眩ませるといっている。（高橋）

7．得得dédé

①特に。黄庭堅「減字木蘭花」（『全宋詞』）「中秋多雨，常是樽罍狼藉去。今夜雲開，須道姮娥得得来（中秋雨多く，常に是れ樽罍[125] 狼藉[126] し去る。今夜雲開き，須く姮娥得(と)得(く)に来たると道うべし）」，得得は一に「特特」（特別に，わざわざ）に作る，「得得」は「特特」である。姮娥が特別に来たという。王建「洛中張籍新居（洛中の張籍の新居）」（『全唐詩』巻300）「雲山且喜重重見，親故応須得得来（雲山且(まさ)に重重[127] として見(あら)わるるを喜ぶに，親故応(まさ)に須く得(と)得(く)に来たるべし）」。元稹「去杭州（杭州に去(ゆ)く）」（『全唐詩』巻421）「得得為題羅刹石，古来非独伍員冤（得(と)得(く)に為に羅刹の石[128] に題す，古来独だ伍員[129] の冤に非ざるのみ）」。貫休[130]「投王建（王建に投ず）[131]」「一瓶一鉢垂垂老，千水千山得得来（一瓶一鉢 垂垂として老い，千水千山 得(と)得(く)に来たる）」。蘇軾「再和楊公済梅花（再び楊公済の梅花に和す）十絶」其三（『全宋詩』巻816）「故応剰作詩千首，知是多情得得来（故に応に剰(な)お詩千首を作るべし，知る是れ多情の得(と)得(く)に来たるを）」。又た「出城送客不及歩至渓上（城を出でて客を送るも及ばず，歩みて渓上に至る）二首」其二（『全宋詩』巻796）「会作堂堂去，何妨得得来（会えば堂堂として去るを作し，何ぞ妨げん得(と)得(く)に来たるを）」。賀鑄[132]「減字木蘭花」其一（『全宋詞』）「鸞鏡佳人，得得濃妝様様新（鸞鏡の佳人，得(と)得(く)に妝濃く 様様新たなり）」。史浩[133]「青玉案其一・生日」（『全宋詞』）「一来人世，有縁相遇，得得為鴛侶（一たび人世に来たり，縁ありて相い遇い，得(と)得(く)に鴛侶と為る」。丘密[134]「水調歌頭其二・為趙漕徳荘寿（趙漕徳荘の為(ため)に寿(ことほ)ぐ）」（『全宋詞』）「九日明朝佳節，得得天教好景，供与酔時吟（九日明朝の佳節，得(と)得(く)に天は好景たらしめ，供与(とも)に酔いて時に吟ず）」。また「蝶恋花其一・為銭守寿（銭守の為(ため)に寿(ことほ)ぐ）」（『全宋詞』）「梅子著花当献寿。得得天工，有意還知否（梅子 花を著けて当に寿を献ず。得(と)得(く)に天工，意有るも還た知るや否や）」。張綱[135]「蝶恋花其一・安人生日（人の生日を安んず）」（『全宋詞』）「五日小春休屈指。花発西軒，早已(すで)伝春意。応為高堂に催燕喜，一枝得得来呈瑞（五日 小春 屈指を休めよ。花は西軒に発(ひら)き，早已(すで)に春意を伝う。応に高堂に燕喜を催すを為し，一枝 得(と)得(く)に呈瑞に来たるべし）」。辛棄疾[136]「満江紅其一・中秋」（『全宋詞』）「著意登楼瞻玉兎，何人張幕遮銀闕。倩飛廉得得為吹開，憑誰説（著意ありて 楼に登りて玉兎を瞻るに，何人か幕を張りて銀闕を遮らん。倩なる飛廉[137] は得(と)得(く)に吹開を為すも，誰に憑りてか説かん）」。以上にいう「得得」は，みな「特特」である。

②甘んじて屈しないことを表す。金・元代における市井の人の口語である。金刻『劉知遠諸宮調[138]』第一「高声一派，口中只道“得得！”両度三廻，不放了爾才（高らかにひとこえ「好し，好し」という。二度も三度もお前を逃がすまい）」。意味は，「高い声ひとこえ，口中でただ「好し，好し」という。二度三度までも，おまえのような悪者を逃がさないぞ」とのことである。

・［得］dé特にの意味，“得得”の略。『雍熙楽府』[139] 十二・無名氏「夜行船」套「憶所見」「眉尖上，眼挫側，先留下幾分恩愛。怕人知，得地裏佯不採（眉は上に尖(とが)り，眼は側に挫(くじ)かれ，先ず幾分かの恩愛を留下す。人に知らるるを怕れ，得(と)地裏(いつわ)に佯(ひとし)りて採(み)ず）」。「得地裏」は「特地裏」，「採」は「睬」である。（高橋）

8．等頭děngtóu

副詞で，一般にまたは同様にの意味。元稹「放言五首」其二（『全唐詩』巻413）「竹枝待鳳千茎直，柳樹迎風一向斜。総被天公霑雨露，等頭成長尽生涯（竹枝　鳳を待ちて千茎 直(なお)く，柳樹 風を迎えて一向(ひたすら)斜めなり。総(すべ)て 天公雨露を霑(うるお)われ，等頭(ひとし)く 成長して生涯を尽くす）」。竹と柳は等しく成長して衰えるに至るとの意味で，「等頭」と「総」の字は対応する。また「送東川馬逢侍御使四[140] 十韻（東川の馬逢侍御使を送る四十韻）」（『全

唐詩』巻406）「莫歎巴三峡，休驚鬢二毛。流年等頭過，人世各労労（歎く莫かれ巴三峡，驚くを休めよ鬢の二毛。流年等頭に過ぎ，人世各おの労労たり）」。白居易「勧行楽」（『全唐詩』巻451）「歓笑勝愁歌勝哭，請君莫道等頭空（歓笑は愁うるに勝り歌うは哭くに勝る，君に請う 等頭に空しと道う莫かれと）」。また「喜夢得自馮翊帰洛兼呈令公（夢得の馮翊より洛に帰るを喜び，兼ねて令公に呈す）」（『全唐詩』巻456）「甲子等頭憐共老，文章敵手莫相猜（甲子 等頭に共に老ゆるを憐れむも，文章 敵手 相い猜う莫し）」。作者白居易には別に「七年元日対酒（七年元日酒に対す）五首」（『全唐詩』巻454）があり，其四「夢得君知否，倶過本命年（夢得 君知るや否や，倶に過ぐ本命の年）」の二句の自注に「余与蘇州劉郎中同壬子歳，今年六十二（余は蘇州の劉郎中と同じく壬子の歳にして，今年六十二なり）」とあるので，「甲子等頭」とはつまり年齢が同じという意味だと分かる。

㊟旧版の『辞源』「等頭」の条は元稹「放言」を引いて「等閑」の意味と解するが，劉淇『助字辨略』[141] もまたこの例を引いて「一般」の意味に解する。二説を比較すると『助字辨略』が正しい。（高橋）

9．等閑děngxián

普段，随意に，故なく。張謂[142]「湖上対酒行」（『全唐詩』巻197）「眼前一尊又長満，心中万事如等閑（眼前 一尊 又た長えに満たし，心中 万事 等閑の如し）」，これは普段の意味。白居易「重答劉和州（重ねて劉和州に答う）」（『全唐詩』巻447）「随分笙歌聊自楽，等閑篇詠被人知（分に随[143] いて笙歌 聊か自ら楽しみ，等閑なる篇詠[144] 人に知らる）」，これも普段の意味。また「新昌新居書事四十韻因寄元郎中張博士（新昌の新居にて事を書す四十韻，因りて元郎中，張博士に寄す）」（『全唐詩』巻442）「等閑栽樹木，随分占風煙（等閑に樹木を栽え，分に随いて風煙を占む）」，これは気ままにの意味。劉禹錫[145]「竹枝詞九首」其七（『全唐詩』巻365）「長恨人心不如水，等閑平地起波瀾（長く恨む 人心の水に如かざるを，等閑く平地に波瀾起こる）」，これは理由無くの意味。皮日休「襄州春游」（『全唐詩』巻613）「等閑遇事成歌詠，取次衝筵隠姓名（等閑に事に遇いては歌詠を成し，取次[146] に筵を衝[147] いて姓名を隠す）」，これは気ままにの意味。章碣[148]「城南偶題」（『全唐詩』669）「野水不知何処去，遊人却是等閑来（野水は知らず 何処に去くかを，遊人 却つて是れ 等閑に来たる）」，これはいつも通りに来るとの意味，または普段の意味。朱熹「春日」（『全宋詩』巻2384）「等閑識得東風面，万紫千紅総是春」（等閑に識り得る東風の面，万紫 千紅[149] 総じて是れ春なり），これはなんとはなしにの意味，なんとなく春風の様子を感じられるという。また「丙辰正月三日贈彭世昌帰山（丙辰正月三日，彭世昌の山に帰るに贈る）」（『全宋詩』巻2391）「好去山頭且堅坐！等閑莫要下山来（好し山頭に去きて且く堅く坐せ！等閑に下山して来たるを要むる莫かれ）」，これは随意に，故無くのどちらにも解せる。気ままに下山してくるな，或いは理由なく下山するなという。毛熙震[150]「菩薩蛮」其二（『全唐五代詞』[151]）「光影暗相催，等閑秋又来（光影暗かに相い催し，等閑く秋又た来たる）」，これは故無くの意味。欧陽脩[152]「南柯子・鳳髻金泥帯」（『全宋詞』）「等閑妨了綉工夫，笑問双[153] 鴛鴦字怎生書（等閑く妨げ了る 綉工夫[154]，笑いて問う 双鴛鴦の字は怎生書くると）」，これも故無くの意味。王千秋[155]「菩薩蛮・荼蘼[156]」（『全宋詞』）「莫浪送香来，等閑蜂蝶猜（浪りに香りを送り来たる莫かれ，等閑く蜂蝶猜わん）」。また「漁家傲・簡張徳共」（『全宋詞』）「病起日長無意緒，等閑還与春相負（病より起くるも日長くして意緒無く，等閑く還つて春と相い負く）」。邵亨貞[157]「追和趙文敏公旧作（趙文敏公の旧作に追和す）十首」其六・蝶恋花（『全金元詞』[158]）「忽見呢喃華屋底，等閑牽動離人泪（忽ち見る 呢喃[159] 華屋の底，等閑く牽動す 離人の泪）」，みな故無くの意味。劉弇[160]「宝鼎現」（『全宋詞』）「取次台榭，等閑院落（取次なる台榭，等閑なる院落）」，これは「取次」と対句なので随意の意味。周邦彦[161]「大酺・越調春雨」（『全宋詞』）「怎奈向蘭成憔悴[162]，楽広[163] 清羸，等閑時易傷心目。未怪平陽客，双涙落笛中哀曲。（怎奈向せん蘭成[164] 憔悴し，楽広[165] は清羸なれば，等閑なる時にも心目[166] を傷い易し。未だ怪しまず平陽の客[167] の，双涙　笛中の哀曲に落つるを[168]）」，これは通常の意味，心配性の人は普段から感じやすいのだから，ましてや悲しい曲を聴けば泣くのは当然であるという。岳飛[169]「満江紅・写懐」（『全宋詞』）「莫等閑白了少年頭，空悲切（等閑に少年の頭を白くし了りて，空しく悲切せしむる莫かれ）」，これは故無くまたは随意にの意味。（高橋）

10. 的 dí

必ずまたは確実に，定めて，究めて。柳永「安公子」其二（『全宋詞』）「雖後約的有于飛願，奈片時難過，怎得如今便見（後約ありと雖も的かに于飛の飛ぶを願い有り，奈んぞ片時過ぎ難く，怎得ぞ 如今便ち見えん）」，「的有」とは，必ずまたは確実にあるの意味。賀鑄「点絳唇」（『全宋詞』）「掩妝無語，的是銷凝処（妝を掩[170]いて語る無し，的かに是れ銷凝の処なり）」，「的是」は「確かに是れ」である。沈端節[171]「五福降中天（五福 中天に降ず）・梅」（『全宋詞』）「他時恨悵，却月凌風[172]，信音難的（他時 恨悵す，却月 風を凌ぎ，信音[173]的かにし難し）」，「難的」は「確かにしにくい」である。白居易「出斎日喜皇甫十早訪（出斎の日，皇甫十の早く訪うるを喜ぶ）」（『全唐詩』巻459）「除却朗之携一榼，的応不是別人来（朗之[174]の一榼[175]を携うるを除却すれば，的めて応に是れ別人の来たらざるべし）」，「的応」は，「定めて応に」である。また「百日假満（百日の假満つ）」（『全唐詩』巻447）「但払行衣[176]莫回顧，的無官職趁人来（但だ行衣を払いて行きて回顧する莫かれ，的めて官職の人を趁いて来たること無し）」，「的無」は，「定めて無し」である。また「雪中晏起偶詠所懐兼呈張常侍韋庶子皇甫郎中（雪中晏く起きて偶たま懐う所を詠じ，兼ねて張常侍，韋庶子，皇甫郎中に呈す）」（『全唐詩』巻453）「上無皋陶伯益廊廟材，的不能匡君輔国活生民（上は皋陶伯益の廊廟の材無く，的めて君を匡し国を輔けて生民を活かす能わず）」，「的不能」は，「定めて能わず」である。蘇軾「光禄庵」（『全宋詩』巻14）「城中太守的何人？林下先生非我身（城中の太守 的めて何人ぞや？林下の先生は我が身に非ず）」，「的何人」は，「究めて何人」である。劉克荘「送孫季蕃（孫季蕃を送る）」（『全宋詩』巻3034）「家在呉中処処移，的於何地結茅茨？（家は呉中に在るも処処に移れば，的めて何れの地に於いて茅茨を結ばん？）」，結局どこにあるのかという。また「羅湖八首」其三（『全宋詩』巻3044）「不知的在山中否？万一帰来説内篇（知らず的めて山中に在りや否や？万一帰り来たらば『内篇』[177]を説かん）」，結局山中にいるのかどうかという。別に156頁の「的」を見よ。（高橋）

11. 东西 dōngxī

動詞，奔走する，あるいは逃亡するの意味。孟浩然[178]「久滞越中貽謝南池会稽賀少府（久しく越中に滞りて謝南池，会稽の賀少府に貽る）」（『全唐詩』巻160）「陳平無産業，尼父倦東西（陳平 産業無く，尼父倦みて東西す）」。李華[179]「雲母泉」（『全唐詩』巻153）「曾結潁陽契，窮年無所成。東西同放逐，蛇豕尚縦横（曾て潁陽の契りを結ぶも，年窮まりて成す所無し。東西して同に放逐せられ，蛇豕尚お縦横す）」，二例とも奔走することをいう。杜甫「無家別」（『全唐詩』巻217）「我里百余家，世乱各東西。（我が里百余家，世乱れて 各おの東西す）」。耿湋[180]「雨中留別」（『全唐詩』巻268）「東西無定客，風雨未休時（東西して定まる無きの客，風雨未だ休まざる時）」。盧綸[181]「春江夕望」（『全唐詩』巻280）「東西兄弟遠，存歿友朋稀（東西して兄弟遠く，存歿して友朋 稀なり）」，また「雪謗後書事上皇甫大夫（雪謗の後，事を書して皇甫大夫に上る）」（『全唐詩』巻278）「東西遭世難，流浪識交情（東西して世に遭うこと難く，流浪して交情を識る）」。李端[182]「送客東帰（客の東のかた帰るを送る）」（『全唐詩』巻284）「行人相見便東西，日暮渓頭飲馬別（行人相い見えて便ち東西し，日暮 渓頭 飲馬別る）」。李賀[183]「摩多楼子」（『全唐詩』巻393）「行人聴[184]水別，隔壠長東西（行人 水を聴きて別れ，壠を隔てて長に東西す）」。范成大「送遂寧何道士自潭湘帰蜀（遂寧の何道士が潭湘より蜀に帰るを送る）」其一（『全宋詩』巻2247）「塵埃波浪幾東西，帰去丹瓢挂杖藜（塵埃 波浪 幾たびか東西し，丹瓢に帰り去りて 杖藜を挂く）」。楊万里「観水嘆二首」其一（『全宋詩』巻2300）「眷然慨此水，念我年少時。迄今四十年，往来九東西（眷然として此の水を慨き，我が年少の時を念う。今に迄るまで四十年，往来九たび東西す）」，また「帰去来兮引」（『全宋詞』）「正坐瓶無儲粟，漫求為吏東西（正坐して瓶に儲粟無く，漫りに吏と為ることを求めて東西す）」。

㊟この「東西」の意味は六朝の詩中にしばしば見られる。晋・陶淵明[185]「答龐参軍（龐参軍に答う）」（『先秦漢魏晋南北朝詩[186]』晋詩巻16）「我実幽居士，無復東西縁（我実に幽居士なれば，東西の縁を復すること無し）」，東西の縁とは奔走して官途の道を捜すこと。南朝宋・鮑照[187]「贈傅都曹別詩（傅都曹の別るるに贈るの詩）」（『先秦漢魏晋南北朝詩』宋詩巻8）「風雨好東西，一隔頓万里（風雨好に東西し，一たび隔たれば頓に万

里なり)」，句中の「好」は正に，恰もの意味。陳・沈炯[188]「詠老馬（老馬を詠ず)」(『先秦漢魏晋南北朝詩』陳詩巻1)「昔日従戎陣，流汗幾東西。一日馳千里，三丈拔深泥（昔日戎陣に従い，流汗して幾たび東西せり。一日 千里を馳せ，三丈 深泥を抜く)」，またこの意味は唐代の詔令または民間の文書に見られる。『唐会要』[189]逃戸の条に大中二年の制を記録して「所在逃戸，見在桑田屋宇等，多有暫時東西，便被隣人与所由等計会，推云代納税銭，悉将砍伐毀折。及願帰復，多已蕩尽（逃戸の在る所は，桑田屋宇等の在るを見るに，暫時東西するもの有ること多し，便ち隣人に所由[190]等と与に計会せられ，税銭を代するを推(すす)めて云うも，悉く将って砍伐毀折す。帰復せんことを願うに及び，已に蕩尽すること多し)」という。詳しくは『敦煌文献語言詞典』[191]及び『唐五代語言詞典』[192]を見よ。「東西」のこの用法は，由来はいわゆる「単語の影響による意味」かもしれない。「東西」はもともと奔走逃亡するその方位を指したが，常に奔走する意味の語と一緒に用いられたために，東西の語自体がその意味を得た。漢・賈誼[193]「鵩鳥賦」(『文選』巻13)「怵迫之徒兮，或趨東西（怵迫せらるるの徒，或いは東西に趨る)」，『文選』李善注の引く孟康「怵，為利所誘怵也。迫，貧賤也。東西，趨利也（怵は，利の為に誘怵せらるる所なり。迫は，貧賤なり。東西は，利に趨るなり)」。(高橋)

12. 都 dōu

①副詞，かえっての意味，多くは複文の下の句について語気を表す。杜甫「可惜（惜しむべし)」(『全唐詩』巻226)「花飛有底急，老去願春遅。可惜歓娯地，都非少壮時（花飛ぶこと底(なん)の急か有る，老い去れば春の遅からんことを願う。惜しむべし歓娯の地の，都(かえ)つて少壮の時に非ざるを)」，「都非」は「却不是」の意味。白居易「歳暮道情二首」其一（『全唐詩』巻438)「壮日苦曾驚歳月，長年都不惜光陰。為学空門平等法，先斉老少死生心（壮日苦(はなは)だ曾(すなわ)ち歳月に驚く，長年都(かえ)つて光陰を惜しまず。空門平等の法を学ぶが為に，先づ老少の死生の心を斉(ひと)しくすきの心を先んずるが為なり)」，少壮の時は歳月が過ぎゆくのを怖れるに足るが，年を取ると老いも若きもみな等しく死ぬという仏法を学ぶために光陰を惜しまなくなるとの意味。また「繡帰奴[194]」(『全唐詩』巻448)「雖凭繡牀都不繡，同牀繡伴得知無（繡牀に凭(よ)ると雖も都(かえ)つて繡(ぬいとり)せず，同牀の繡伴 知るを得るや無(いな)や)」。元稹「夜閑」(『全唐詩』巻404)「感極都無夢，魂銷転易驚。(感極まれば都(かえ)つて夢みる無く，魂銷けて転(うたた)驚き易し)」，「小序」に「此後并悼亡（此の後并せて悼亡す)」とある。また「贈[195]盧秘書（盧秘書に贈る)」(『全唐詩』巻407)「偶有衝天気，都無処世才（偶たま天を衝く気有るも，都(かえ)つて処世の才無し)」。武元衡[196]「南昌灘」(『全唐詩』巻317)「物色可憐心莫限，此行都是独行時（物色憐れむべし心の限り莫きを，此の行都(かえ)つて是れ独行の時)」，按ずるにこの詩は一に元稹の詩に作り，「限」の字を「恨」に作る，意味はそのほうが勝る。楊万里「謝趙行之惠霜柿（趙行之が霜柿を恵まるるに謝す)」(『全宋詩』巻2285)「核有都無底，吾衰喜細嘗（核有るも都(かえ)つて底無く，吾れ衰うれば細嘗を喜ぶ)」，「底」の字は「蔕」の字かもしれない，とすれば二句の意味は柿には核があるが蔕が無いということになる。『永楽大典戯文三種』[197]「張協状元」四「夜来夢見一条蛇兒，都是龍的頭角（夜に一匹の蛇を夢見たが，それはなんと龍の頭だった)」。

②転折する複文の上の句について「并, 絶」(決して）の意味を表す。崔顥「贈懐一上人（懐一上人に贈る)」(『全唐詩』巻130)「入講鳥常狎，坐禅獣不侵。都非縁未尽，曾是教所任（入講すれば鳥常に狎れ，坐禅すれば獣侵さず。都(た)えて縁の未だ尽くさざるに非ず，曾ち是れ任す所を教う)」，張籍「詠懐」(『全唐詩』巻384)「望月偏増思，尋山易発労。都無作官意，頼得在閑曹（月を望みては偏えに思いを増し，山を尋ねては労を発し易し。都(た)えて官と作るの意無く，頼得(さいわい)に閑曹に在り)」，楊衡[198]「題華樹（華樹に題す)」(『全唐詩』巻465)「都無看花意，偶到樹辺来（都(た)えて花を看るの意無く，偶たま樹辺に到り来たる)」，これは首聯にかかると思われる。

③時間副詞で尚お，却っての意味，多くは「未」の字と連用する。動作の状態がまだ発生していないことを示す。岑参[199]「故僕射裴公挽歌三首」其三（『全唐詩』巻200)「富貴徒言久，郷閭殁后帰。錦衣都未着，丹旐忽先飛（富貴 徒言久しかれども，郷閭 殁后帰す。錦衣都(な)お未だ着けざるに，丹旐[200]忽ち先に飛ぶ)」。韓愈「春雪」(『全唐詩』巻343)「新年都未有芳華，二月初驚見草芽（新年都(な)お未だ芳華有らず，二月初めて草芽を見るを驚く)」。白居易「新居早春二首」其一（『全唐詩』巻442)「漸暖宜閑歩，初晴愛小園。覓花都未有，唯

覚樹枝繁（漸く暖くして閑歩するに宜しく，初めて晴れて小園を愛す。花を覓(もと)むるも都(な)お未だ有らず，唯だ樹枝の繁るを覚ゆ）」。また「初与元九別後忽夢見之及寤而書適至兼寄桐花詩悵然感懐因以此寄（初めて元九と別れし後忽ち夢に之を見る。寤(さ)むるに及びて書適たま至り，兼ねて桐花の詩を寄す。悵然として懐を感じ，因りて此を以て寄す）」（『全唐詩』巻432）「上論遷謫心，下説離別腸。心腸都未尽，不暇叙炎凉（上に論ず遷謫の心，下に説く離別の腸。心腸都(な)お未だ尽きず，炎凉を叙するに暇あらず）」，以上はみな「未」の字と連用する例で，「都未」は「尚お未だ」「還没有（まだ～ない）」の意味である。杜牧[201]「送沈処士赴蘇州李中丞招以詩贈行（沈処士の蘇州の李中丞の招くに赴くを送り，詩を以て贈行す）」（『全唐詩』巻520）「因書問故人，能忘批紙尾？公或憶姓名，為説都憔悴（書に因りて故人を問わん，能く紙尾を批するを忘るるか？公或いは姓名を憶えば，為に都(な)お憔悴るを説かん）」，これは「未」の字と連用しない例である。「都憔悴」はなお不遇であるとの意味である。この詩は作者の若い頃の作品で，監察御史の任から病気により洛陽に分司した時の作なので，このような語があるのである。（高橋）

13. 斗 dǒu

「陡」（にわかに）と同じ，頓である。杜甫「義鶻行[202]」（『全唐詩』巻217）「斗上捩孤影，噭哮来九天（斗(にわか)に上りて孤影を捩(よじ)り，噭哮して九天に来たる）」。韓愈「答張十一功曹（張十一功曹に答う）」（『全唐詩』巻343）「吟君詩罷看双鬢，斗覚霜毛一半加（君が詩を吟じ罷(お)うれば双鬢を看，斗(にわか)に覚ゆ霜毛一半加わるを」。また「郴口又贈（郴口にて又た贈る）二首」其一（『全唐詩』巻343）「山作剣攢江写鏡，扁舟斗転疾於飛（山は剣攢を作(な)して江は鏡を写す，扁舟斗(にわか)に転ずれば飛ぶより疾し）」。また「陪杜侍御遊湘西両寺独宿有題一首因献楊常侍（杜侍御の湘西の両寺に遊ぶに陪し，独り宿りて題する有り一首，因りて楊常侍に献ず）」（『全唐詩』巻337）「況当江闊処，斗起勢匪漸（況んや江の闊き処に当たりては，斗(にわか)に起くる勢いは漸くに匪ず）」。方干[203]「自縉雲赴郡渓流百里軽棹一発曾不崇朝叙事四韻寄献段郎中（縉雲より郡に赴き，渓流百里，軽棹一たび発し，曾て崇朝せずして事を叙す四韻，段郎中に献じて寄す）」（『全唐詩』巻650）「仰瞻青壁開天罅，斗転寒湾避石稜（青壁を仰瞻せば天罅開き，斗(にわか)に寒湾に転じて石稜を避く）」。蘇軾「四時詞四首」（『全宋詩』巻804）「黄昏陡覚羅衾薄（黄昏 陡(とみ)に覚ゆ羅衾の薄きを）」，「陡」は一に「斗」に作る。陳師道「題明発高軒過図（明に高軒を発して過ぐるの図に題す）」（『全宋詩』巻1119）「平湖遠嶺開精神，斗覚文字生清新（平湖 遠嶺精神開かれ，斗(にわか)に覚ゆ文字の清新を生ずるを）」。舒亶[204]「蝶恋花」（『全宋詞』）「短鬢潘郎，斗覚年華換（短鬢の潘郎，斗(にわか)に覚ゆ年華換うるを）」。辛棄疾「永遇楽」（『全宋詞』）「又何事催詩雨急，片雲斗暗（又た何事ぞ詩を催すに雨急なる，片雲斗(にわか)に暗し）」，以上の斗の字は，すなわち陡(とう)である。辛棄疾「賀新郎其四・題伝巖叟悠然閣（伝巖の叟の悠然閣に題す）」（『全宋詞』）「斗頓南山高如許，是先生，拄杖帰来後（斗頓(にわか)に南山高きこと許の如し，是れ先生，杖を拄けて帰り来たる後）」。趙長卿[205]「酔落魄・初夜感懐」（『全宋詞』）「不応斗頓音書絶。煙水連天，何処認紅葉（応ぜず斗頓(にわか)に音書絶う。煙水天に連なり，何処くにか紅葉を認めん）」。斗と頓の字を連用するのは，同じ意味を重ねて用いているのである。（高橋）

14. 都大 dūdà

もとより，もとはの意味。元稹「有所教」（『全唐詩』巻422）「人人総解争時勢，都大須看各自宜（人人総(す)べて時勢を争うを解するも，都大(もと)須く各自宜しきを看るべし）」，これはもとはという。また「和楽天題王家亭子（楽天が王家の亭子に題するに和す）」（『全唐詩』巻415）「風吹笋籜飄紅砌，雨打桐花盖緑莎。都大資人無暇日，泛池全少買池多（風は笋籜に吹きて紅砌に飄り，雨は桐花を打ちて緑莎を蓋(おお)う。都大(もと) 資人に暇日無く，池に泛ぶこと全て少なく池を買うこと多し）」，これはもとはという。また「酬楽天得微之詩知通州事因成（楽天が微之の詩を得て通州の事を知るに酬い，因りて成る）四首」其二（『全唐詩』巻416）「平地才応一頃余，閣欄都大似巣居（平地才(わず)かに一頃余に応(あた)り，閣欄 都大(もと)より 巣居に似(に)たり）」，これはもとよりという。自注に「巴人[206]架木為居，自号閣欄頭（巴人は木を架けて居と為し，自ら閣欄頭と号す）」という。杜牧[207]「雲」（『全唐詩』巻694）「尽日看雲首不回，無心都大似無才（尽日雲を看て首(こうべ)を回(めぐ)らさず，無心なるは都大(もと)より無才の似(ごと)し）」，これはもとはという。来鵬[208]「鄂渚清明日与郷友登頭陀山（鄂渚にて清明の日，郷友と頭陀山に登

る)」(『全唐詩』巻642)「都大此時深悵望，豈堪高処更逡巡（都大より 此の時悵望すること深ければ，豈に堪えん高処更に逡巡するを)」，これはもとよりという。杜荀鶴[209]「別四明鍾尚書（四明鍾尚書に別る)」(『全唐詩』巻692)「都大人生有離別，且将詩句代離歌（都大より人生に離別有り，且く詩句を将いて離歌に代えん)」，これはもとはという。邵雍「有客吟」(『全宋詩』巻364)「枉尺直尋何必較，此心都大不求全（枉尺直尋[210]何ぞ必ずしも較べん，此の心都大より全きを求めず)」，これはもとよりという。(高橋)

15. 都盧 dūlú

全て，またはしかし。「都来」とほぼ同じ。白居易「贈隣里往還（隣里の往還に贈る)」(『全唐詩』巻451)「骨肉都盧無十口，粮儲依約有三年（骨肉 都盧 十口無く，粮儲依約三年有り)」，これは全てという。盧仝「守歳二首」其二（『全唐詩』巻387)「老来経節臘，楽事甚悠悠。不及兒童日，都盧不解愁（老来 節臘を経て，楽事 甚だ悠悠たり。兒童たりし日に及ばざれば，都盧愁い解けず)」，これは一切という，また全ての意味。薛濤[211]「斛石山書事（斛石山にて事を書す)」(『全唐詩』巻803)「王家山水画図中，意思都盧粉墨容。今日忽登虚境望，歩揺冠翠一千峰（王家の山水 画図の中，意思[212]都盧 粉墨の容なり。今日忽ち虚境に登りて望めば，歩揺冠翠　一千峰)」，これは「しかし」の意味。画中に見える斛石山は粉墨の姿だが，実際の地で一望して初めて歩揺冠翠のすばらしさが分かるという。賀鋳「送周開祖出守鄱陽（周開祖の出でて鄱陽に守たるを送る)」(『全宋詩』巻111)「鄱陽不乏江山助，高興都盧属謝公（鄱陽は乏しからず江山の助，高興 都盧 謝公に属す)」，これはつまり結局，またはしかしの意味。范成大「甲辰人日病中吟六言六首以自嘲（甲辰 人日[213]病中にて，六言六首を吟じ以て自ら嘲る)」其六（『全宋詩』巻2264)「壮歳喜新節物，老来惜旧年華。病後都盧不問，家人時換瓶花（壮歳 喜ぶ新節の物，老来 惜しむ旧の年華。病後 都盧問わず，家人 時に換う瓶の花)」，すべて問わないの意味。『五灯会元』[214]十五・徳山縁密禅師「会与不会，都盧是錯（会うと会わざると，都盧是れ錯なり)」，語法はこれと同じなので傍証になる。(高橋)

16. 敢 gǎn

①べし，またはしかしと同じ。皮日休「泰伯廟」(『全唐詩』巻615)「一廟争祠両譲君，幾千年後転清氛。当時尽解称高義，誰敢教他莽卓聞（一廟　争ぞ両譲君を祠らん，幾千年の後　転た清氛。時に当たりて尽く解して高義を称す，誰ぞ他をして卓聞に莽わしむ敢し)」，「誰」はどうしての意味。「誰敢」は那ぞ～べしのこと。『董解元西廂記』巻一「数幅花箋，相思字写満，無人敢暫伝（数枚の花箋に思いのたけを告げる文字は満ちても，伝えてくれるべき人もなし)」，これは伝えてくれる人がいないことを言っている。「暫」はちょっとの意味。762頁の「暫」を参照。『西廂記』第四本第一折「試教司天台打算半年愁，端的太平車敢道十余載[215]（司天台にかけるこの半年の愁いを数えれば，太平車に積み込んで十台あまりにもなるほどでしょう)」，「太平車」とは貨物を積む大きな車のこと。「道」は148頁の「道」を参照。悩みを大きな車に乗せれば，十台分以上の数にもなることをいう。鄭光祖[216]『傷梅香騙翰林風月』(『全元曲』) 第三折「白敏中云，小生敢去也不敢去。正旦云，先生，你去不妨（白敏中がいうに，私は行くべきでしょうか。正旦がいうに，先生，行ってもかまいません)」，これは行くべきか行かざるべきかとのこと。無名氏『羅李郎大鬧相国寺』(『全元曲』) 第三折「正末云，我待捨些飯与他毎喫，哥哥，可是敢麽。甲頭云，那裏不是積福処，則（只）管舎，不妨事（正末がいうに，私は彼に食事をもてなそうと思います，兄さん，どうすべきでしょうか。甲頭がいうに，それは福を積むことだから，とにかくもてなすべきだ)」，この「敢麽」の「敢」は，可否の可である。以上は「べし」の意味。元稹「寄劉頗（劉頗に寄す）二首」(『全唐詩』巻413) 其一「唯愛劉君一片胆，近来還敢似人無（唯だ愛す 劉君一片の胆，近来 還た敢って人に似るや無きや)」，「還敢」はやはり，しかしの意味。「似人」は普通の人と同じ意味。『董解元西廂記』巻四[217]「解元聴分弁。你便做摟荒，敢不開眼（旦那様お聞きください。慌てて抱き着かれたとしても，目を開けないでください)」，これは急に抱き着かれて慌てててても，目をつぶり相手を見ないでくれということ。これは張生が不意に紅娘に抱き着かれて仲良くなったとき，紅娘が張生をなじった言葉。李行甫[218]『包待制智賺灰闌記』(『全元曲』) 第一折「自喪了親爺擲下箇娘，偏你敢不姓張，怎教咱辱門敗戸的妹子去支当（父親が娘を棄てたならば，かえって張を名乗らないのか。どうして娘を棄てるの

か？）」，これは張海棠がその兄の張林の言葉を責め，お前は張の姓ではないのかという意味。白樸[219]『唐明皇秋夜梧桐雨』（『全元曲』）第二折「那些個斉管仲鄭子産？敢待做假忠孝龍逢比干（奴のどこが斉の管仲，鄭の子産か？かえってせいぜい忠臣顔をした龍逢か比干[220]か）」，これは偽の忠孝を尽くしているではないかという意味。楊朝英『楽府新編陽春白雪』後集巻二，無名氏「賞花時　只為多情（花を賞ずる時　只だ多情を為す）」に「忽見人来敢是他，只恐有争差。咨咨認了，正是那嬌娃（忽ち見る　人の来たれるは敢って是れ他なるを，只だ恐る　争差[221]有るを。咨咨として認め了われば，正に是れ那の嬌娃なり）」，「敢是他」は，～ではなく彼であるという意味。「咨咨」は「孜孜」と同じく，子細の意味。佚名『走鳳雛龐掠四郡[222]』第三折「孔明云，張飛。你取首級如何。張飛云，我殺了龐士元也。孔明云，敢不是麽。張飛云，他説道正是県令，我怎肯錯殺了別人（孔明がいうには，張飛よ，お前は首を取ったのか？張飛がいうには，俺は龐士元を殺してやった。孔明がいうには，本当に間違いないのか？張飛がいうには，彼は確かに県令だ。俺が他人を間違って殺そうか）」，「敢不是」はこの人に違いないという意味である。劇の流れによれば，このとき龐士元は耒陽の県令であった。「肯」は359頁の「肯」を参照。以上はかえっての意味。

②きっとに同じ。正に，准に，定めて。李覯[223]「階基[224]」（『全宋詩』巻350）「誰曽羅襪双来上，多謝蒼苔久不離，従此便成貧景致，竹簾垂処敢相宜（誰か曽て羅襪を双べ来たりて上る，蒼苔の久しく離れざるを多謝す，此より便ち貧なる景致と成り，竹簾　垂るる処　敢に相い宜しうす）」，「敢相宜」とはぴったり一致するの意味。無名氏『金水橋陳琳抱粧盒』（『全元曲』）第四折「敢可便抱定粧盒，背却宮娥，疾行前去。不防他劉太后劈頭相遇。（ちょうど粧盒を抱えて宮女と別れて急いで進んだが，はからずも劉大后に出くわしてしまった）」，「可便」は語気助詞である。ちょうど粧盒を抱いて走っていた時，ばったり劉太后に出会ったという意味。佚名『呂純陽点化度黄龍[225]』第一折「更有一黄龍禅師，此僧十分戒行精厳，善通経典，今日敢講説大乗妙法哩（黄龍禅師は十分に修行を積み，経典に精通し，本日ちょうど大乗妙法を唱えられる）」，今日ちょうど大乗妙法を講じていたという意味。関漢卿[226]『包待制智斬魯斉郎』（『全元曲』）第一折「恁時節，帯鉄鎖，納贓銭。那其間敢売了城南金谷園（その時には鉄鎖をつけて，お賽銭を納めよ。その時は確かに城南の金谷園は売られるべき）」，この「敢」の字は准にの意味で，確かに荘園を売り払ったの意味。曹組[227]「品令」（『全宋詞』）「促織児声響雖不大，敢教賢，睡不著（促織[228]児　声響大ならずと雖も，敢に賢らしめば，睡り著かず）」，これはまるで眠れないほどにうるさいこと。喬吉[229]『玉簫女両世姻縁』（『全元曲』）第二折「旦云，梅香。我恰才待睡一会，是甚麽驚覚我来。梅香云，姐姐。不是這窓前花影，敢是那楼外鶯声（旦云うに，梅香よ，私はしばらく眠りたかったが，何が目を覚まさせたのだろか。梅香がいうに，姐さん，それは窓前の花の影でなければ，きっと楼外のウグイスの声でしょう）」，「敢是」はまるで，あるいはきっとであり，甲でなければきっと乙の意味で，二つのうちどちらかが必ずあるという意味。無名氏『朱太守風雪漁樵記』（『全元曲』）第二折「嗨，他真個去了！他這一去，心裏敢有些怪我哩（ああ，彼は本当に行ってしまった！行ってしまって，心の中できっとがめているでしょう）」，これはきっと私を責めていることをいう。無名氏『金水橋陳琳抱粧盒』（『全元曲』）第四折「俺則道這回定把機関露，敢陳琳也不知死所（そのからくりは必ず露見し，きっと陳琳も死ぬ所も知らない）」，前文節の「定」と後文節の「敢」は互文である。賈仲名[230]『荊楚臣重対玉梳記』（『全元曲』）第一折「和他笑一笑，敢忽的軟了四肢，将他靠一靠，管烘的走了三魂（あの人と笑えば，きっとたちまち四肢は萎え，あの人に寄り添えば，必ずや三魂は去る）」，「管」もきっとの意味で「敢」と「管」が互文である。関漢卿『閨怨佳人拝月亭』（『全元曲』）第四折「您的管夢回酒醒誦詩篇，俺的敢灯昏人静誇征戦（お前の主人はおそらく夢の中で酒でも飲んで詩を詠み，俺の主人はおそらく灯りをともして戦功を誇っている）」，意味は同上。劇の流れによれば，「您的」は「おまえの旦那は」の，「俺的」は「おれの旦那は」の意味でそれぞれ省略されて，「您的，俺的」としている。また「多敢是」を見よ。

③できる。肯えて。陶潜「栄木」（『陶淵明集』巻一）「脂我名車，策我名驥，千里雖遥，孰敢不至（我が名車に脂し，我が名驥に策たん，千里　遥かなりと雖も，孰れか敢えて至らざらん）」，この「敢」字は「会」字として解し，「孰敢不至」はどこにも至らないの意味。『董解元西廂記』巻四「合下尋思，料他不敢違言（考えてみれば，あの人が言葉を違えたはずはない）」，ここでは鶯鶯が張生の言葉を思って，彼の言わないことは信じないという意味。楊朝英『楽府新編陽春白雪』後集巻五，劉時中[231]「新水令・代馬訴冤（馬に代わりて冤を

訴える)」「雕鞍金轡，再誰敢一鞭行色夕陽低（雕鞍金轡，再(ま)た誰か敢(あ)えて一たび行色[232]の夕陽の低きに鞭(むちう)たん)」，「誰敢」は誰が～できようかという意味。関漢卿『銭大尹智寵謝天香』（『全元曲』）第一折「但有箇敢接我這上庁行首案，情願分付与你這粧演戯台児（ただ私を妓女が頭(かしら)として接することができるならば，私に劇を演じることを命じるように願います)」，これはただある人が私の妓女が頭となる仕事を受けて，彼と引き継ぐこと。この「敢」は「本」の意味と同じく，語気はとても重く，「此敢」も「肯」の意味で理解できる。鄭光祖『鍾離春智勇定斉』（『全元曲』）第二折「空有江山並社稷，無人敢与定封疆（ただ山水と国家があったとしても，あえて国土を守ることのできる人がいない)」，定封疆となる人物がいないことをいう。張国賓[233]『相国寺公孫合汗衫』（『全元曲』）第一折「你看那人，也則是時運未至，他可敢一世裏不如人（見ろ，あの人は時運が到来しないだけで，どうして他人に及ばないことがあろうか)」，「可敢」はどうして～できようかという意味。「可」はどうして～だろうかの意味。344頁の「可」を参照。無名氏『二郎神酔射鎖魔鏡』（『全元曲』）第二折「若拿不住呵！你告与那吒太子。他可敢掃蕩魔君；他也擒妖怪，拿孽畜，領天兵（なんてことだ，那吒に伝えよ。奴は魔王を追い払うことができる。つまり妖怪や化け物を捕らえて天兵を引き連れることができる)」，「可敢」はかえって～できるの意味。「可」はかえっての意味。「也敢」は～もできる。以上は「会」字の意味。羅虬[234]「比紅児詩（紅児に比す詩)」（『全唐詩』巻666）「若教粗及紅児貌，争敢楼前斬愛姫（若(も)し粗(おおよ)そ紅児の貌に及ばしめば，争(なん)ぞ敢えて楼前にて愛姫を斬らん)」，この「敢」の字は「肯」の字義で，平原君の姫が足の不自由な者を笑ったので，これを斬首してその人にわびたことを指す。「争敢」はどうしてあえて～の意味。『董解元西廂記』巻二「怎禁他，諸賊党，着弓箭射，争敢停時霎（賊どもが矢を射かければひとたまりもなし。寸刻たりとも踏みとどまれようはずもない)」，どうして僅かな時間でもとどまれようかという意味。また巻三「鄭将軍，你敢早行麽。(鄭将軍よ，早く行きませんか)」，これははやく行きましょうという意味。鄭将軍は鄭林事を太陽に喩えている。これは張生が待ちきれないといった口調である。以上は「肯」字の意味。

④副詞。よもや～ではあるまい。蕭徳祥[235]『楊氏女殺狗勧夫』（『全元曲』）第四折「(孤云)，這敢是你哥哥殺了人来麽（孤云う，これはよもやおまえの兄が殺したのではあるまいか)」。関漢卿『望江亭中秋切鱠』第二折「(正旦云)，敢問相公，為甚麽不回後堂中去，敢是前妻寄書来那[236]（正旦いう，旦那様にお尋ねします。なぜ後堂に戻られないのでしょうか，前の奥様が手紙をよこしてきたのでしょう？)」。『水滸伝』第五十六回「娘子想道：敢是夜来滅了灯時，那賊已躱在家裏了（妻が考えるに，よもや夜に灯りが消えた時に，あの泥棒はもう家の中に入り込んでいたにちがいない)」。『金瓶梅詞話』第二十一回「月娘道：大雪裏你錯走了門児了，敢不是這屋裏，你也就差了！（月娘がいうには，大雪の中間違って出て行ったのに，よもやここにあなたがくるとは思わなかった！)」。

・［多敢是］duōgǎnshì　熟語，大体の意味。「准」の意味。「定」の意味のようにはまだ確定していない状態で，「多管(おそらく)」に近い。『古今雑劇三十種[237]』本の高文秀[238]『新刊関目好酒趙元遇上皇』に「見三疋金鞍馬，拴在老桑樹，多敢是国戚皇族（三疋の金鞍馬を見るに，老桑樹があり，おそらくは王族の者だ)」。また孔文卿[239]『地蔵王証東窓事犯』（『全元曲』）に「却怎竹節[240]也似差天使，多敢是聖明君犒賞特宣賜（なぜか竹の節さえも天子様の使いのよう。おそらくは聖明君が褒美をくださるのだろう)」。孟漢卿[241]『張孔目智勘魔合羅』（『全元曲』）第一折「我猜着這病也，多敢是一半児因風一半児雨（思い返すにこの病気はおそらくは半分は風のせいで半分は雨のせい)」。石君宝[242]『魯大夫秋胡戯妻』（『全元曲』）第三折「他不是閑游浪子，多敢是取応的名儒[243]（かれは遊び人でなければ，おそらくは一目置く学者先生なのだろう)」，「取応」は考えなければならない，あるいは取り挙げなければならないの意味。朱凱[244]『昊天塔孟良盗骨』（『全元曲』）第三折「猛聴得城辺喊声挙，早捲起足律律一陣黒塵土。多敢是韓延寿那廝緊追逐（たちまち城のあたりで喊声が湧きおこり，はや一陣の黒塵を巻き上げる。おそらくは韓延寿のやつが追いかけてくるだろう)」。意味は全て同じ。「敢」の②を見よ。（有木）

17. 高 gāo

①遍く行き渡るの意味を示す。無名氏『馮玉蘭夜月泣江舟』（『全元曲』）第三折「他犯了殺人条，現放著大

質照，刀頭児血染高（彼が殺人を犯したことの証拠はすててても，刀には血が染みついている）」。『六十種曲[245]』第九冊「錦箋記」第十二折「幾十処伽藍座座参到五百尊羅漢個個数高（いろいろな伽藍には五百羅漢が数多く鎮座している）」，「高」は全て行き渡るの意味。「染高」は染め渡ること。「数高」は数多くあるの意味。この二例の「高」の字は「交」の字の仮借であり，詳しくは蕭世民「“高”為甚麼有周遍義？（「高」の字にはどうして行き渡るの意味があるのか？）」（『中国語文天地』1988年第5期）を見よ。上古の音では「高」と「交」は共に宵韻に属し，『広韻』の時代には「高」は豪韻にあり，「交」は肴韻にあり，声母は似ており，韻母は僅かに元音の口を開ける度合いの相違にすぎない。現在の贛・客・閩・粤などの地域の方言ではこの二字を同じように発音する。また「交」を見よ。

②白色。「高」と「皜（暠）」は通用し，「しろい」と読む。李賀「感諷五首」其四（『全唐詩』巻391）「星尽四方高（星尽きて四方高し）」，「四方高」とは四方の空が白く光ることをいう。王琦は注していない。

㊙「高」の字のこの用法は譚献『漢鐃歌十八曲集解[246]』「有所思」に「東方須臾高知之（東方　須臾にして高くこれを知る）」と見える。

・［交］jiāo　遍く行き渡るの意味を表す。宋の楊万里「晩過黄州舖（晩に黄州舗を過ぐ）二絶」其一（『全宋詩』巻2279）に「数峰残日紫将銷，一片新秧緑未交（数峰　残日　紫　将に銷えんとす，一片の新秧　緑　未だ交らず）」。曹希鑑「新月」（『宋詩紀事[247]』巻87）に「誰家宝鏡新磨出，匣小参差蓋不交（誰が家の宝鏡か新たに磨き出だす，匣小　参差として蓋し交らず）」。明・洪楩 輯『清平山堂話本二十七種[248]』所収『西湖三塔記』に「這西湖不深不浅，不闊不遠，大深来難下竹竿，大浅来難揺昼桨，大闊処遊玩不交，大遠処往来不得（這の西湖は深からず浅からず，闊からず遠からず，大いに深き来は竹竿を下し難く，大いに浅き来は昼桨を揺り難し，大いに闊き処は遊玩し交らず，大いに遠き処は往来するを得ず）」，すべて証明される。『漢語大字典』「交」の項の19番目を二小項に細分化して，1．は「助詞，相当于“的”（助詞の“的”に相当する）」とあり，2．は「相当于“遍”（“遍”に相当する）」とあり，郭沫若の『長春好』の一を挙げて証明しており，注に方言に属するとある。「高」を見よ。（有木）

18. 告gào

求める。請う。来鵠「鄂渚除夜書懐（鄂渚にて除夜に懐いを書す）」（『全唐詩』巻642）「難帰故国干戈後，欲告何人雨雪天（帰り難し故国　干戈の後，何人か雨雪の天を告めんと欲す）」，「告何人」とは誰かに求めるの意味である。楊万里「長句寄周舎人子充（長句もて周舎人子充に寄す）」（『全宋詩』巻2280）「又告君王覔閑散，要読短檠三万卷（又た君王に告う　閑散を覔むるを，短檠[249]　三万巻を読むに要す）」，「告君王」とは君王に求めるの意味である。程垓[250]「雪獅児」（『全宋詞』）「花嬌柳弱，漸倚酔，要人摟着。低告托，早把被香薫却（花は嬌しく柳は弱し，漸く倚酔し，人を要めて摟き着く。低れて托すを告め，早や把りて香薫を却けらる）」，「告托」は托すことを請うことである。晁端礼[251]「洞仙歌」（『全宋詞』）「奈何我已狂迷，怎肯干休，情深後不免求告（奈何ぞ我　已に狂迷し，怎ぞ肯えて干休[252]せん，情深き後　求告むるを免れず）」，「告」は「求」と連用し，「告」は求めるのことである。また「歩蟾宮」（『全宋詞』）「任孜孜，求告不回頭，消満眼，汪汪地涙（孜孜たるに任せ，回頭せざるを求告む，満眼を消し，汪汪地として涙す）」。趙長卿「南歌子」（『全宋詞』）「劉郎幾日便登程，告你覔些歓笑送行人（劉郎　幾日か便ち程に登り，你に告む　些か歓笑し行人を送るを覔むるを）」，「求你」はあなたに頼むと同じに理解できる。『花草粹編[253]』巻四[254]，無名氏「花前飲」に「告你休看書，共我花前飲（你に告う　書を看るを休めよ，我と共に花の前にて飲まん）」。『楽府新編陽春白雪』巻八，劉薬房「解連環」（『全宋詞』）「告梧桐，夜深略住，夢時一霎（梧桐に告めん，夜　深ければ略住まるを，夢みし時は一霎[255]）」，「告梧桐」とは梧桐に求めることであり，梧桐に音を出さずにいることを願っている。関漢卿『温太真玉鏡台』（『全元曲』）第三折「我求竈頭不如告竈尾（竈の頭に求めるのはしっぽに求めるのと同じ）」，「告」と「求」は互文である。三十種本『博望焼屯[256]』「你本待告貧道下山与您出些気力。其実当不得寒，済不得飢。請下這臥龍岡，待則甚的（私が下山するのを心から待ち望んでいらっしゃる。実際は寒く

ないし飢えてもいない。この臥龍岡を出ていただくなら，待つことなどたいしたことではない)」，上の「告」と下の「請」も互文である。『㑹梅香騙翰林風月』（『全元曲』）第二折「請放了。怎生向賤妾行告耽饒（放してください，どうして下女に許しを求めるのか)」，「告耽饒」は許しを求めることである。無名氏『都孔目風雨還牢末』（『全元曲』）第一折「我眼見的無那活的人也，這両個孩児要在他手裏過日子，只得回嗔作喜，告他一告（私はすぐに殺され，この二人の子たちは彼女のお世話になるので，ただ笑みを浮かべて頼むしかないでしょう)」，これはちょっと依頼することである。関漢卿『銭大尹智寵謝天香』（『全元曲』）第二折「銭大尹云，教謝天香唱一曲調咱。正旦云，告宮調。銭大尹云，商角調。正旦云，告曲子名（銭大尹云う，謝天香に一曲歌わせてみよう，正旦云う，宮調を教えてください。銭大尹が云う，これは商角調だ。正旦云う，曲名を教えててください)」，「告宮調」とは宮調を求めることであり，「告曲子」とは曲名を求めることである。この二つの「告」の字は敬語で，「請問」の意味である。巾箱本『琵琶記』第二十五齣[257]「堪憐愚婦人，単身又貧，開口告人羞怎忍（哀れなる愚婦人よ，お前は独り身にして貧しければ，人に頼む恥はどうして忍ぶことができようか)」。または「正是上山擒虎易，開口告人難（まさしく山に登って虎を捕まえるのはやさしく，人にお願いするのは難しい)」，「告人」は人を求めることである。施恵『幽閨記』（『全元曲』）第十九齣「告饒恕，魂飛胆顫，神恐心惊惧（許しをもとめて，魂も飛び出すほどに恐れおののく)」，「告饒恕」とは許しを求めることである。蕭徳祥『小孫屠』（『全元曲』）第十出に「告媽媽寛心行路，両下里休慮憶（母上には広い心を持たれ，再び心配されないことを願います)」，これは母親に求めることである。また，「告恩官，略慈念（お役人様には，お慈悲を願います)」，これも恩官に頼むことである。『張協状元[258]』に「告壮士，善眼相看，天色又寒（壮士に頼むに，目を開いてみよ，空はまた寒い)」。これは壮士に頼むことである。また，「告莫説張状元，才説後涙漣漣（張状元には言わないで欲しいが，言えば涙が流れてしまう)」。ここでは言わないで欲しいということである。「才」は少しの意味で，64頁の「纔」を参照。言えばすぐに人を傷つけるということ。李玉『一笠庵北詞広正譜[259]』巻一，「黄鍾宮」王伯成「興隆引・天宝遺事」「便告的霎児厳假，枉与他広増些怨望，剰添些惊怕（偽りのものを求めれば，むやみに怨みを増して驚かせる)」，これは偽物を求めることである。（有木）

19. 閣gé

含む，銜(くわ)える，噙(ついば)むの動詞。王維[260]「書事」（『全唐詩』巻128）「軽陰閣小雨，深院昼慵開（軽陰　小雨を閣(ふく)み，深院　昼　開くに慵(ものう)し)」。王安石「丙戌五日京師作（丙戌五日　京師の作）二首」其一（『全宋詩』巻550）「北風閣雨去不下，驚沙蒼茫乱昏曉。伝聞城外八九里，雹大如拳死飛鳥（北風　雨を閣(ふく)み　去りて下らず，驚沙　蒼茫として昏曉を乱す。伝聞す　城外八九里，雹　大なること拳の如く飛鳥を死(ころ)すと)」，これは北風が大量の水分を含んでいることを指していう。范成大「長至日与同舍遊北山（長至[261]の日　同舍と北山に遊ぶ)」（『全宋詩』巻2249）「寒雲低閣雪，佳節静供愁（寒雲　低(た)れて雪を閣(ふく)み，佳節　静かに愁いを供(そな)う)」。楊万里「同君兪季永歩至普済寺晩泛西湖以帰得四絶句（同君兪季永歩　普済寺に至りて晩に西湖に泛かび以て帰りて四絶句を得)」其一（『全宋詩』巻2276）「閣日微陰不礙晴，杖藜小倦且須行（日を閣(ふく)む微陰[262]　晴るるを礙(さまた)げず，杖藜して小しく倦むも且(まさ)に須らく行くべし)」。朱淑真[263]「傷春（春を傷(いた)む)」（『全宋詩』巻1583）「閣涙抛詩巻，無聊酒独親（涙を閣(ふく)みて詩巻を抛(なげう)ち，無聊に　酒　独り親しむ)」，これは涙を含むをいう。陳亮[264]「水龍吟」（『全宋詞』）「遅日催花，淡雲閣雨，軽寒軽暖（遅日　花を催(うなが)し，淡雲　雨を閣(ふく)み，軽(や)や寒く軽(や)や暖かなり)」。夏竦「鷓鴣天」（『全宋詞』）「尊前祗恐傷郎意，閣涙汪汪不敢垂（尊前　祗(た)だ恐る　郎の意を傷むことを，涙を閣(ふく)み汪汪として敢えて垂れず)」。張元幹[265]「蘭陵王」（『全宋詞』）「巻珠箔。朝雨軽陰乍閣（珠箔を巻き，朝雨　軽陰　乍(たちま)ち閣(ふく)む)」。呉文英[266]「永遇楽」（『全宋詞』）「閣雪雲低，巻沙風急，驚雁失序（雪を閣(ふく)みて雲　低く，沙を巻きて風　急なり，驚雁　序を失す)」。『董解元西廂記』巻四「鴛鴦感此，閣不定粉涙漣漣（鴛鴦は心打たれ，とどめ置けない涙が白き頬をしとどに流れる)」。石君宝[267]『魯大夫秋胡戯妻』（『全元曲』）第一折「似這等天闊雁書稀，人遠龍荒近，教我閣著涙対別酒一樽（このように天が広ければ手紙も稀であり，人は遠く荒地は近く，涙を呑んでもう一杯)」。これらの意味は同じ。尚仲賢[268]『洞庭湖柳毅伝書』（『全元曲』）第三折「還待要献殷勤倒玉樽，只怕他閣著灑杯児未飲早醉醺醺（殷勤に一献傾けましょう。たっぷりの杯を口につけただけで早くも酔ってしまうかもしれない)」，これは銜(くわ)えるの意味となる。『西廂記』第五本第一折「我這裏開時和涙開，他那裏修時和涙修，多管閣著筆尖児未写早涙先流（私はここで手紙を開くときに

涙と共に開き，彼がそこで手紙を書くときに涙と共にしたためる。おそらくは筆先を銜えて未だしたためる前に早くも涙が流れたのだろう）」，これも意味は同じ。『琵琶記』第五齣「南浦嘱別（南浦の嘱別）」「帰家只恐傷親意，閣涙汪汪不敢流（家に帰ればただ親の心を傷つけることを恐れ，涙がさめざめと流れるの飲み込んで，あえて流さない）」。また，関漢卿の小令「沈酔東風五首」其一「手執著餞行杯，眼閣著別離涙（手もて餞行の杯を執著り，眼は別離の涙を閣著む）」。また「閣」を見よ。

・［閣］gé 『楽府新編陽春白雪』後集巻三，劉時中「端正好・上高監司（高監司に上る）」「一糸好気沿途創，閣涙汪汪（一糸の好気　沿途[269]に創り，涙を閣みて汪汪たり）」。『元人少令集』無名氏「落梅風」「杯擎玉，涙閣珠，心間事尽情児傾訴（杯　玉を擎ち，涙　珠を閣む，心間の事　情を尽くして児は傾訴[270]す）」。「閣」を見よ。

㊟「閣」は「擱」と同じに見なされ，「止める」の意味にも解釈されるが，上記の各例においては多く相当するもここでは通じない。（有木）

20. 隔是géshì

すでに。『容斉随筆』巻二「楽天詩云，‘江州去日聴箏夜，白髪新生不願聞。如今格是頭成雪，弾到天明亦任君。’元微之詩云，‘隔是身如夢，頻来不為名。憐君近南住，時得到山行。’格与隔二字義同，格是猶言已是也（楽天詩に云う，「江州にて去日　箏を聴きし夜，白髪　新たに生じ聞くを願わず。如今　格是に　雪と成る，弾じて天明に到るも亦た君に任す」と。元微之詩に云う，「隔是に身は夢の如し，頻り来たるも名を為さず。君の近く南住するを憐むも，時に山行に到るを得たり」と。「格」と「隔」との二字の義は同じく，「格是」は猶お「已是」と言う）」。按ずるに楽天詩は「聴夜箏有感（夜箏を聴きて感有り）」（『全唐詩』巻442）のことで，微之詩は「日高睡（日　高くして睡る）」（『全唐詩』巻410）のことである。元稹「古決絶詞三首」其三（『全唐詩』巻20）「天公隔是妒相憐，何不便教相決絶（天公　隔是に相い憐れむを妒み，何ぞ便ち相い決絶せしめざる）」。敦煌文庫「大目乾連冥間救母変文」（『敦煌変文集[271]』巻六）「隔是不能相救済，児急[272]随娘娘身死獄門前（隔是に相い救済すること能わず，児は急に娘娘に随いて身ら獄門の前に死す）」，これは「隔是」を用いている。

・［格是］géshì 「隔是」と同じ。顧況[273]「露青竹杖歌」（『全唐詩』巻265）「亭亭筆直無皴節，磨捋形相一条鉄。市頭格是無人別，江海賤臣不拘絏，垂鞘掛影西窓欠。稚子覓衣挑仰穴，家童拾薪幾拗折（亭亭[274]たる筆　直として皴節無く，形相を磨捋す一条の鉄。市頭　格是に人の別する無く，江海の賤臣　絏に拘われず，鞘を垂れて影に掛く　西窓の欠。稚子　衣を覓めて穴を挑仰し，家童　薪を拾いて幾くか拗折す）」，「無人別」とは識別する者がいない，鑑別する者がいないこと。韓偓「夜坐」（『全唐詩』巻682）「格是厭厭饒酒病，終須的的学漁歌（格是に厭厭[275]として酒病を饒し，終に須らく的的として漁歌を学ぶべし）」。『汲古閣景鈔南宋六十家集』岳珂[276]「宮詞一百首」其二十七（『棠湖詩藁』）「龍鸞鶱舞写宸章，秘閣交輝白玉堂。格是帝中称第一，不交（教）合作羨鐘王（龍鸞　鶱舞[277]して宸章を写し，秘閣　交も輝く白玉堂。格是に帝中　第一と称し，合に鐘王を羨むを作すべからしめず）」，意味は同じ。（有木）

21. 更gèng

①豈に～んや。杜甫「春日梓州登楼（春日　梓州にて楼に登る）二首」其二（『全唐詩』巻227）「戦場今始定，移柳更能存（戦場　今始めて定まる，移柳　更に能く存せんや）」，「更」は一に「豈」に作り，「更」と「豈」は相通じる。また「三絶句」其一（『全唐詩』巻229）「群盗相随劇虎狼，食人更肯留妻子（群盗　相い随うは虎狼よりも劇し，人を食らうに更に肯えて妻子を留めんや）」，「更肯」はどうしてあえて～しようか。劉長卿[278]「登潤州万歳楼（潤州の万歳楼に登る）」（『全唐詩』巻151）「聞道王師猶転戦，更能談笑解重囲（聞道く　王師　猶お転戦し，更に能く談笑して重囲を解かん）」，「更能」はどうして～できようか。陸亀蒙

「江城夜泊」（『全唐詩』巻629）「漏移寒箭丁丁急，月挂虚弓靄靄明。此夜離魂堪射断，更須江笛両三声（漏は寒箭を移して丁丁として急なり，月は虚弓を挂けて靄靄として明らかなり。此の夜　離魂[279]　堪えて射断す，更に須いん　江笛の両三声）」，「更須」はどうして～を必要としようか。蘇軾「十二月二十日恭聞太皇太后升遐以軾罪人不許承服欲哭則不敢欲泣則不可故作挽詞二章（十二月二十日，恭しく太皇太后の升遐[280]を聞く，軾罪人を以て承服するを許されず，哭せんと欲するも則ち敢えてせず，泣かんと欲するも則ち不可なり，故に挽詞二章を作る）」其二（『全宋詩』巻802）「一声慟哭猶無所，万死酬恩更有時（一声　慟哭するに猶お所無く，万死　恩に酬いんとして更に時有らん）」，「更有」はどうしてあるだろうか。また「寄劉孝叔（劉孝叔に寄す）」（『全宋詩』巻796）「公厨十日不生煙，更望紅裙踏筵舞（公厨十日　煙を生ぜず，更に望まん　紅裙　筵を踏んで舞うを）」，「更望」は望もうか。また「和蔣夔寄茶（蔣夔が茶を寄せらるるに和す）」（『全宋詩』巻796）「死生禍福久不択，更論甘苦争蚩妍（死生禍福　久しく択ばず，更に甘苦を論じ蚩妍を争わん）」，どうして苦楽を論じ，どうして美醜を競うだろうかということ。また「無題[281]」「吾今頭半白，把鏡非不見。惟応花下盃，更待他人勧（吾今　頭半ば白く，鏡を把りて見ざるに非ず。惟だ応に花下の盃，更に他人の勧むるを待たんや）」，「更待」はどうして待とうか。また「豆粥」（『全宋詩』巻807）「身心顛倒自不知，更識人間有真味（身心顛倒して自ら知らず，更に識らん　人間に真味有るを）」，「更識」はどうして知っていようか。陳師道「懐遠（遠きを懐う）」（『全宋詩』巻1118）「生前只為累，身後更須名（生前　只だ累を為す，身後　更に名を須たんや）」，「更須」はすでに前に見える。楊万里「水西野店皆不著宿夜抵石山虚（水西の野店，皆　宿に著かず，夜　石山の虚に抵る）」（『全宋詩』巻2275）「見容幸有此，雖陋更嫌他（容を見れば幸いにも此に有り，陋きと雖も更に他を嫌わん）」，「更嫌」はどうして嫌おうか。また「夜過揚州（夜　揚州を過ぐ）」（『全宋詩』巻2302）「秖今何許問迷楼，更有垂楊記御溝（秖だ今　何許に迷楼を問わん，更に垂楊　御溝に記すこと有らん）」，「更有」はすでに前に見える。辛棄疾「杏花天」（『全宋詞』）「蛛糸網遍玻璃盞。更問舞裙歌扇（蛛糸の網　玻璃の盞に遍し。更に問わん舞裙と歌扇と）」，「更問」はどうして問うだろうか，またなんぞ問うだろうか。また「鵲橋仙」（『全宋詞』）「啼鴉衰柳自無聊，更管得，離人腸断（啼鴉　衰柳　自ら無聊，更に管し得ん，離人[282]の腸の断つを）」，「更管得」はどうして関わろうか，どうして関係しようか。周紫芝[283]「木蘭花」（『全宋詞』）「眼前不忍対西風，夢裏更堪追往事（眼前　忍びず西風に対するに，夢の裏　更に堪えて往事を追わん）」，「更堪」はどうして堪えようか，どうして我慢できようかということ。陸游[284]「望梅（梅を望む）」（『全宋詞』）「似夢裏，来到南柯，這些子光陰，更堪軽擲（夢裏の似く，来たりて南柯に到り，這些の子の光陰，更に軽擲に堪えん）」，意味は同じ。

②強調の詞。どのようであろうともという意味。いえども。たとえ。陳師道「別負山居士（負山居士に別る）」（『全宋詩』巻1114）「更病可無酒，猶寒已自和（更い病みて酒無るべきも，猶お寒ければ已に自ら和す）」，どのような病気であろうとも，酒を飲まないわけにはいかないということ。またたとえ病気になってもというふうに解することができる。陸游「閑趣」（『全宋詩』巻2178）「更貧家業猶供酒，未死年光尽属身（更い家業に貧するとも猶お酒を供し，未だ死せず　年光　尽く身に属す）」，どんなに貧しくともぜひ酒をささげるべきだということ。またたとえ貧しくともと解することができる。また「生涯」（『全宋詩』巻2210）「縦老豈容妨痛飲，更慵亦未廃新詩（縦い老ゆるとも豈に痛飲するを妨ぐるを容れん，更い慵きも亦た未だ新詩を廃せず）」，「更」と「縦」は互文である。劉克荘「羅湖八首」其一（『全宋詩』巻3044）「瀧吏不須前白事，更忙定要看羅浮（瀧吏　前て事を白すを須いず，忙しきと更も定めて羅浮[285]を看ることを要せん）」，どんなに忙しくとも羅浮山は見られるという意味。またたとえいそがしくともと解することができる。李後主[286]「清平楽」（『全唐詩』巻889）「離恨却如春草，更行更遠還生（離恨　却って春草の如く，行くと更も遠きと更も還た生ぜん）」，たとえどんなに遠くに行こうとも，結局はどこにでも春草は生えているということ。柳永「如魚水」（『全宋詞』）「更帰去，遍暦鑾坡鳳沼，此景也難忘（更い帰り去りて，鑾坡[287]　鳳沼[288]を遍暦するも，此の景や忘れ難し）」，たとえ翰林学士や中書省に出世してもこの景色は忘れることはできないということ。また「鳳銜杯」（『全宋詞』）「更時展丹青，強拈書信頻頻看。又争似，親相見（更い時に丹青を展べ，強いて書信を拈りて頻頻に看るも，又た争でか親しく相い見るに似かん）」，これは彊村本『楽章集』によると，焦本は「縦」に作り，汲古閣本は「総」に作る。「総」は「縦」と同じ。844ページを見よ。たとえ絵姿を見たり手紙を読んでも，結局はその顔を見ることには及ばないということ。晁補之[289]「塩角児・詠梅[290]」（『全宋詞』）「直饒更

疏疏淡淡，終有一般情別（直だ饒更い疏疏淡淡たるとも，終に一般の情別有り）」，たとえどんなに淡泊であっても，結局はある種の別れの思いがあるということ。李之儀[291]「蝶恋花」（『全宋詞』）「更不嗅時須百遍。分明銷得人腸断（更え嗅がざるも時に須らく百遍すべし。分明に銷えて人の腸断を得）」，思うにこれもまた「詠梅」の詞と同じく，たとえどんなに香りを嗅ぐことができないと言っても，百遍嗅がなければならないという意味。狄君厚『晋文公火焼介子推』（『全元曲』）第二折「他子父母更歹殺呵，痛関著骨肉（子と親はたとえ仲が悪くなろうとも，その痛みは骨髄にまで到る）」，親子の関係はどんなに悪くなっても結局は骨肉を痛みあう関係にあるということ。鄭光祖『傷梅香騙翰林風月』（『全元曲』）第二折「我更不中呵，須是相国之家（たとえ運が悪くとも，宰相にはなれるはずだ）」，私がどんなに名を上げなくても，結果的には相国の位までなるということ。「不中」は60ページを参照。

③強調の詞。絶えての意味。張祜[292]「雨霖鈴」（『全唐詩』巻511）「長説上皇和淚教，月明南内更無人（長に説く　上皇　涙に和して教えんことを，月　明らかにして南内に更えて人無し）」，「更無人」はまったく人がいないこと。李商隠[293]「王十二兄与畏之員外相訪見招小飲時予以悼亡日近不去因寄（王十二兄，畏之員外と相い訪ね，小飲に招かるる時，予　悼亡の日を以て近ろ去らず，因りて寄す）」（『全唐詩』巻539）「更無人処簾垂地，欲払塵時簟竟床（更えて人無き処　簾は地に垂れ，塵を払わんと欲し　時には簟　竟には床）」，意味は上と同じ。花蕊夫人徐氏[294]「述国亡（国の亡ぶを述ぶ）」（『全唐詩』巻798）「十四万人斉解甲，更無一箇是男児（十四万人　斉しく甲を解き，更えて一箇の是れ男児無し）」。陸游「十五日」（『全宋詩』巻2203）「天宇更無雲一点，譙門初報鼓三通（天宇　更えて雲の一点すら無し，譙門　初めて鼓を報ずること三通）」。周紫芝「謁金門」（『全宋詞』）「薄幸更無書一紙。画楼愁独倚（薄幸　更えて書の一紙すら無し。画楼　愁いて独り倚る）」，おおよそ「更無」は皆，まったく無いということ。李商隠「風」（『全唐詩』巻540）「已寒休慘淡，更遠尚呼号（已に寒く慘淡[295]に休まるも，更えて遠く尚お呼号す）」，風がとても遠くても，なお呼ぶ声が聞こえるようだということ。楊万里「読淵明詩（淵明詩を読む）」（『全宋詩』巻2296）「淵明非生面，穉歳識已早。極知人更賢，未契詩独好（淵明　生面に非ず，穉歳　識ること已に早し。極めて知る　人更えて賢なるを，未だ契せざるに詩は独り好し）」，これはこの人がとても賢いということ。辛棄疾「尋芳草」（『全宋詞』）「更也没書来，那堪被雁児調戯（更えて也た書の来たる没し，那ぞ堪えて雁児に調戯せらる）」，これはまったく手紙が来ないということ。喬吉『玉簫女両世姻縁』（『全元曲』）第二折「看了他容貌児実是撐，衣冠児別様整，更風流，更灑落，更聡明（彼の姿をみれば実にふくよかで，服装も整っており，とても風流で，とておしゃれで，とても賢い）」，この３つの「更」もすべて「絶」の字に解する。

④類連語，通常の副詞の用法と区別される。皇甫冉[296]「雑言月洲歌送趙冽還襄陽（月洲歌を雑言し，趙冽の襄陽に還るを送る）」（『全唐詩』巻249）「流聒聒兮湍与瀬，草青青兮春更秋（流るること聒聒たり　湍と瀬と，草　青青たり　春と秋更）」，「与」と「更」は互文である。楊万里「春興」（『全宋詩』巻2282）「著尽工夫是化，工不関春雨更春風（著して工夫を尽くすは是れ化なり，工は春雨と春風更に関わらず）」，また「和段李承左蔵恵四絶句（段李承左蔵恵に和す　四絶句）」其三（『全宋詩』巻2294）「阿誰不識珠将玉，若箇関渠風更騒（阿誰　識らず珠と玉将，箇の関渠の若き風と騒更）」，「更」と「将」は互文で，「将」もまた「与」字の意味である。姜夔[297]「卜算子[298]」（『全宋詞』）「緑萼更横枝，多少梅花様（緑萼と横枝更，多少ぞ梅花の様）」，作者の自注に「緑萼，横枝，皆梅別種（緑萼，横枝は，皆な梅の別種なり）」とある。辛棄疾「鷓鴣天」（『全宋詞』）「携竹杖，更芒鞋。朱朱粉粉野蒿開（竹杖と，芒鞋更を携う。朱朱粉粉として野蒿[299]は開く）」。余桂英「小桃紅」（『全宋詞』）「早知人酒病更詩愁，鎮軽随飛絮（早に人の酒病と詩愁更を知り，鎮軽として飛絮に随う）」。石孝友[300]「謁金門」（『全宋詞』）「洞裏小桃音信阻。幾番風更雨（洞裏の小桃　音信を阻む。幾番か風と雨更）」。王質「水調歌頭・京口」（『全宋詞』）「古戦場，尽白草，更蒼煙（古戦場，尽く白草と，蒼煙更なり）」，その意味は同じ。（有木）

22. 故 gù

①固より，本より，自ら。李商隠「自南山北帰過分水嶺（南山より北帰し分水嶺を過ぎる）」（『全唐詩』巻

540)「水急愁無地，山深故有雲（水は急にして愁いは地に無く，山は深くして故より雲有り)」，これは元よりある，あるいは自然とあることをいう。王安石「酬淮南提刑邵不疑学士（淮南の提刑邵不疑学士に酬ゆ)」(『全宋詩』巻560)「詢求故有風謡在，不独鑱詩尚未泯（詢求す　故より風有りて謡　在り，独り詩を鑱むのみならず尚お未だ泯びず)」，これは元よりある，あるいは初めからあるということ。また「小姑」(『全宋詩』巻554)「弄玉有祠終或往，飛瓊無夢故難知（弄玉に祠有りて終に或いは往き，飛瓊に夢無く故より知り難し)」，「故難知」は元より知りにくい，あるいは初めから知りにくいということ。蘇軾「柳子玉亦見和因以送之兼寄其兄子璋道人（柳子玉　亦た和せらるる，因って以てこれを送り，兼ねて其の兄の子璋道人に寄す)」(『全宋詩』巻794)「説静故知猶有動，無閑底処更求忙（静を説く　故より知る　猶お動有るを，閑無く底の処に更に忙を求む)」，「故知」は元より知ること。また「次韻答馬忠玉（次韻して馬忠玉に答う)」(『全宋詩』巻816)「只有西湖似西子，故応宛転為君容（只だ西湖の西子に似たる有り，故より応に宛転して君が為めに容るべし)」，「故応」は元より～するのが当然である，あるいは自然と～すべきであるということ。また「次韻杭人裴維甫（杭人の裴維甫に次韻す)」(『全宋詩』巻807)「寄謝西湖旧風月，故応時許夢中遊（寄謝す　西湖の旧風月，故より応に時に許すべし　夢中の遊びを)」，また「題李伯時画趙景仁琴鶴図（李伯時が趙景仁の琴鶴の図を画くに題す)」二首其一（『全宋詩』巻813)「清献先生無一銭，故応琴鶴是家伝（清献先生　一銭も無し，故より応に琴鶴是れ家に伝うるなるべし)」，意味は同じ。黄庭堅「王文恭公挽詞二首」其二（『全宋詩』巻980)「雨紼誰為挽，寒笳故作哀（雨紼　誰か挽くことを為す，寒笳　故ら哀を作す)」，「故作哀」は自然と悲しみをなすこと。陳師道「次韻寇秀才寄下邳家兄（寇秀才の下邳の家兄に寄すに次韻す)」(『全宋詩』巻1114)「故著江山供極目，正将強健入新年（故より江山に著きて極目を供し，正将に強健に新年に入らんとす)」，「故著」は元よりある，あるいは初めからあるということ。

②常に，久しく，素より。杜甫「悶」(『全唐詩』巻231)「猿捷長難見，鴎軽故不還（猿は捷くして長に見え難く，鴎は軽くして故に還らず)」，「故」字は「長」字と対をなし，「長」は常にであり，「故」も常にである。カモメはいつも身軽で一度行くと帰ってこないことをいう。また「春水」(『全唐詩』巻226)「已添無数鳥，争浴故相喧（已に添う　無数の鳥，争い浴して故に相い喧し)」，常にうるさい，あるいは時にうるさいことをいう。黄庭堅「次韻知命永和道中（永和道中に知命するに次韻す)」(『全宋詩』巻1011)「虚舟不受怒，故在蓼灘横（虚舟　怒りを受けず，故に蓼灘に在りて横たわる)」，いつも蓼灘に横たわることをいう。陳師道「寄泰州曽侍郎（泰州の曽侍郎に寄す)」(『全宋詩』巻1118)「八年門第故違離，千里河山費夢思（八年の門第　故しく違離し，千里の河山　夢思を費やす)」，「故違離」は長く離れること。また「和寄朱文中（朱文中に寄すに和す)」(『全宋詩』巻1119)「魯国故知臧有後，孔庭早見鯉能 詩（魯国　故しく臧に後有るを知り，孔庭　早に鯉の詩を能くするを見る)」，「故知」は長い間知る，あるいは元から知っているということ。楊万里「明発三衢（明けに三衢を発す）三首」其三（『全宋詩』巻2287)「雨無多落泥偏滑，渓不勝深岸故頽（雨　多く落つること無くとも泥　偏えに滑り，渓　深きに勝えず岸　故しく頽る)」，岸は長い間崩れていることをいう。陶潜「責子（子を責む)」(『陶淵明集』巻三)「阿舒已二八，懶惰故無匹（阿舒は已に二八なるに，懶惰なること故より匹い無し)」，「故無匹」は元より比べるものがないこと。また「故故」を見よ。

③やはり，まだ，そのうえ。沈佺期[301]「哭蘇眉州崔司業二公（蘇眉州，崔司業二公を哭す)」(『全唐詩』巻97)「隴樹応秋矣，江帆故杳然（隴樹　秋に応じ，江帆　故お杳然たり)」，「故杳然」はやはりはてしないこと。杜甫「絶句漫興九首」其三（『全唐詩』巻227)「熟知茅斉絶低小，江上燕子故来頻（茅斉の絶だ低小なるを熟知して，江上の燕子　故お来たること頻なり)」，ツバメは屋敷が小さいことを厭わず，やはり頻りにやってくることをいう。また「秋興八首」其三（『全唐詩』巻230)「信宿漁人還汎汎，清秋燕子故飛飛（信宿の漁人還た汎汎，清秋の燕子　故た飛飛)」，「故」と「還」は互文で，「故飛飛」はまだ飛んでいること。また「所思（思う所)」(『全唐詩』巻226)「可憐懐抱向人尽，欲問平安無使来。故憑錦水将双涙，好過瞿塘灩澦堆（憐むべし　懐抱　人に向いて尽くさん，平安を問わんと欲するも使いの来たる無し。故た錦水に憑りて双涙を将て，好し過ぎよ　瞿塘灩澦堆)」，「故憑」はまだ付くこと。孟浩然「宿桐廬江寄広陵旧遊（桐廬江に宿して広陵の旧遊に寄す)」(『全唐詩』巻160)「還将両行涙，遥寄海西頭（還た両行の涙を将て，遥かに寄す　海西の頭)」，字はまさしく「還」に作り，これにて証明される。章孝標[302]「帰燕下第後献主司（燕に帰りて下第し

後，主司に献ず）」（『全唐詩』巻506）「旧累危巣泥已落，今年故向社前帰（旧累の危巣の泥　已に落ちるも，今年　故お社前に向かいて帰る）」，「巣の泥は落ちたけれども，ツバメはやはり帰ってくることをいう。蘇軾「書普慈長老壁（普慈長老の壁に書す）」（『全宋詩』巻794）「倦客再遊行老矣，高僧一笑故依然（倦客　再遊すれば行くゆく老いぬ，高僧は一笑して故お依然たり）」，なお依然としてという。王安石「観明州図（明州の図を観る）」（『全宋詩』巻567）「投老心情非復昔，当時山水故依然（老に投りて心情は復た昔に非ず，当時の山水は故お依然たり）」，意味は同じ。また「次韻酬龔深甫（龔深甫に酬ゆるに次韻す）二首」其一（『全宋詩』巻554）「北尋五柞故未愁，東挽三楊仍有樛（北は五柞を尋ねて故お未だ愁かず，東は三楊を挽きて仍お樛有り）」，「愁」は欠く，李壁の注を見よ。「故」と「仍」は互文で，「故未愁」はやはりまだ欠けていないこと。また「呉正仲謫官得故人寄蟹以詩謝之余次其韻（呉正仲　官を謫せられ，故人を得たり，蟹を寄すに詩を以てこれに謝す，余　其の韻に次ぐ）」（『全宋詩』巻553）「越客上荊舠，秋風憶把螯。故煩分巨跪，持用佐清糟（越客　荊舠を上り，秋風　螯を把るを憶う。故た煩う　巨跪を分かつを，持ちて清糟を用佐す）」，「故煩」はまだ煩うこと。また「孟子」（『全宋詩』巻569）「何妨挙世嫌迂濶，故有斯人慰寂寥（何ぞ妨げん　挙世　迂濶を嫌うを，故お斯の人有って寂寥を慰む）」，「故有」は今なおあること。また「壬子偶題」（『全宋詩』巻567）「黄塵投老倦忽忽，故遶盆池種水紅（黄塵　老を投じて忽忽に倦む，故お盆地を遶りて水紅を種う）」，年を取って疲れたといっても，今もなお水紅花を植えることをいう。黄庭堅「次韻子由績溪病起被召寄王定国（子由が績溪にて病より起ち，召されて王定国に寄するに次韻す）」（『全宋詩』巻980）「王子竄炎洲，万死保躯命。還家頰故紅，信亦抱淵静（王子　炎洲に竄せらるれども，万死に躯命を保つ。家に還りて頰　故お紅なり，信に亦た淵静を抱く）」，「頰故紅」は頰が今なお紅いこと。やはりその血色の良い顔を保っていることをいう。また「和外舅夙興（外舅の夙に興ずるに和す）三首」其二（『全宋詩』巻1002）「短童疲洒掃，落葉故紛披（短童　洒掃に疲れ，落葉　故お紛披す）」，掃除に疲れるけれども，落ち葉はやはり多いことをいう。陳与義「火後問舎至城南有感（火後　舎を問い，城南に至り感有り）」（『全宋詩』巻1747）「唯有君山故窈窕，二眉晴緑向人浮（唯だ君山　故お窈窕たる有り，二眉　晴緑　人に向いて浮かぶ）」，「故窈窕」はやはり奥ゆかしいこと，あるいは今なお奥ゆかしいこと。

④わざと，わざわざ。杜甫「江上値水如海勢聊短述（江上，水の海勢の如くなるに値い，聊か短述す）」（『全唐詩』巻226）「新添水檻供垂釣，故著浮槎替入舟（新たに水檻を添えて釣を垂るるに供し，故らに浮槎を著けて舟を入るるに替う）」，「故著」はわざと置くこと。また「送盧十四弟侍御護韋尚書霊櫬帰上都二十韻（盧十四弟侍御の韋尚書の霊櫬を護りて上都に帰るを送る　二十韻）」（『全唐詩』巻223）「清霜洞庭葉，故就別時飛（清霜洞庭の葉，故らに別時に就きて飛ぶ）」，霜葉はわざと飛び落ちるようで，今生の別れの悲しみが増すことをいう。白居易「過鄭処士（鄭処士を過ぐ）」（『全唐詩』巻439）「故来不是求他事，暫借南亭一望山（故らに来たるは是れ他事を求むるならず，暫く南亭を借りて一たび山を望まん）」，「故来」はわざわざ来ること。蘇軾「癸丑春分後雪（癸丑　春分の後の雪）」（『全宋詩』巻792）「不分東君専節物，故将新巧発陰機（東君　節物を専らにするを分かたず，故らに新巧を将て陰機を発す）」，これもわざとの意味。また「紅梅三首」其一（『全宋詩』巻804）「怕愁貪睡独開遅，自恐冰容不入時。故作小紅桃杏色，尚余孤瘦雪霜姿（怕愁す　睡りを貪り　独り開くこと遅きを，自ら恐る　冰容の時に入らざるを。故らに小紅桃杏の色を作し，尚お余す　孤瘦雪霜の姿）」，意味は上と同じ。また「前題（紅梅）三首」其二（『全宋詩』巻804）「也知造物含深意，故与施朱発妙姿（也た知る　造物　深意を含むを，故らに施朱を与えて妙姿を発す）」，意味は上と同じ。欧陽脩「玉楼春」（『全宋詞』）「故欹単枕夢中尋，夢又不成灯又燼（故らに単枕を欹てて夢の中に尋ねんとし，夢は又た成らず灯は又た燼く）」。周邦彦「六醜」（『全宋詞』）「長条故惹行客。似牽衣待話，別情無極（長条　故らに行客を惹く。衣を牽きて話を待ち，別情　極まる無きに似たり）」，意味はみな上と同じ。また「故故」を見よ。

・［故故］gùgù　①常にの意味。杜甫「月三首」其三（『全唐詩』巻230）「万里瞿塘峡，春来六上弦。時時開暗室，故故満青天（万里　瞿塘の峡，春来　六たび上弦。時時に暗室を開き，故故に青天に満つ）」，「開暗室」は暗い部屋を明るくすることをいい，「故故」は常に，あるいは頻りにのこと。「六上弦」を奏でるの句と「時時」の句はその意味を知ることができる。趙長卿「菩薩蛮・秋雨船中」（『全宋詞』）「不眠欹枕聴。故故添新恨

（眠れずに枕を欹てて聴き，故故に新恨を添う）」，これは頻りに新しい恨みが添えられることをいい，いつもの意味。「故②」を見よ。

②わざと，わざわざ。薛能[303]「春日使府寓懐（春日，使府に寓懐す）二首」（『全唐詩』巻559）其一「青春背我堂堂去，白髪欺人故故生（青春　我に背きて堂堂として去り，白髪　人を欺きて故故と生ず）」，これはわざと，わざわざの意味をなし，「故故」はわざわざのこと。楊万里「癸巳省宿詠南宮小桃（癸巳　省宿　南宮の小桃を詠ず）」（『全宋詩』巻2280）「孤坐南宮悄，桃花故故紅（孤坐す　南宮の悄，桃花　故故と紅なり）」，桃の花はわざと赤くなり人を悩ますことをいう。また「雨裏問訊張定叟通判西園杏花（雨の裏，張定叟通判の西園の杏花を問訊す）二首」其二（『全宋詩』巻2280）「也知雨意将無悪，為勒芳菲故故寒（也た知んぬ　雨意　将に悪まること無からんとし，芳菲を勒せられ　故故と寒し）」，寒い雨はわざと花の良い香りを引き締めることをいう。柳永「望遠行」（『全宋詞』）「待伊遊冶帰来，故故解放，翠羽軽裙重系。見纖腰囲小，信人憔悴（伊の遊冶を待ちて帰り来たり，故故と解放し，翠羽の軽裙を重系す。纖腰の囲小なるを見，人に信せて憔悴す）」，わざと着物をつなぐことをいう。「故④」を見よ。（有木）

23. 怪底 guàidǐ

①おどろく，あるいは疑うの意味。杜甫「奉先劉少府新画山水障歌（奉先の劉少府の新たに画きし山水の障の歌）」（『全唐詩』巻216）「堂上不合生楓樹，怪底江山起煙霧（堂上　合に楓樹を生ずべからず，怪底しむらくは江山か煙霧起こる）」。蘇軾「周教授索枸杞因以詩贈録呈広倅蕭大夫（周教授　枸杞を索む，因りて詩を以て贈り，録して広倅蕭大夫に呈す）」（『全宋詩』巻827）「短檠照字細如毛，怪底昏花懸両目（短檠　字を照らして細　毛の如く，怪底しむらくは両目に懸る）」。楊万里「立春日舟前細雨（立春の日，舟前の細雨）」（『全宋詩』巻2302）「急風陣陣吹白塵，著人怪底湿衣巾（急風　陣陣として白塵に吹く，人に著きて怪底しむらくは衣巾を湿らす）」。『汲古閣景鈔南宋六十家集』鄭清之「二色山茶」（『安晩堂詩集』巻七）「紅紅白白共枝栄，怪底山茶有寧香（紅紅白白　共に枝栄え，怪底しむらくは山茶に寧香有り）」。『花草粹編』巻七，汪宗臣[304]「蝶恋花・清明前両日聞燕（清明の前両日，燕を聞く）」「年去年来来去早。怪底不来，庭院春光老（年去りて年来たるに来去すること早し。怪底しむらくは来たらざるも，庭院の春光　老いたるを）」。辛棄疾「永遇楽・賦梅雪（梅雪に賦す）」（『全宋詞』）「怪底寒梅，一枝雪裏，直恁愁絶（怪底しむらくは寒梅，一枝の雪の裏，直だ愁いに恁りて絶えたり）」，以上の「怪底」字はすべて驚きのあまりいぶかるの意味。

②道理での意味。唐庚[305]「壬辰九月二十三日始寒以詩記之（壬辰の九月二十三日，始めて寒く，詩を以てこれを記す）」（『全宋詩』巻1321）「朝来怪底冷，前此已重陽（朝来たるも怪底　冷たし，前に此れ已に重陽）」。楊万里「梅花下小飲（梅花下の小飲）」（『全宋詩』巻2281）「今年春在臘前回，怪底空山早見梅（今年の春は臘前に在りて回る，怪底で　空山　早く梅を見るを）」。『汲古閣景鈔南宋六十家集』胡仲参[306]「和伯氏春雨（伯氏の春雨に和す）[307]」（『竹荘小藁』）「両堤楊柳払新亭，怪底遊人懶踏青。手捻梨花成小立，半窓湖水雨冥冥（両堤の楊柳　新亭を払えば，怪底　遊人　踏青するに懶し。手もて梨花を捻りて　小立と成る，半窓の湖水　雨　冥冥たり）」。楊炎正[308]「秦楼月」（『全宋詞』）「断腸芳草萋萋碧。新来怪底相思極（断腸の芳草　萋萋として碧なり。新たに来たる　怪底　相い思い極まる）」，以上の「怪底」字はすべて道理での意味。また「怪得」「怪来」を見よ。

・［怪得］guàidé　①おどろく，あるいは疑うの意味。白居易「和郭使君題枸杞（郭使君の枸杞に題するに和す）」（『全唐詩』巻448）「不知霊薬根成狗，怪得時聞吠夜声（知らず　霊薬の根　狗と成るを，怪得しむらくは時に夜に吠ゆる声を聞くを）」。李曽伯「満江紅・和劉倉詠雪（劉倉の雪を詠ずるに和す）」（『全宋詞』）「推枕聞鶏，正怪得乾坤都白（枕を推して鶏を聞き，正しく怪得しむらくは乾坤　都て白し）」。『楽府新編陽春白雪』巻四，徐山民「清平楽」「怪得今年偏起早，笑道牡丹開了（怪得しむらくは今年　偏えに起きること早く，笑いて道う　牡丹開き了わると）」，以上の「怪得」字はすべて驚きのあまりいぶかるの意味。「怪底①」を見よ。

②道理で，の意味。張元幹「怨王孫」（『全宋詞』）「相思怪得今番甚，寒食近，小研魚箋信（相い思うに怪得　今番　甚しく，寒食近く，小研の魚箋信）」。倪称「減字木蘭花」（『全宋詞』）「陶写須詩。怪得連篇字字奇（陶写するに詩を須う。怪得　連篇　字字　奇なり）」，以上の「怪得」字はすべて道理で，の意味。「怪底②」を見よ。

・［怪来］guàilái　①おどろく，あるいは疑うの意味。王維「班婕妤三首」其三（『全唐詩』巻128）「怪来粧閣閉，朝下不相迎。総在春園裏，花間笑語声（怪来しむらくは粧閣閉じ，朝より下るを相い迎えざるを。総て春園の裏に在りて，花間に笑語の声）」。楊万里「紫宸殿拝表賀雪（紫宸殿にて拝表して雪を賀す）」（『全宋詩』巻2295）「怪来臘日起春風，一夜瓊花発禁中（怪来しむらくは臘日　春風起こり，一夜　瓊花　禁中に発く）」，以上はすべて驚きのあまりいぶかるの意味。「怪底①」を見よ。

②道理で，の意味。韋応物[309]「休暇日訪王侍御不遇（休暇の日，王侍御を訪ねて遇わず）」（『全唐詩』巻190）「怪来詩思清人骨，門対寒流雪満山（怪来　詩思の人骨に清なること，門は寒流に対し雪は山に満つ）」。白居易「寄王秘書（王秘書に寄す）」（『全唐詩』巻442）「怪来秋思苦，縁詠秘書詩（怪来　秋思の苦しきを，秘書が詩を詠ずるに縁る）」。元稹「六年春遣懐（六年の春，懐いを遣る）八首」其五（『全唐詩』巻404）「怪来醒後傍人泣，酔裏時時錯問君（怪来　醒めし後　傍人泣く，酔裏　時時　君に錯問す）」。王安石「隴東西二首」其二（『全宋詩』巻567）「隴西流水向西流，自古相伝到此愁。添却征人無限涙，怪来嗚咽已千秋（隴西の流水　西に向いて流れ，古えより相伝　此に到りて愁う。征人に添却す　無限の涙，怪来　嗚咽するも已に千秋）」。楊万里「四月中休日聞蟬（四月中の休日，蟬を聞く）」（『全宋詩』巻2289）「荷露柳風餐未飽，怪来学語不分明（荷露　柳風　餐　未だ飽かず，怪来　語を学ぶも分明せず）」，また「都下和同舎客李元老承信贈詩之韻（都下にて同舎客李元老　信を承けて詩を贈らるるの韻に和す）」（『全宋詩』巻2278）「雲端烽烟半点無，怪来将軍不好武（雲端の烽烟　半点も無し，怪来　将軍の武を好まざるを）」，また「上元日晩過順渓（上元の日，晩く順渓を過ぐ）」（『全宋詩』巻2278）「怪来平地寒如許，雪満遠峰人未知（怪来　平地　寒きこと許くの如く，雪満ちて遠峰　人未だ知らず）」。『汲古閣景鈔南宋六十家集』許棐「訪潘叔明（潘叔明を訪ぬ）」（『梅屋詩藁』）「怪来几案無寒色，春在題詩巻子中（怪来　几案　寒色無し，春に在りて詩を題す　巻子の中）」。晁補之「黄鶯児」（『全宋詞』）「観数点茗浮花，一縷香縈炷。怪来人道陶潜，做得羲皇侶（数点の茗浮の花を観て，一縷の香　炷を縈る。怪来　人　陶潜を道い，羲皇[310]の侶と做し得たり）」。葛勝仲[311]「虞美人」（『全宋詞』）「怪来文誉満清時。柿葉書残猶自日臨池（怪来　文誉　清時に満つ。柿葉の書残り猶お自ら日に池に臨むがごとし）」，以上はすべて道理での意味。「怪底②」を見よ。（有木）

24. 管guǎn

必ず，きっと。楊万里「過雪川大渓（雪川大渓を過ぎる）」（『全宋詩』巻2287）「老夫乍喜櫂夫悶，管有到時君莫問（老夫は乍ち喜ぶも櫂夫は悶す，管ず到る時有り　君　問う莫かれ）」，きっと時が来ることがあることをいう。また「江行七日阻風至繁昌舎舟出陸（江行すること七日，風に阻まれ繁昌の舎に至り，舟　陸に出づ）」（『全宋詩』巻2307）「管取如今遵陸了，雲開風順水東流（管ず取らん　今の如く陸に遵い了われば，雲開き　風順い　水は東に流る）」，「管取」は保証することをいう。蘇軾「殢人嬌・戲邦直（邦直に戯れる）」（『全宋詞』）「別駕来時，満城灯火無数。向青瑣隙中偷覷，元来便是，共採鸞仙侶。方見了，管須低声説与（別駕　来たりし時，満城の灯火　無数なり。青瑣の隙に向かいて中ば偷み覷れば，元来便ち是れ，共に鸞仙の侶を採る。方に見了われば，管ず低声を須いて説かんや）」，「管須」は必ず要するの意味。黄庭堅「卜算子[312]」（『全宋詞』）「要見不得見，要近不得近。試問得君多少憐，管不解，多於恨（見るを 要むるも見るを得ず，近きを要むるも近きを得ず。試問す　君を得て多少ぞ憐れむ，管ず解せず，恨みよりも多きを）」，「管不解」は決して～できないことをいう。周邦彦「蝶恋花・詠柳（柳を詠む）[313]」（『全宋詞』）「擬插芳条須満首，管教風味還勝旧（芳条を插すに擬して須らく首に満つべし，管ず風味をして還た旧に勝たしむ）」，「管教」はきっと～させることをいう。曽覿「酔落魄」（『全宋詞』）「百般做処百廝愜。管是前生，曽負你冤業（百般做す処　百廝愜し。管ず是れ前生に，曽て你の冤業を負わん）」，「管是」は必ずのこと。石孝友「清平楽」（『全宋詞』）

「酔紅宿翠。髻鞞烏雲墜。管是夜来不得睡。那更今朝早起（紅に酔いて翠に宿る。髻鞞れて烏雲墜つ。管ず是れ夜来たるも睡るを得ず。那ぞ更に今朝早く起きん）」，意味は同じ。朱敦儒[314]「憶帝京」（『全宋詞』）「管取没人嫌，便総道，先生俏（管ず取らん　人の嫌う没し，便ち総て道う，先生俏し）」。劉克荘「摸魚児」（『全宋詞』）「愁個甚。君管取，有薇堪采松堪蔭（個の甚しきを愁う。君管ず取らん，薇は采るに堪えて松は蔭うに堪える有り）」。戴善甫[315]『陶学士酔写風光好』（『全元曲』）第一折「則消得我席上歌金縷，管取他尊前倒玉山（わたしが席上にて金縷を歌えば，必ずや樽の前にて玉山のごとく倒れん）」，意味は全て先に見える。『劉知遠諸宮調』巻十二「有一事最大，救取夫人，不管分毫有損害（大事なことは夫人を助けることで，必ず少しの損害も出さないだろう）」，また「只管擒賊不管敗（おそらくは賊を打ち負かして捕らえるだろう）」，勝つと限らないし負けるとも限らないということをいう。また「多管是」を見よ。

・［多管是］duōguǎnshì　熟語の一つ，大部分はきっと，必ずの意味で，まだ全然確定していないこと，「多敢是」の意味に近い。鄭光祖『迷青瑣倩女離魂』（『全元曲』）第一折「他多管是意不平，自発揚（あの方はおそらくはご不満なれば，みずからを奮い立たせん）」。関漢卿『望江亭中秋切鱠』（『全元曲』）第二折「多管是前妻将書至，知他娶了新妻（おそらくは前妻が手紙を寄越し，かのひとは新妻を娶ったことを知った）」。『西廂記』第三本第三折「便做道摟得慌呵，你好索覷咱，多管是餓得你個窮神眼花（すなわち抱くこと慌てたりといえども，お前はまた私を見るだろうが，おそらくはこれお前の貧乏書生を飢えさせて目がくらむだろう）」，また第四本第一折「望得人眼欲穿，想得人心越窄，多管是冤家不自在（あの人を望み見て眼を穿たんと思い，あの人を想って心はいよいよ迫る。おそらくは心に任せることもできない）」，また第五本第一折「我這裡開時和淚開，他那裡修時和淚修，多管閣著筆尖児未写早淚先流（われここに手紙を開く時涙とともに開き，かれかしこにしたためる時涙とともにしたため，おそらくは筆先を擱いて未だしたためないうちに早くも涙が先ず流れてしまう）」，意味は全て同上。「管」を見よ。（有木）

25. 過 guò

動詞。送る，与える，渡す等の意味。杜甫「夏日李公見訪（夏日　李公訪わる）」（『全唐詩』巻216）「隔屋喚西家，借問有酒不。牆頭過濁醪，展席俯長流（屋を隔てて西家を喚び，借問す　酒有りや不やと。牆頭より濁醪を過る，席を展べて長流に俯す）」，これは隔てた垣根ごしに酒を送ること。孟郊[316]「自惜」（『全唐詩』巻374）「傾尽眼中力，抄詩過与人（眼中の力を傾け尽くす，詩を抄して人に過与う）」。李山甫[317]「柳十首」其二（『全唐詩』巻643）「尋常送別無余事，争忍攀将過与人（尋常　送別に余事無し，争でか忍びん　攀りて将に人を過与らんとするを）」。牛嶠[318]「玉楼春」（『全唐詩』巻892）「雁帰不見報郎帰，織成錦字封過与（雁　帰るも郎の帰るを報ずるを見ず，錦に字を織り成して封じ過与らん）」。この三例の「過与」は全て送る，与えるの意味。敦煌詞「抛球楽」（『雲謡集雑曲子[319]』）「当初姉姉分明道，莫把真心過与他（当初　姉姉　分明に道う，真心を把りて他に過与す莫かれ）」，また「魚歌子」（『雲謡集雑曲子』）「五陵児恋嬌態女，莫阻来情従過与（五陵児　嬌態の女を恋う，阻む莫かれ　来情[320]　従いて過与すことを）」。張文成『游仙窟[321]』「今朝若其不得，剰命過与黄泉（今朝　若し其れ得ざれば，命を剰して黄泉に過与さん）」。以上は渡すの意味である。陳師道「臨江仙　送畳羅菊与趙使君（畳羅[322]菊を送り趙使君に与う）」（『全宋詞』）「過与後房歌舞手，軽盈喜色生顔（後房の歌舞の手に過与れば，軽盈なる喜色　顔に生ず）」。また「卜算子[323]」（『全宋詞』）「還把最繁枝，過与偏憐底（還た最も繁なる枝を把りて，偏憐[324]なる底に過与る）」。呂渭老[325]「点絳唇」（『全宋詞』）「過愁伝怨。只許灯光見（愁いを過り怨みを伝うるに，只許だ灯光を見るのみ）」。張小山[326]の小令「折桂令」（『全元曲』）「可喜娘春纎過茶（喜ぶべし　娘の春纎[327]もて茶を過るを）」。『元曲選外編』関漢卿『詐妮子調風月』第二折「明日索一般供与他衣袂穿，一般過与他茶飯吃（明日は衣服を着替えさせて，ご飯をあげよう）」。また関漢卿『閨怨佳人拜月亭』（『全元曲』）第二折「則我独自一個婆娘，与他無明夜過薬煎湯（わたしは，夜が明けなければ薬湯をあげよう）」。これらの用法は全て先に引用した杜甫詩と同じ。劉唐卿[328]『降桑椹蔡順奉母』（『全元曲』）第一折「我路見不平，将那年少拉将過来，三拳両脚，過打死了（私の路は困難で，あの若い者がやってくれば，何度もたたき殺してやる）」。この「過打死了」はたたき殺してやるの意味。「過」には送るの意味があり，「度」も送るの意味があるため，両者は畳用して同義複語になる。馬致遠[329]『馬丹陽三度任風子』（『全

元曲』）第三折「兄弟，咱宰了一個牲口児，与他個快性者。要往人口裏過度的茶飯，打当的乾浄（兄弟よ，俺らは一匹を屠り，あれは生かそう。もし人の口に入るなら，きれいに平らげられるだろう）」。

㊟「過」は送る，与えるなどの意味を表すことは，現代広東語からも証明できる。魯迅[330]の『略談香港[331]』の一文には当時の『循環日報』に掲載された香港総督の金文泰の演説が引用され，その中に，「個份雑誌，書面題辞，有四句集文選句，十分動人嘅。我願借嚟貢献過各位（この雑誌のタイトルにある四字句は『文選』からとっており，大いに人を感動させるので，私は皆様にご披露したい）」とある。演説は広東語なまりのため，魯迅は「嘅＝的。嚟＝来。過＝給」と注を付ける。これによると「給」と「過」は方言の違いに過ぎず，実際には同じ言葉である。ほかに蔣礼鴻『敦煌変文字義通釈』（中華書局）第4篇「過与」の条もこの意味で収録されている。（有木）

26. 過従 guòcóng

いいかげんにあしらう。馬致遠『江州司馬青衫涙』（『全元曲』）第四折「是他百般地，奶奶行，過従不下（あの人がいかにせんとも，遣り手の婆（ばばあ）は取り付く島なし）」，いい加減にあしらうことができないことをいう。三十種本『博望焼屯』「怎禁咱徐庶向人前把我強過従（どうして徐庶が人前で私をいい加減に扱えることができようか）」，私を推挙するのにいい加減に対応されているようみえたことをいう，これは徐庶が様々な事に精通していることを指す。無名氏『龐涓夜走馬陵道』（『全元曲』）第一折「他那裏一一問行蹤，俺兄弟悄悄的嘶過従。好教我意躊躇，下裏可兀的難趨奉（公子様は逐一事情を尋ねても，われら兄弟はのらりくらりとかわした。本当に私の気持ちを躊躇せしめて，二人ともに答えにくい）」，あらすじによれば「他」は魏公子を指し，「兄弟」は龐涓を指す。これは龐涓が孫臏に魏公子の前で劣っているようにみせかけさせ，孫臏がその意を汲んだ言葉。「嘶過従」とは相手に任せきることで，この問題点をいい加減にすることをいう。『梨園按試楽府新声[332]』巻上，商政叔[333]「一枝花・遠寄（遠きに寄す）」「待勉強過従，枉費神思（勉強して過従（おざなり）にするを待ちて，枉げて神思を費やす）」，適当にあしらうことを強いることをいう。『雍熙楽府』巻九，「梁州第七・妓門庭」「端的俺許你。許你這一片心過従着四下里（端的に俺は你を許す。你が這の一片の心は四下里に過従着（おざなり）にするを許す）」，どこにでもいいかげんにすることをいう。『朝野新声太平楽府』巻八，宋方壺[334]「一枝花・妓女」「准備下些送旧迎新，安排下些過従的見識（准備の下些（もと）　旧を送り新を迎え，安排の下些（もと）　過従的（おざなり）な見識）」，「見識」とは計画することで，いいかげんに計画することをいう。（有木）

27. 好去 hǎoqù

留まる者が行く者をねぎらう言葉。杜甫「送張二十参軍赴蜀州因呈楊五侍御（張二十参軍の蜀州に赴くを送り，因りて楊五侍御に呈す）」（『全唐詩』巻224）「好去張公子，通家別恨添（好し去れ　張公子，通家に別恨添う）」。劉禹錫「楊柳枝詞九首」其九（『全唐詩』巻365）「春尽絮飛留不得，随風好去落誰家（春尽きて絮飛　留め得ず，風に随いて　好し去れ　誰（た）が家にか落ちん）」。白居易「南浦別（南浦に別る）」（『全唐詩』巻441）「南浦淒淒別，西風嫋嫋秋。一看腸一断，好去莫回頭（南浦に淒淒として別る，西風　嫋嫋として秋なり。一たび看れば腸一たび断ゆ，好し去れ　頭を回らす莫かれ）」，また「待漏入閣書事奉贈元九学士閣老（漏を待ちて閣に入りしとき，事を書して元九学士閣老に贈り奉る）」（『全唐詩』巻442）「好去鴛鸞侶，冲天便不還（好し去れ　鴛鸞の侶，天に冲して便ち還らざれ）」。金地蔵「送童子下山（童子が下山するを送る）」（『全唐詩』巻808）「好去不須頻下涙，老僧相伴有煙霞（好し去れ　頻りに涙下るるを須（もち）いず，老僧　相い伴いて煙霞有り）」，金地蔵は新羅の皇族であり，その詩は『全唐詩』に収録されている。唐の宣宗の時の宮人の韓氏「題紅葉（紅葉に題す）」（『全唐詩』巻797）「流水何太急，深宮尽日閑。殷勤謝紅葉，好去到人間（流水　何ぞ太（はなは）だ急なる，深宮　尽日閑なり。殷勤として紅葉に謝す，好し去れ　人間に到れと）」。李中[335]「放鷺鷥（鷺鷥を放つ）」（『全唐詩』巻750）「好去蒹葭深処宿，月明応認旧江秋（好し去れ　蒹葭　深き処の宿，月明らかに応（まさ）に旧江の秋を認むべし）」。陳允平[336]「訴衷情（衷情に訴う）」（『全宋詞』）「怨紅一葉，流水東風，好去人間（紅一葉を怨む，流水東風，好し去れ　人間に）」。『朝野新声太平楽府』巻九に馬致遠「耍孩児・借馬（馬

を借る)」「道一声好去，早両涙双垂（一声を道う　好し去れ，早に両涙　双び垂れり)」とある。(有木)

28. 好在 hǎozài

①おうかがいの言葉，元気でしょうか。杜甫「送蔡希魯都尉還隴右因寄高三十五書記（蔡希魯都尉の隴右に還るを送り，因りて高三十五書記に寄す)」(『全唐詩』巻224)「因君問消息，好在阮元瑜（君に因りて消息を問う，好在なりや阮元瑜)」，思うに阮元瑜によって高書記を例えているのだろう。白居易「初到忠州贈李六（初めて忠州に到り，李六に贈る)」(『全唐詩』巻441)「好在天涯李使君，江頭相見日黄昏（好在なるや天涯の李使君，江頭に相い見て　日　黄昏たり)」，また「代人贈王員外（人に代りて王員外に贈る)」(『全唐詩』巻442)「好在王員外，平生記得不（好在なり　王員外，平生　記し得たるや不や)」。張籍「和長安郭明府与友人県中会飲（長安の郭明府が友人と県中にて会飲するに和す)」(『全唐詩』巻386)「一尊清酒両人同，好在街西水県中（一尊の清酒　両人と同じく，好在なりや街西水県の中)」，以上はすべて相手に対して直接安否を尋ねる言葉で，すべて元気だろうかと解釈できる。

②転じて無事であることを指す。柳宗元[337]「再上湘江（再び湘江を上る)」(『全唐詩』巻351)「好在湘江水，今朝又上来（好在なり　湘江の水，今朝　又た上り来たる)」，これは湘江を旧友とみなして，旧友が無事であることをいう。白居易「履道池上作」(『全唐詩』巻451)「家池動作経旬別，松竹琴魚好在無（家池　動もすれば経旬の別れを作す，松竹琴魚　好在なりや無や)」，安否を尋ねる意味。蘇軾「和子由初到陳州見寄（子由　初めて陳州に到りて寄せらるに和す）二首[338]」其二（『全宋詩』巻789)「旧隠三年別，松杉好在不（旧と三年の別れを隠む，松杉　好在なりや不や)」，また「答王定民（王定民に答う)」(『全宋詩』巻800)「筆蹤好在留台寺，旗隊遥知到石溝（筆蹤　好在なり　台寺に留め，旗隊　遥かに知る　石溝に到るを)」，意味は寺の壁に無事であることを書きおいたということ。賀鑄「風流子」(『全宋詞』)「念北裏音塵，魚封永断。便橋煙雨，鶴表相望。好在後庭桃李，応記劉郎（北裏の音塵を念うも，魚封　永く断つ。便橋[339]の煙雨，鶴表　相い望む。好在なり　後庭の桃李，応に劉郎を記すべし)」，これは桃李を旧友にみなし，旧友が無事であることをいう。蘇軾「南郷子」(『全宋詞』)「不到謝公台。明月清風好在哉（謝公台に到らず。明月清風　好在なるかな)」，つつがないことをいう。丘密「満江紅」(『全宋詞』)「十載重遊，愧好在，呉中父老。官事裏，空然癡絶，竟何曽了（十載　重ねて遊び，好在なるを愧ず，呉中の父老。官事の裏，空然として癡絶なり，竟に何ぞ曽て了わらん)」，これは年配者が無事であることの意で，愧ずとは謝辞のことをいう。周密[340]「甘州」(『全宋詞』)「喜故人好在，水駅寄詩筒（故人の好在なるを喜び，水駅　詩筒を寄す)」，旧友が無事であることをいう。

③依然として。常建[341]「長安落第（長安にて落第す）[342]」(『全唐詩』巻144)「家園好在尚留秦，恥作明時失路人。恐逢故里鶯花笑，且向長安度一春（家園　好在として尚お秦に留まる，恥ずらくは明時なるも失路の人と作るを。恐らくは故里の鶯花の笑くに逢わんことを，且く長安に向いて一春を度る)」，家園は昔から秦にあり，しばらく客となることをいう。陸游「湖上」(『全宋詩』巻2215)「猶憐不負湖山処，好在平生旧釣磯（猶お憐む　湖山に負かざる処，好在お平生　旧とのごとく磯に釣る)」，これは相変わらず魚を釣って暮らしていることをいう。また「乙丑元日」(『全宋詩』巻2214)「好在屠蘇酒，扶衰把一巵（好在お屠蘇酒あり，衰いを扶けて一巵を把る)」，これはいつも通りに屠蘇酒を飲むことをいう。陳人傑[343]「泌園春」(『全宋詞』)「看錦江好在，臥龍已矣，玉山無恙，躍馬何之（錦江の好在たるを看，臥龍　已む，玉山　恙無く，馬を躍らせて何れに之かん)」，これは錦江が元のままであることをいう。史達祖[344]「風流子」(『全宋詞』)「想霧帳吹香，独憐奇俊。露盃分酒，誰伴嬋娟。好在夜軒凉月，空自団円（霧帳に香を吹くを想い，独り奇俊を憐む。露盃　酒を分かち，誰か嬋娟を伴わん。好在お夜軒の凉月，空しく自ら団円)」，「想」字より下六句は一気に読み，相変わらず月が丸いことをいう。陳亮[345]「好事近・咏梅（梅を咏ず)」(『全宋詞』)「好在屋簷斜入，傍玉奴横笛（好在お屋簷　斜めに入り，玉奴の横笛に傍う)」，これは梅の影が相変わらず斜めであることをいう。趙以夫[346]「芙蓉月」(『全宋詞』)「記天香国色，曽占春暮。依然好在，還伴清霜凉露（天香の国色[347]を記せば，曽て春暮を占むる。依然として好在お，還た清霜　凉露を伴う)」，これは依然変わらないことをいう。また「尾犯　重九和劉随如（重九に劉随如に和す)」「黄花長好在，俯仰節物驚換（黄花　長えに好在お，俯仰すれば節

物　驚換す)」，菊の花がもとのままであるという。(有木)

29. 好住hǎozhù

去る者が留まる者をねぎらう言葉。元稹「酬楽天酔別（楽天の酔いて別るに酬ゆ)」(『全唐詩』巻415)「前回一去五年別，此別又知何日回。好住楽天休悵望，匹如元不到京来（前回一たび去りて五年別る，此の別れ又た知んぬ何れの日にか回らん。好住なれ　楽天　悵望するを休めよ，元のごとく京に到り来たらざるが匹如し)」。白居易「別種東坡花樹両絶（東坡に種えし花樹に別る　両絶)」其二（『全唐詩』巻441)「花林好住莫憔悴，春至但知依旧春。楼上明年新太守，不妨還是愛花人（花林　好住して　憔悴する莫かれ，春至らば但だ知る　旧に依りて春なるを。楼上　明年の新太守，妨げず　還た是れ花を愛する人なるを)」。また「答林泉（林泉に答う)」(『全唐詩』巻488)「好住旧林泉，回頭一悵然（好住せよ　旧林泉，頭を回らして一えに悵然たり)」。王建「別自栽小樹（別に自ら小樹を栽ゆ)」(『全唐詩』巻301)「去年今日栽，臨去見花開。好住守空院，夜間人不来（去年の今日　栽えたり，去るに臨みて花の開くを見る。好住なれ　空院を守り，夜間にして人の来たらざるを)」。賀鑄「小重山」(『全宋詞』)「月華歌調転清商。尊酒畔，好住伴劉郎（月華　歌調　清商を転ず。尊酒の畔，好住なれ　劉郎を伴うを)」。また「減字木蘭花」(『全宋詞』)「探香幽径。好住東風誰主領。多謝流鶯。欲別頻啼四五声（香を幽径に探ぬ。好住なれ　東風　誰か主領ならん。多く謝す流鶯[348]。別れんと欲し頻りに啼くこと四五声)」。(有木)

30. 合hé

①動詞，囲む，めぐらす。陳子昂[349]「入東陽峽与李明府舟前後不相及（東陽の峽に入りて李明府舟と与に前後して相い及ばず)」(『全唐詩』巻84)「路転青山合，峰迴白日曛（路転じて青山を合り，峰迴りて白日曛し)」。李白「謁老君廟（老君廟に謁す)」(『全唐詩』巻180)「草合人蹤断，塵濃鳥跡深（草合りて人蹤断え，塵濃かにして鳥跡深し)」。孟浩然「過故人莊（故人の莊を過ぐ)」(『全唐詩』巻160)「緑樹村辺合，青山郭外斜（緑樹　村辺に合り，青山　郭外に斜めなり)」。杜甫「子規」(『全唐詩』巻229)「両辺山木合，終日子規啼（両辺　山木合り，終日　子規啼く)」。高適[350]「送鄭侍御謫閩中（鄭侍御の閩中に謫せらるるを送る)」(『全唐詩』巻214)「東路雲山合，南天瘴癘和（東路　雲山を合り，南天　瘴癘和す)」。岑参「登嘉州凌雲寺作（嘉州の凌雲寺に登りて作る)」(『全唐詩』巻198)「回合俯近郭，寥落見遠舟（回合りて近郭に俯き，寥落として遠舟を見る)」，最後のこの二句は凌雲寺に登って周囲を取り囲む町を見下ろし，遠くの舟を望み見るという意味である。

②形容詞，転じて行き渡っていること。孟浩然「上巳洛中寄王九迴（上巳　洛中　王九迴に寄す)」(『全唐詩』巻160)「垂柳金堤合，平沙翠幕連（垂柳　金堤合く，平沙　翠幕連なる)」。李白「雨後望月（雨後　月を望む)」(『全唐詩』巻185)「万里舒霜合，一条江練横（万里　舒霜合く，一条　江練横う)」，また「見京兆韋参軍量移東陽（京兆の韋参軍が東陽に量移せらるるを見る）二首」其二（『全唐詩』巻168)「猿嘯千谿合，松風五月寒（猿嘯　千谿合く，松風　五月寒し)」。杜甫「奉待厳大夫（厳大夫を待ち奉る)」(『全唐詩』巻228)「欲辞巴徼啼鶯合，遠下荊門去鷁催（巴徼を辞せんと欲すれば啼鶯合し，遠く荊門に下らんとして去鷁催す)」，また「紫宸殿退朝口号」(『全唐詩』巻225)「香飄合殿春風転，花覆千官淑景移（香は合く殿に飄りて春風転じ，花は千官を覆いて淑景移る)」。

③動詞，類する，似る。李白「贈張相鎬（張相鎬に贈る）二首」其一（『全唐詩』巻170)「秀骨象山嶽，英謀合鬼神（秀骨　山嶽に象り，英謀　鬼神に合たり)」。杜甫「夔州歌十絶句」其四（『全唐詩』巻229)「楓林橘樹丹青合，復道重楼錦繡懸（楓林　橘樹　丹青に合て，復道　重楼　錦繡　懸る)」，「丹青合」とは絵画に似ているということ。高適「同河南李少尹畢員外宅夜飲時洛陽告捷遂作春酒歌（河南の李少尹と同に畢員外の宅にて夜飲みし時，洛陽より告捷して遂に春酒の歌を作る)」(『全唐詩』巻213)「故人美酒勝濁醪，故人清詞合風騒（故人の美酒は濁醪に勝り，故人の清詞は風騒に合たり)」，また「鶻賦」(『文苑英華』巻136)「合連

弩之応機，類鳴胃之破的（連弩の機に応ずるに合て，鳴胃[351]の的を破るに類す）」。劉長卿「送斉郎中典括州（斉郎中の括州を典るを送る）」（『全唐詩』巻147）「樹色双渓合，猿声万嶺同（樹色　双渓に合じく，猿声　万嶺に同じ）」，「双渓」は婺州の川の名。上に挙げた「合」の例は，「象」「類」「同」などと対比され，「類似」と同じ意味。（有木）

31. 合下héxià

直ちに，最初の意。黄庭堅「少年心」（『全宋詞』）「合下休伝音問（合下に音問を伝えるを休めよ）」。『董解元西廂記』巻三「当初遭難，与俺成親事，及至如今放二四，把如合下休許咱家（そもそもの初めに難に遭ったとき，私と結婚するなら，今までの勝手なふるまい，初めから約束しなければよかった）」。（有木）

32. 合造hézào

本来は，もたらす，寄せ集まる，の意味で，多くは思い通りにならない状況を指す。転じて，からかったり，理不尽なことをいうこと。楊万里「湖天暮景五首」其四（『全宋詩』巻2301）「暮雲薄倖斜陽劣，合造清愁付阿誰（暮雲は薄倖し　斜陽は劣え，清愁を合造して阿誰に付さん）」，「暮雲」と「斜陽」が共に愁いを醸し出すという意。沈端節「喜遷鶯」（『全宋詞』）「暮雲千里，正小雨乍晴，霜風初起。蘆荻江辺，月昏人静，独自小船児裏。消魂幾声新雁，合造愁人天気（暮雲千里，正に小雨は乍ち晴れ，霜風初めて起こる。蘆荻の江辺，月昏く人静かに，独自り小船児の裏。消魂す　幾声の新雁，愁人を合造す天気[352]）」，「愁人天気」とは先に述べる様々な景物が意図をもって寄せ集まってくるという意。劉仙倫[353]「系裙腰・愁別（別れを愁う）」（『全宋詞』）「山児矗矗水児清，船児似葉児軽。風児更没人情。月児明。廝合造，送人行（山児は矗矗[354]として水児は清し，船児は葉児の軽きに似たり。風児は更に人情没し。月児は明らかなり。廝く合造まりて，人の行くを送ること）」，「合造」の言葉の裏には離別の愁いのような意味が含まれている。黄升「鵲橋仙　春情」（『全宋詞』）「宝釵無拠，玉琴難托，合造一襟幽怨（宝釵　拠る無し，玉琴　托し難し，一襟の幽怨を合造む）」。『全宋詞』の無名氏「愁倚闌令[355]」に「東風悪，宿雲凝，忒無情，合造梨花深院雨，断腸声（東風は悪く，宿雲は凝る，忒だ無情，梨花　深院の雨を合造す，断腸の声）」。邵亨貞「摸魚子　呉門客中九日次魏彦文韻（呉門の客中，九日，魏彦文の韻に次す）」（『全元詞』）「秋又暮，奈合造凄凉，無処無笳鼓（秋又た暮れ，奈ぞ凄凉を合造さん，処として笳鼓無きは無し）」，以上は全て本来のもたらすの意味。『董解元西廂記』巻八「謔得紅娘，忙扯着道。休廝合造。您両箇死後不争，怎結末這禿屌（紅娘は驚き慌てて引きとどめて言うには，「冗談を言わないでください。二人が死んだところで何になろうか。この禿げ坊主をどうしようか」）」，これは紅娘が崔鶯鶯と張生の二人にからかわれた言葉。「休廝合造」とはからかうな，冗談を言うなという意味。これは本来の意味を転じた意。

・［合皂］hézào 「合造」と同じ。蔣捷[356]「解珮令・春」（『全宋詞』）「春雨如糸，繡出花枝紅裊，怎禁他，孟婆合皂（春雨　糸の如し，花枝　紅裊[357]を繡出す，怎でか他の孟婆の合皂うを禁ぜん）」，これは本来の意味を転じた意。「孟婆」とは風神のこと。末句は百花が東風のいたずらを受けざるをえないという意味。

・［合燥］hézào 「合造」と同じ。鄭光祖「駐馬聴近（馬を駐めて近きを聴く）・秋閨」（『朝野新声太平楽府』巻六[358]）「一点来不勾身躯小，響喉嚨針眼里応難到。煎聒的離人，鬬来合燥，草虫之中無你般薄劣把人焦（一点として来たり勾らず　身躯の小さきを，喉嚨を響かすも針眼の里　応に到り難し。煎聒的の離人，鬬来合燥う，草虫の中に　你般　人の焦るを把りて薄劣[359]する無きを）」，「鬬来合燥」とは人をからかう意味。『董解元西廂記』巻八「鄭恒打慘道，把如喫恁摧残，廝合燥，不出衙門，覓箇身亡却是了（鄭恒は怖じ気をふるって言うには，もしあんなはずかしめやこんなからかいを受けるくらいなら，役所を出ずに，死んだ方がましだ）」，「合燥」と「摧残」は互文である。

・［閤皂］hézào 「合造」と同じ。向子諲[360]「鷓鴣天・老妻生日」（『全宋詞』）「欲知福寿都多少，閤皂清江可

比肩（福寿の都て多少なるを知らんと欲せば，清江を閣皂めるに比肩すべし）」，これは景気の良いことの喩えで，やや特殊である。意味は妻の長寿を，江が清流を集めたことと比べている。

・［造合］zàohé 「合造」と同じ。「合造」がたまたま逆さになり「造合」となった。楊沢民「丹鳳吟」（『全宋詞』）「先自宿酲似病，共愁造合滋味悪（先ず自ら宿酲[361]は病に似たり，共く愁う　滋味の悪しきを造合すを）」。（有木）

33. 何当 hédāng

①何れの日か。古絶句（『玉台新詠』巻10）に「何当大刀頭，破鏡飛上天（何れの当にか大刀の頭となるべき，破鏡　天に飛び上らん）」，大刀の頭とは，刀についている「環」を「還」の寓意とし，いつ還るのだろうかという意味。杜甫「秦州雑詩二十首」其十四（『全唐詩』巻225）「何当一茅屋，送老白雲辺（何れの当にか一茅屋，老いを送らん白雲の辺に）」，「当」はあるいは「時」に作り，「何当」は何れの時かの意味である。また「厳鄭公階下新松得霑字（厳鄭公の階下の新松，霑の字を得たり）」（『全唐詩』巻228）「未見紫煙集，虚蒙清露霑。何当一百丈，敧蓋擁高簷（未だ見ず　紫煙の集まるを，虚しく蒙る　清露の霑すを。何れの当にか一百丈，敧蓋　高簷を擁すべし）」，いつかは百丈もの高さの松になることをいう。李商隠「夜雨寄北（夜雨　北に寄す）」（『全唐詩』巻539）「何当共剪西窓燭，却話巴山夜雨時（何れの当にか共に西窓の燭を剪り，却って話らん巴山夜雨の時）」，いつかは西窓の蝋燭の芯を切って一緒に今夜のことを話そうという意味。温庭筠[362]「送人東遊（人の東遊するを送る）」（『全唐詩』巻581）「何当重相見，尊酒慰離顔（何れの当にか重ねて相い見ん，尊酒　離顔を慰む）」，いつか再び会うことをいう。蘇軾「再過超然台贈太守霍翔（再び超然台を過ぎ，太守霍翔に贈る）」（『全宋詩』巻809）「山中児童拍手笑，問我西去何当還（山中の児童　手を拍って笑う，我に問う　西に去って何れの当にか還るべきと）」，いつ帰るのかという意味。陳師道「送内（内に送る）」（『全宋詩』巻1114）「関河万里道，子去何当帰。三歳不可道，白首以為期（関河万里の道，子　去りて何れの当にか帰らん。三歳　道うべからず，白首以て期と為す）」。

②検討する言葉。～してみたらどうか，あるいは，どうであるかという意味。ひとつ～してみたらどうかと解釈できる。孟浩然「九月九日峴山寄張子容（九月九日，峴山の張子容に寄す）[363]」（『全唐詩』巻159）「何当載酒来，共酔重陽節（何当ぞ酒を載せて来たらん，共に酔わん重陽節）」，その日は重陽の節句であるので，何れの日かとは解釈できない。李益[364]「竹窓聞風寄苗発司空曙（竹窓にて風の苗を寄するを聞き，司空曙に発す）」（『全唐詩』巻283）「時滴枝上露，稍沾階下苔。何当一入幌，為払緑琴埃（時に滴る　枝上の露，稍く沾す　階下の苔。何当ぞ一たび幌に入り，為に緑琴の埃を払わん）」，風が起こって露を滴らせ，苔を湿らすので，琴の埃を払うために幌に入ってはどうかといい，これも何ぞ～ざると解釈できる。陳師道「答無咎画苑（無咎の画苑に答う）[365]」（『全宋詩』巻1115）「君家画苑傾東都，錦囊玉軸行盈車。補完破砕収亡逋，欲得不計有与無。問君此病何当祛，君言無事聊自娯（君が家の画苑　東都を傾く，錦囊玉軸　行く車に盈つ。破砕を補完して亡逋を収む，有りと無しとを計らざるを得んと欲す。君に問う　此の病　何当ぞ祛わん，君言う　事無くんば聊か自ら娯しまん）」，病とはその収集癖をいい，この癖をちょっと除いてみないかということで，これも何ぞ～ざると解釈できる。『宋百家詩存[366]』巻十八，周紫芝[367]「読林和靖集書其尾（林和靖集を読みて其の尾に書す）」「呉児不解高人意，秋菊何当薦一杯（呉児　高人の意を解せず，秋菊　何当ぞ一杯を薦めん）」，一杯薦めてもかまわないという意味。『瀛奎律髄』巻十七，曽茶山[368]「仲夏細雨」「何当一傾倒，趁取未帰雲（何当ぞ一えに傾倒せん，趁取す　未だ帰らざる雲）」，細雨が一転して大雨となってもかまわないという意。何如の意味に解釈できる。蘇軾「泛舟城南会者五人分韻賦詩得人皆苦炎字（舟を城南に泛べ，会する者五人，分韻して詩を賦す，人皆　苦炎の字を得たり）四首」其二（『全宋詩』巻802）「苦熱誠知処処皆，何当危坐学心斎（苦熱　誠に知る処処皆きを，何当ぞ危坐して心斎を学ばん）」，これは穏やかなこころで熱さに気づかなくなってはどうだろうかという意味。また「大雪青州道上有懐東武園亭寄交代孔周翰（大雪のとき，青州道上，東武園亭を懐う有り，交代の孔周翰に寄す）」（『全宋詩』巻798）「君不見淮西李侍中，夜入蔡州縛取呉元済。又不見襄陽孟浩然，長安道上騎驢吟雪詩。何当閉門飲美酒，無人毀誉河東守（君見ずや　淮西の李侍中，

夜　蔡州に入りて呉元済を縛取せしを。又た見ずや　襄陽の孟浩然，長安道上　驢に騎りて雪の詩を吟ぜしを。何当ぞ門を閉じて美酒を飲まん，人の河東の守を毀誉する無かれ)」，門を閉じて酒を飲んだらどうかという意味。また「次韻孔毅甫集古人句見贈（孔毅甫が古人の句を集めて贈らるるを次韻す）五首」其四（『全宋詩』巻805)「夜吟石鼎声悲秋，可憐好事劉与侯。何当一酔百不問，我欲眠矣君帰休（夜吟ずれば石鼎　声悲秋，憐むべし　好事　劉と侯と。何当ぞ一たび酔いて百たび問わざらん，我眠らんと欲す　君　帰り休めよ)」，一杯飲んだらどんなことでも聞けという意。また「和子由論書（子由が書を論ずるに和す）[369]」(『全宋詩』巻788)「多好竟無成，不精安用夥。何当尽屏去，万事付懶惰（多ければ好むこと竟に成る無し，精しからずんば安んぞ夥きを用いん。何当ぞ尽く屏去して，万事懶惰に付さん)」，一切の交友を絶ったらどうかという意味。范成大「癸亥日泊舟呉会亭（癸亥の日，呉の会亭に泊舟す)」(『全宋詩』巻2244)「山中故人応大笑，扁舟坐穏何当帰（山中の故人　応に大笑すべし，扁舟　坐ろに穏やかにして何当ぞ帰らん)」，帰ったらどうかという意味。これも何ぞ～ざるとして解釈できる。

③安んぞ～得ん。岑参「阻戎瀘間群盗（戎瀘の間にて群盗に阻まる)」(『全唐詩』巻198)「帝郷北近日，瀘口南連蛮。何当遇長房，縮地到京関。願得随琴高，騎魚向雲煙（帝郷は北のかた日に近く，瀘口は南のかた蛮に連なる。何んぞ当に長房に遇い，地を縮めて京関に到るべき。願わくは琴高に随い，魚に騎りて雲煙に向かうを得ん)」，どうして費長房に逢えようかという意味で，琴高に随いたいという句と対応する。杜甫「秋雨歎（秋雨の歎き）三首」其二（『全唐詩』巻216)「去馬来牛不復弁，濁涇清渭何当分（去馬来牛　復た弁ぜず，濁涇清渭　何んぞ当に分かつべけん)」，涇と渭はどうして分かれようか，つまりは水の勢いが強いことを詠んでいる。また「彭衙行」(『全唐詩』巻217)「別来歳月周，胡羯仍搆患。何当有翅翎，飛去墮爾前（別来　歳月周るも，胡羯仍お患いを搆う。何んぞ当に翅翎有りて，飛び去りて爾が前に墮つべき)」，どうして翼が生えようかという。曹鄴[370]「長城下」(『全唐詩』巻592)「何当生燕羽，時得近雕梁（何んぞ当に燕羽を生ぜん，時に雕梁に近きを得たり)」，意味は同じ。王安石「次韻答陳正叔（陳正叔に答うるに次韻す）二首」其二（『全宋詩』巻562)「何当水石他年住，更把韋編静処開（何んぞ当に水石に他年住むべし，更に韋編を把りて静かなる処にて開かん)」，どうして将来読書をするに適した水石のあるところに住むことがあろうかという。陳師道「次韻夏日江村（夏日の江村に次韻す)」(『全宋詩』巻1117)「何当加我歳，従子問乾坤（何んぞ当に我が歳を加えて，子に従いて乾坤を問うべけん)」，どうして私に数歳を添えられようかという意味。『汲古閣景鈔南宋六十家集』，施枢[371]「正月十四夜」(『芸隠勘游稾』)「自笑蓬窓勤苦士，何当太乙為燃藜[372]（自ら笑う　蓬窓勤苦の士，何んぞ当に太乙が燃藜と為らん)」，どうして太乙が藜を燃やしてくれて私が読書をするのを照らしてくれようかという意味。

④何ぞ況んや～をや。王昌齢[373]「江上聞笛（江上に笛を聞く)」(『全唐詩』巻141)「不知誰家子，復奏邯鄲音。水客皆擁棹，空霜隧盈襟。羸馬望北走，遷人悲越吟。何当辺草白，旌節隴城陰（知らず　誰が家の子ぞ，復た邯鄲の音を奏す。水客皆　棹を擁して，空霜　遂に襟に盈つ。羸馬は北走を望み，遷人は越吟を悲しむ。何ぞ当んや辺草の白きに，旌節　隴城の陰なるをや)」，大意は，軍馬や兵士たちでさえみな音を聞いて感動し，辺境の将軍はなおさらであるということ。蘇軾「無題」(『全宋詩』巻831)「年光与時景，頃刻互衰変。何当血肉身，安得常強健（年光と時景と，頃刻にして　互いに衰変。何ぞ当んや血肉の身をや，安んぞ常に強健を得ん)」，時代の流れは迅速に移り変わるのに，私の血肉の身はなおさらであるという。

⑤～べきである。「何」と「合」は音が近いため，「何当」を「合当」とみなす。杜甫「画鷹（鷹を画く)」(『全唐詩』巻224)「絛鏇光堪擿，軒楹勢可呼。何当撃凡鳥，毛血灑平蕪（絛鏇　光りて擿むに堪え，軒楹　勢い呼ぶべし。何当に凡鳥を撃ち，毛血　平蕪に灑ぐべし)」，この「何当」の字は上二句の「堪」字と「可」字とを密接に承けて互いに関係しあい，他の小鳥を襲うべきであるという意味。また「徐九少尹見過（徐九少尹が過らる)」(『全唐詩』巻226)「賞静憐雲竹，忘帰歩月台。何当看花蕊，欲発照江梅（静なるを賞でて雲竹を憐れみ，帰るを忘れて月台に歩む。何当に看るべし花蕊の，発かんと欲して江を照らす梅を)」，下二句は倒置させて，江辺の梅が開こうとしているので，梅の花を見るべきであるという意味。蘇軾「柳氏二外甥求筆迹（柳氏が二外甥　筆迹を求む）二首」其二（『全宋詩』巻794)「一紙行書両絶詩，遂良鬚鬢已如糸。何当火急

伝家法，欲見誠懸筆諫時（一紙の行書　両絶の詩，遂良の鬚鬢　巳に糸の如し。何当に火急に伝うべし　家法，見んと欲す　誠懸が筆諫の時を）」，下二句も倒置し，上述の杜甫詩の形式だけを換えているようにみえる。柳氏の甥が先祖より伝わる筆跡を見て，早急に伝授すべきであるという意味。「遂良」の句は既に老いてしまったことをいい，「火急」の二字を伏線とする。釈修睦「宿岳陽開元寺（岳陽の開元寺に宿る）」（『全唐詩』巻849）「竟夕憑虚檻，何当興歎頻。往来人自老，今古月長新（竟夕　虚檻に憑り，何当に興歎　頻りなるべし。往来の人　自ら老い，今古の月　長えに新たなり）」，嘆かなければならないという意味。月は絶えず新しくなるが人は自然と老いていくことが「興歎」の説明であり，詩は『全唐詩』に見える。王安石「送潘景純（潘景純を送る）」（『全宋詩』巻558）「明時正欲精蒐選，栄路何当力薦延（明時は正に蒐選を精しくせんと欲し，栄路は何当に力めて薦延すべし）」，招き入れるべきであるとのこと。上の句の「正欲」と相当する。柳永「木蘭花」（『全宋詞』）「鸞吟鳳嘯清相続，管烈絃焦争可逐。何当夜召入連昌，飛上九天歌一曲（鸞吟鳳嘯清くして相い続き，管烈絃焦　争でか逐うべし。何当に夜召して連昌に入るべし，飛び上る　九天の歌一曲）」，念奴を夜に連昌宮に召して歌一曲を歌わせるべきという。念奴を夜に召しだしたことは元稹の「連昌宮詞」（『全唐詩』巻419）に見える。無名氏『雁門関存孝打虎』（『全元曲』）第一折「決勝千里弁輸贏，単注着黄巣今日何当敗（今こそ決着をつけて，黄巣に敗北をつけてやる）」，結果として黄巣の負けが決定していることをいう。無名氏『十探子大鬧延安府』第四折（『全元曲』）「你不遵号令，私離辺庭。我問你波。則你那七禁令何当是你掌。則你那三軍印寄付与誰行（お前は命令に従わないし，俺は戦地を離れる。ちょっと聞くが，七禁令はお前が掌握すべきではないのか？全軍の指揮は他に誰がするのか？）」，禁令はお前が決めることなので，責任をとらねばならないという意味。七禁令とは以下の台詞に「一に軽薄，二に怠る，三に盗む，四に欺す，五に裏切る，六に混乱させる，七に間違う」とある。（有木）

34. 何事 héshì

なぜ，疑問詞，語気を含む詞。「何事に縁らん」の略。李商隠「宋玉」（『全唐詩』巻540）「何事荊台百万家，惟教宋玉擅才華（何事ぞ荊台の百万の家，惟だ宋玉をして才華を擅にせしめん）」，荊台の百万の家はなぜ宋玉だけを推すのかという意味。劉長卿「長門怨」（『全唐詩』巻148）「何事長門閉，珠簾只自垂（何事ぞ長門を閉め，珠簾只だ自ら垂れん）」，宮門が深く閉ざされ，一日中簾が下りていることを嘆いた言葉。胡曽[374]「漢宮」（『全唐詩』巻647）「何事将軍封万戸，却令紅粉為和戎（何事ぞ将軍　万戸を封ぜられるも，却って紅粉をして為めに戎に和せしむ）」，万戸候に封じられた将軍が，力で敵を制圧できるのに，どうして女性を遣わせて和睦を結ぶのかという意味。感嘆の語には詠史詩特有の語気がある。王禹称[375]「春居雑興四首」其一（『全宋詩』巻64）「両株桃杏映籬斜，粧点商州副使家。何事春風容不得，和鶯吹折数枝花（両株の桃杏籬に映じて斜なり，粧点す商州の副使の家。何事ぞ春風　容れ得ず，鶯に和して数枝の花を吹き折る）」，景物が吹き飛ばされることに嘆いた言葉である。『玉泉子』に杜羔がしばしば科挙に落ちたときに，妻劉氏の「贈夫（夫に贈る）」詩に「良人的的有奇才，何事年年被放廻（良人　的的として奇才有るも，何事ぞ年年　放廻せられん）」。汪藻[376]「桃源行[377]」「何事区区漢天子，種桃辛苦望長年（何事ぞ区区[378]たる漢天子，桃を種え辛苦なりて長年を望まん）」。敦煌曲「十二時」「減工夫，擲世務，勤聴弥陀親法宇。看看四大逼来時，何事安然不受惧（工夫を減じ，世務を擲ち，勤めて弥陀を聴きて法宇[379]に親しむ。看す看す四大[380]の逼り来たりし時，何事ぞ安然として惧れを受けざらん）」。（有木）

35. 何太 hétài

副詞。何ぞ其れ，なんと。杜甫「寄張十二山人彪三十韻（張十二山人彪に寄す　三十韻）」（『全唐詩』巻225）「草書何太苦，詩興不無神（草書　何ぞ太れ苦なる，詩興　神無くんばあらず）」，また「独酌成詩（独酌して詩を成す）」（『全唐詩』巻225）「灯花何太喜，緑酒正相親（灯花　何ぞ太れ喜べる，緑酒　正に相い親しむ）」，また「王閬州筵奉酬十一舅惜別之作（王閬州が筵にて十一舅が惜別の作に奉酬す）」（『全唐詩』巻228）「良会不復久，此生何太労（良会　復た久しからず，此の生　何ぞ太れ労せる）」，また「寄彭州高三十五使君適虢州岑二十七長史参三十韻（彭州の高三十五使君適，虢州の岑二十七長史参に寄す　三十韻）」（『全

唐詩』巻225)「何太龍鍾極，於今出処妨（何ぞ太れ龍鍾極まる，今に於いて出処　妨げらる)」，また「後苦寒行二首」其二（『全唐詩』巻234)「天兵斬断青海戎，殺気南行動地軸。不爾苦寒何太酷（天兵　斬断す青海の戎，殺気　南行し地軸を動かす。爾らずんば苦寒　何ぞ太れ酷なる)」，「何太」はあるいは「何其」に作る。李白[381]「鞠歌行」(『全唐詩』巻163)「楚国青蠅何太多，連城白璧遭讒毀（楚国の青蠅　何ぞ太れ多き，連城の白璧　讒毀に遭う)」，また「九月十日即事」(『全唐詩』巻179)「菊花何太苦，遭此両重陽（菊花　何ぞ太れ苦なる，此の両重陽[382]に遭う)」，宮女の韓氏「題紅葉（紅葉に題す)」(『全唐詩』巻797)「流水何太急，深宮尽日閑（流水　何ぞ太れ急なる，深宮　尽日閑なり)」。(有木)

36. 後hòu

「呵」もしくは「啊」と同じ。王周「問春（春を問う)」(『全唐詩』巻765)「把酒問春因底意，為誰来後為誰帰（酒を把りて春を問えば底意に因らん，誰が為に来たらん後，誰が為に帰らん)」，「後」字は語気を含んで終わるように用いられ，なぜ来て，なぜ帰るのかという意味。王周は五代の人で『全唐詩』に見える。欧陽脩「酔蓬莱（蓬莱に酔う)」(『全宋詞』)「更問假如，事還成後，乱了雲鬟，被娘猜破（更に問う　假如い，事還た成らん後，雲鬟を乱し了え，娘に猜破せらる)」，この詞は『酔翁琴趣外篇』に見える。黄庭堅「好女児」(『全宋詞』)「假饒来後，教人見了，却去何妨（假饒い来たらん後，人をして見え了えしむ，却って去りて何ぞ妨げん)」。辛棄疾「最高楼」(『全宋詞』)「是夢他松後追軒冕，是化為鶴後去山林（是れ他の松を夢みん後　軒冕を追い，是れ化して鶴と為らん後　山林に去る)」。史浩「新荷葉」(『全宋詞』)「秋来釀酒，便無後也解賒沽（秋来たりて酒を釀し，便ち無からん後　也た賒沽を解く)」。陸游「一叢花」(『全宋詞』)「従来不慣傷春淚，為伊後滴満羅衣（従来　春淚を傷むに慣れず，伊の為めに後　滴りて羅衣に満つ)」。趙長卿「賀新郎」(『全宋詞』)「為你後甘心憔悴，終待説山盟海誓。這恩情，到此非容易（你の為に後　甘心して憔悴す，終に説くを待ちて　山に盟して海に誓う。這の恩情　此に到りて容易に非ず)」。『絶妙好詞箋[383]』巻四，譚宣子[384]「江城子・咏柳（柳を咏む)」「弁得重来攀折後，煙雨暗，不辞遥（弁じ得たり　重ねて来りて攀折する後，煙雨暗く，遥かに辞せず)」，『元草堂詩余』に杜善夫「太常引」「不是不思量，説著後教人話長（是れ思量せざるにあらず，説き著く後　人をして話さしむること長し)」。『董解元西廂記』巻一「説謊後，小人図甚麼（嘘をついたとして，何の役に立ちましょう)」，また「若不与後，而今没這本話説（ここでもし貸さなかったら，今語るこの物語も成り立たないところです)」，これは張生が廂を借りた時の登場人物の口ぶりで，もし西廂を張生に貸し与えなけば，根本から取り消され，この『西廂記』そのものさえ無くなってしまうという意味。また「得後，是自家采。不得後，是自家命（うまくいけば幸いだが，うまくいかなくてもそれも運命)」，また巻二「不来後，是衆僧大家采。来後，怎当待（やってこなければ我ら僧侶にとって幸いだが，来てしまったらどうして持ちこたえられよう)」，これは孫飛虎が謀反を起こした時の言葉。幸運の意味にとる。また巻三「要酒後，厨前自汲新泉。要楽，当筵自理冰弦。要絹，有壁画両三幅。要詩，却奉得百来篇（酒が必要ならば，厨の前で湧き出す泉の水を汲みましょう。音楽が必要ならば，宴席で氷の弦を調べましょう。絹が必要ならば，壁に掛けた二三幅の絵があります。詩が必要ならば，百篇ばかり進呈しましょう)」，また巻四「是人後，疾忙快分説。是鬼後，応速滅（人ならば，早くことの次第を言え。幽霊ならば，速やかに消え失せよ)」。王実甫『西廂記』第四本第四折を按ずるに，この第四折の語は『董解元西廂記』の原文を承けて，二つの「後」字はみな「呵」字に作っており，「後」が「呵」である確かな証拠である。『劉知遠諸宮詞』巻十一「有印後，為安撫。無印後，怎結束（兆しがあれば安心だが，兆しが無ければどうやってけりをつけよう)」。三十種本『遇上皇』「有酒後，聚得親房。有酒後，会得賢良。豈不聞古語常言，酒解愁腸。有酒後，寛洪海量。没酒後，腹熱腸荒（酒があれば親族は集い，酒があれば賢者も出逢う。古のことわざに酒は愁いを解くという。酒があれば心が広くなるが，酒がなければ腹は熱くなり腸もねじれる)」。関漢卿『閨怨佳人拝月亭』(『全元曲』) 第四折「則兀那瑞蓮便是証見。怕你不信後，没人処，問一遍（あの瑞蓮こそが証拠であり，信じなければ尋ねる人もいない)」，「怕你不信後」とはもしあなたが信じないならば，という意味。馬致遠『西華山陳摶高臥』(『全元曲』) 第一折「你休道俺不著情，不応後，我敢罰銀十錠（私の占いが当たらないとは言わないでくれ。当たらなければ罰銀十錠を支払いましょう)」，これは占いをする時の言葉で，占いが当たらなければ銀十錠を与えようということ。また第二折「若做官後，毎日価行眠立盹。休休休，枉笑殺淩煙閣上人（もし役人になったら毎日行っては

眠るし，立ってはうとうとする。淩煙閣にいらっしゃるお方よ，笑われないでくれ）」。『朱太守風雪漁樵記』（『全元曲』）第一折「醉了後，還只待笑吟吟酒美沽（酔ったら，にっこりと笑って美酒を飲もう）」。『朝野新声太平楽府』巻六，曽瑞卿「瑞正好」自序「失時也亡家国。得意後覇了山河（時を失するや家国を亡ぼす。意を得て後　山河を覇し了わる）」，これは「也」字と対で，同じく語気詞として用いられる。馬致遠『江州司馬青衫淚』（『全元曲』）第四折「故人見後，潯陽怕甚水地湫凹。今日箇君王召也長安，避甚道路兜搭（旧友に会えるなら，潯陽が水位より低いことを恐れようか。本日，王に長安に召されるなら，道の険しさをどうして避けられよう）」，同じ意味の例。鄭延玉『宋上皇禦断金鳳釵』（『全元曲』）第三折「時来呵鉄也争光，運去後黄金失色（時機が来れば鉄も光輝き，運が去れば黄金も色を失うだろう）」，これは「呵」字と対で，「後」は「呵」である。紀君祥[385]『冤報冤趙氏孤児』（『全元曲』）第三折「我七旬死後偏何老，這孩児一歳死後偏知小（私が七十歳で死ぬのはあまりに年を取り過ぎ。この子が一歳で死ぬのはあまりに若い）」。『楽府新編陽春白雪』後集巻一，呂止軒の小令「醉扶帰」「瘦後因他瘦，愁後為他愁（瘦せて後　他に因りて瘦せんや，愁いて後　他が為に愁えんや）」，以上述べた「後」字は，すべてみな「呵」もしくは「啊」である。

・［后］hòu　①「後」と同じ。「後」字もまた「后」字に作る。『梨園按試楽府新声』巻下，馬致遠の小令「四塊玉」「二頃田，一具牛，飽后休（二頃の田，一具の牛，飽きて后　休む）」，また「幾葉綿，一片綢，暖后休（幾葉の綿，一片の綢，暖まりて后　休む）」，すなわち，飽きたから休み，暖かいから休むという。

②「后」字は放置できる動詞や形容詞で，或いは時間詞の後に付いて，時間の名詞的な品詞を構成し，「～后」は「～の時」と解釈できる。李白「雨後望月（雨後　月を望む）」（『全唐詩』巻185）「出時山眼白，高后海心明（出づる時　山眼白く，高くなりし后　海心明らかなり）」。杜甫「寄賀蘭銛（賀蘭銛に寄す）」（『全唐詩』巻226）「朝野歓娯后，乾坤震蕩中（朝野　歓娯の后，乾坤　震蕩の中）」，趙次公注[386]に「朝野歓娯，指安禄山未反前也（「朝野歓娯」とは，安禄山が未だ反乱を起こす前を指す）」とある。李商隠「鏡檻」（『全唐詩』巻540）「散時簾隔露，臥后幕生波（散じし時　簾　露を隔ち，臥せし后　幕　波を生ず）」。李商隠「題小松（小松に題す）」（『全唐詩』巻541）「桃李盛時雖寂寞，雲霜多后始青葱（桃李　盛んなりし時　寂寞と雖も，雲霜多かりし后　始めて青葱なり）」。戎昱[387]「塞下曲六首」其六（『全唐詩』巻270）「夜后戍楼月，秋来辺将心（夜となりし后　戍楼の月，秋来たる）」。（有木）

おわりに

以上，36の用例を訳出してきた。例えば「慚愧」について，「慚」「慙」の語は六朝頃の文献に見られるが，例えば「慙媿」の語において，感謝するとの意味が先秦まで遡る可能性があるとは，言語学的に見ても興味深い。「得」のように①「豈」と同じ用法，②語気助詞，③～させる（使役）といった複数の意味を持つ語彙については，個々の用例に即してよく見極める必要がある。また「隔是」「更」「故」「管」などの虚詞の用法は，一語でかえって句全体の意味を決定づけるのでよく注意しなければならない。特に詩の場合，作者の感慨や一詩全体のニュアンスがひとつの虚詞の解釈によって変わってしまうからである。

全用例を通して窺えることは，対句と互文に異読語彙の用例が多く見出されることと，唐詩から宋の詩詞さらに元曲へと語義が継承されていく過程である。今後もこの訳出検討作業を進めて，異読語彙の全体像を把握する過程で，個別の詩人における特徴や時代や地方に共通する傾向を見出すことを課題としたい。しかし用例が膨大なため，誤読の可能性もある。ご示教を仰ぐ次第である。

付記

本稿は平成28～31年度文部科学省助成金科学研究費基盤研究C「唐詩における異読の包括的研究」（研究代表者 東京学芸大学佐藤正光）における研究成果のひとつである。

注

1　杜甫（712-770），字は子美，原籍は河南省鞏県，襄陽（河南省洛陽市南）のひと。
2　『全唐詩』（中華書局，1960年）。以下，唐詩の引用にはすべて本書を用いた。
3　「寄狄明府博済（狄明府博済に寄す）」につくる。
4　韋応物（736?-791?），京兆（陝西省西安市）のひと。
5　張籍（766?-830?），字は文昌，呉郡（蘇州）のひと。
6　生前の約束。
7　林滋（生卒年不詳），唐のひと，字は後象，閩のひと。
8　「馳」一作「弛」。
9　『後漢書』（中華書局，1973年）。
10　元稹（779-831），字は微之，河南洛陽（河南省洛陽市）のひと。
11　常人の耳。普通の人のこと。
12　白居易「武関南見元九題山石榴花見寄」（『全唐詩』巻438』）詩。
13　李中（生卒年不詳），五代・南唐のひと，字は有中，江西九江のひと。
14　参禅の僧のこと。
15　王績（約589—644），字は無功，号は東皋子，龍門のひと。
16　銀台門，つまり翰林院のこと。
17　徐凝（生卒年不詳），唐のひと，浙江睦州のひと。
18　車前草の種。せき止めの薬として用いられる。
19　斉己（863-937），俗名は胡徳生，晩年に衡岳沙門と号す，湖南長沙のひと。
20　『全唐詩』は「蒼茫平野外，漸認遠峰名」につくる。
21　韓偓（844-923），字は致堯・致光・致元，京兆万年県（陝西省西安市）のひと。
22　厚い交情のこと。
23　劉克荘（1187-1269），字は潜夫，莆田（福建省）のひと。
24　北京大学古文献研究所編『全宋詩』（北京大学出版社，1991年）。以下同じ。
25　蘇軾（1036-1101），字は子瞻，号は東坡，眉州眉山（四川省眉山県）のひと。
26　唐圭璋編『全宋詞』（中華書局，1965年）。以下同じ。
27　大麦と小麦。
28　黄庭堅（1045-1105），字は魯直，洪州分寧（江西省修水県）のひと。
29　凌景埏校注『董解元西廂記』（人民文学出版社，1962年）。
30　徐征他編『全元曲』（河北教育出版社，1998年）。
31　元・王実甫，王季思校注『集評校注西廂記』（上海古籍出版社，1987年）。
32　晋・干宝，張蘇他編『全本搜神記評釈』（学林出版社，1994年）。
33　皮日休（841?-883?），字は逸少また襲美，襄陽（湖北省襄樊市）のひと。
34　陸亀蒙（?-881），字は魯望，呉郡（蘇州市）のひと。
35　李群玉（生卒年不詳），唐のひと，澧州のひと。
36　茶のこと。
37　江淹（444-505），字は文通，宋州済陽考城（河南省商丘市）のひと。
38　『文選』（上海古籍出版社，1986年）。以下同じ。
39　春秋・左丘明『国語』（新世紀万有文庫，遼寧教育出版社，1997年）。
40　周・管仲『管子』（四部叢刊初編，上海書店，1989年）。
41　符定一『聯綿詞典』（中華書局，1983年）。
42　崔顥（?-754），汴州（河南省開封市）のひと。
43　趙嘏（生卒年不詳），唐のひと，字は承祐，山陽（江蘇省淮安）のひと。
44　『全唐詩』は「含風」に作る。

45 邵雍（1011-1077），字は堯夫，范陽（河北省涿州）のひと。
46 王安石（1021-1086），字は介甫，撫州臨川（江西省臨川市）のひと。
47 程顥（1032-1085年），字は伯淳，明道先生と称された，河南洛陽（河南省洛陽市）のひと。
48 朱熹（1130-1200），字は元晦，仲晦，号は紫陽，晦庵など，婺源（江西省）のひと。
49 呉融（生卒年不詳），唐のひと，字は子華，越州山陰（浙江省紹興市）のひと。
50 宋・陳起輯，清・鮑廷博輯『汲古閣景鈔南宋六十家集』（1921年）。
51 周文璞（生卒年不詳），宋のひと，字は普仙，号は方泉，陽穀（山東省）のひと。
52 孟姜女の祠（河北省秦皇島市）のことか。秦の始皇帝時代，孟姜女の夫が万里の長城を築くのに徴用されて死ぬと，孟姜女は激しく泣いて長城の壁が崩れたという民間説話がある。
53 功と罪，衰えることと栄えることなどが差し引きゼロになること。
54 周弼（1194-1255），字は伯弼，汝陽（河南省汝南県）のひと。
55 水路。堤防から放水する穴。
56 一度捕まえられた生き物が放たれること。
57 鄭清之（1176-1251），字は徳源，文淑，別号は安晩。慶元道鄞県（浙江省寧波市）のひと。
58 唐代の禅師・龍牙居遁は，どのように悟りの境地に到るかと問われたところ，ちょうど賊が空き部屋に入るようなもので，宝物があると期待すると何もないように味気ないものだと答えたという（江戸・漕洞宗僧玄楼奥龍『鉄笛倒吹』第二十八則）。
59 晏殊（991-1055），字は同叔，撫州臨川（江西省撫州）のひと。
60 『全宋詞』は「語」につくる。
61 袁去華（生卒年不詳），字は宣卿，江西奉新（江西省宜春市）のひと。
62 思いがけなく急に来ること。
63 詩や手紙を書く彩りした紙。
64 王沂孫（生卒年不詳），宋のひと，字は聖与，号は碧山，会稽（浙江省紹興市）のひと。
65 春秋のとき，呉王闔閭が姑蘇山の上に台を作り，息子の夫差は美人の西施と遊んだ。
66 西施のこと。越王勾践は呉王夫差に復讐するため，西施を差し向けた（『呉越春秋』勾践陰謀外伝）。
67 証拠。
68 美しい景色を観賞する。花を見に行く。
69 蜂蜜，また桜桃のこと。
70 王建（?-830?），字は仲初，潁川（河南省許昌涿州）のひと。
71 盧仝（?-835），字は不明，号は玉川子。范陽（河北省）のひと。
72 羅隠（833-909），本名は横，字は昭諫，新城（浙江省富陽）のひと。
73 徐福，字は君房，瑯琊の方士。始皇帝の命令で不老不死の薬を求めに行った後「男女三千人と百工を献上すれば海神が薬を渡すと約束した」と偽り，手に入れると遠方で王となったまま帰らなかった（『史記』淮南衡山列伝）。
74 文同（1018-1079），字は与可，四川梓州永泰（四川省）のひと。
75 昇級すること。
76 蕭育，字は次君，漢の蕭望之の子。性格が激しかったのでしばしば罷免されて昇進することは少なかった（『漢書』巻78）。
77 葛起耕（生卒年不詳），宋のひと，字は君顧，丹陽（江蘇省鎮江市）のひと。
78 かなわない，及ばない。
79 柳永（約987-約1053），字は耆卿，崇安（福建省武夷山）のひと。
80 『全宋詞』にはこの二字が見えない。
81 説明する，釈明する。
82 楊朝英（生卒年不詳），元のひと，字は英甫，青城（山東省高青県）のひと。
83 楊朝英『楽府新編陽春白雪』（『続修四庫全書』第1739冊所収）。
84 王観（1035-1100），字は通叟，如皋（江蘇省如皋市）のひと。
85 杜安世（生卒年不詳），宋のひと，字は寿域（一に名を寿に作り，字は安世ともいう），京兆（陝西省西安市）のひと。
86 武進董氏誦芬室，用元刊本景印本（図用浚濛初本）『新刊巾箱蔡伯喈琵琶記』。
87 『全唐詩』は「回軒」につくる。

88　氷のこと。
89　空のこと。『詩経』秦風・黄鳥に「彼の蒼たる者は天」とある。
90　陳師道（1053-1101），字は履常または無己，号は後山居士，彭城（江蘇省徐州市）のひと。
91　老後の日々を過ごすこと。
92　『史記』巻49李将軍列伝に，李広は匈奴と戦うことを願ったが，武帝は衛青に「李広は年老いており運も悪い」ので戦わせないよう忠告したとの記事がみえる。
93　楊万里（1125-1209），字は務観，号は放翁，越州山陰（浙江省紹興市）のひと。
94　『全宋詩』は「欠」につくる。
95　葬地のこと。
96　困窮することと栄達すること。
97　友情を結ぶこと。
98　太学のこと。
99　許棐（?-1249），字は忱夫，海塩（浙江省）のひと。
100　春と秋にある鎮守の祭りの日。
101　呉潜（1195-1262），字は毅夫，号は履斎，宣州寧国（安徽省）のひと。
102　呉文英（生卒年不詳）のこと。字は君特，号は夢窓または覚翁。四明（浙江省寧波市）の人。
103　小さな杯のこと。
104　『全唐詩』は「絶句漫興九首」につくる。
105　深く会得すること。
106　賢才の意味。ある王が千里の馬を探し求めて，死んだ名馬の骨すらも買い取ったところ，すぐに名馬が集まってきたとの故事による（『戦国策』燕策一）。
107　陳与義（1091-1139），字は去非，号は簡斉，洛陽（河南省洛陽市）のひと。
108　楊倫編輯『杜詩鏡銓 附諸家論杜・杜文註解』（藝文印書館，1971年）。
109　清・仇兆鰲注『杜詩詳注』（中華書局，1979年）。
110　韓愈（768-824），字は退之，諡は文公，鄧州南陽（河南省孟州市）のひと。
111　白居易（772-846），字は楽天，香山居士，酔吟先生と号した。下邽（陝西省渭南県）のひと。
112　陳標（生卒年不詳），唐のひと。
113　『全唐詩』は「蜀葵」につくる。
114　『全宋詩』は「音声」につくる。武夷山にある響声岩のことか。
115　このようにの意味。
116　魚の飛び跳ねる音。
117　『全宋詩』は「連繙」につくる。
118　『全宋詩』は「双明」につくる。
119　連続しての意味。
120　張鎡の号。
121　范成大（1126-1193），字は致能，号は石湖居士。呉都（江蘇省蘇州）のひと。
122　杖藜（アカザを杖つきて）と同じ意味か。
123　上から下を見下ろすこと。
124　任二北校『敦煌曲校録』（上海文藝聯合出版社，1955年）。
125　酒樽のこと。
126　酒樽が散らばっていること。
127　重なって幾重にも。
128　銭塘江中の険石。ここを通る際，高波と強風が起こり，船は危険にさらされたという（王象之『輿地紀勝』）。
129　春秋・楚の伍子胥のこと。伍子胥は忠告を疎んだ夫差に死を命じられた際，怨みの言葉を述べたため，夫差は死体を皮袋に入れて銭塘江に捨てた（『史記』巻6伍子胥列伝）。
130　貫休（832-912），字は徳隠，婺州蘭渓（浙江省）のひと。

131 『全唐詩』巻835「陳情献蜀皇帝」詩のことか。
132 賀鑄（1052-1125），字は方回，慶湖遺老と号した。衛州汲（河南省）のひと。
133 史浩（1106-1194），字は直翁，号は真隠居士・鄮峰真隠。明州鄞県（浙江省鄞州区）のひと。
134 丘密（1135-1208），字は宗卿，江陽（江蘇省）のひと。
135 張綱（1083-1166），字は彦正，号は華陽老人，潤州丹陽（江蘇省鎮江市）のひと。
136 辛棄疾（1140-1207），宋のひと，字は幼安，号は稼軒，歴城（山東省済南市）のひと。
137 風の神。
138 用北京図書館蔵金刊本景印『劉知遠諸宮調残五巻』（文物出版社，1958年）。
139 四部叢刊続編『雍熙楽府』（上海書店，1985年）。
140 『全唐詩』は「回」につくる。
141 清・劉淇『助字辨略』（中華書局，1954年）。
142 張謂（711?-?），字は正言，河内（河南省沁陽市）のひと。
143 随意に。
144 詩歌や著作。
145 劉禹錫（772-842），字は夢得，中山（河北省定州市）のひと，一説には彭城（江蘇省徐州市）のひと。
146 随意に。
147 請われずとも自ら筵席につくこと。
148 章碣（836-905），字は麗山，桐廬のひと。
149 多くの花が色とりどりに咲き乱れて華やかな様子。
150 毛熙震（生卒年不詳），唐～五代・蜀のひと。
151 『全唐五代詞』（中華書局　2015年）。
152 欧陽脩（1007-1072），字は永叔，謚は文忠，吉州廬陵（江西省吉安市）のひと。
153 『全宋詞』は「鴛鴦双字」につくる。
154 暇，時間のこと。
155 王千秋（生卒年不詳），宋のひと。字は錫老，東平（山東省）のひと。
156 ニガナ。晩春から初夏にかけて咲く。
157 邵亨貞（1309-1401），字は復孺，元末，雲間（上海松江県）のひと。『蟻術詩選』。
158 唐圭璋編『全金元詞』（中華書局，1979年）。
159 燕の鳴く声。
160 劉弇（1048-1102），字は偉明，号は雲龍，安福（江西省）のひと。
161 周邦彦（1056-1121），字は美成，号は清真居士，杭州銭塘（浙江省杭州市）のひと。
162 『全宋詞』は「鯚領」につくる。
163 『全宋詞』は「衛玠」につくる。
164 北周の庾信の幼名。
165 衛玠，晋のひと，字は叔宝。楽広の娘をめとった。玄学に秀いで美男で有名だったが，病弱で夭逝した（『晋書』巻36）。
166 内心。
167 後漢の馬融を指す。
168 馬融が平陽にいたとき，洛陽の人が笛を演奏するのを聞いて京を懐しみ「長笛賦」『文選』巻18を著した。
169 岳飛（1103-1142），字は鵬挙，相州湯陰県（河南省湯陰）のひと。
170 化粧を落とすこと。
171 沈端節，字は約之。呉興のひと。
172 『全宋詞』は「他時恨□，悵却月凌風」につくる。
173 音信のこと。
174 皇甫曙の字。
175 酒樽。
176 『全唐詩』は「拂衣行」につくる。

177 『抱朴子』内篇のこと。
178 孟浩然（689-740），名は浩，浩然は字，号は鹿門処士，襄陽（湖北省襄陽市）のひと。
179 李華（715-766），字は遐叔，趙郡賛皇（河北省賛皇）のひと。
180 耿湋，763年頃在世，字は洪源，河東（山西省）のひと。
181 盧綸（739-799），字は允言，河中府蒲県（山西省臨汾市蒲県）のひと。
182 李端（737-784），字は正己，趙州（河北省趙県）のひと。
183 李賀（791-817），字は長吉，昌谷（河南省）のひと。
184 『全唐詩』は「臨」につくる。
185 陶淵明（365-427），字は元亮，また名は潛，字は淵明ともいわれる。潯陽柴桑（現江西省九江市）のひと。
186 逯欽立輯校『先秦漢魏晋南北朝詩』（中華書局，1983年）。
187 鮑照（414?-466），字は明遠，上党郡（山西省長治市）のひと。
188 沈炯（生卒年不詳），梁～陳のひと，字は礼明または初明。呉興郡武康（浙江省徳清県）のひと。
189 宋・王溥『唐会要』（上海古籍出版社，1991年）。
190 県の役人。
191 蔣礼鴻主編『敦煌文献語言詞典』（杭州大学出版社，1994年）。
192 江藍生・曹広順編『唐五代語言詞典』（上海教育出版社，1997年）。
193 賈誼（前200-前168），洛陽（河南省洛陽市）のひと。
194 『全唐詩』は「繡婦嘆」につくる。
195 『全唐詩』は「酬」につくる。
196 武元衡（758-815），字は伯蒼，河南緱氏（河南省偃師南）のひと。
197 銭南揚校注『永楽大典戯文三種校注』（中華書局，2009年）。
198 楊衡（生卒年不詳），唐のひと，字は中師，郫県（四川省郫県）のひと。
199 岑参（715?-770），字は不明，南陽（河南省南陽市）のひと。
200 棺に先行する旗。
201 杜牧（801-852），字は牧之，京兆（陝西省西安市）のひと。
202 『全唐詩』は「義鶻」につくる。
203 方干（809-888），字は雄飛，号は玄英，睦州青渓（浙江省淳安県）のひと。
204 舒亶（1041-1103），字は信道，慈溪（浙江省余姚大隠）のひと。
205 趙長卿（生卒年不詳），号は仙源居士，南豊（江西省撫州市南豊県）のひと。
206 『全唐詩』は「人」と「架」の間に「多在山坡」の語がある。
207 『全唐詩』は褚載の詩につくる。
208 『全唐詩』は「鵠」につくる。来鵬は来鵠とも言われる。
209 杜荀鶴（846-904），字は彦之，池州石埭（安徽省石台県）のひと。
210 大きな利益を得るために小さな損失を厭わないこと（『孟子』滕文公章句）。
211 薛濤（768-831），字は洪度または宏度，長安（陝西省西安市）のひと。
212 情緒。
213 旧暦の五月七日。この日の天候で一年の運勢を占う。
214 宋・普済『五灯会元』（広文書局，1971年）。
215 原典未詳。「試著那司天台打算半年愁，端的是太平車約有十余載」につくる。
216 鄭光祖（生卒年不詳），字は徳輝，平陽襄陵（山西省襄汾県）のひと。
217 原書は巻3につくる。
218 李行甫，名は潛夫，一に行甫につくる，絳州（山西省新絳県）のひと。
219 白樸（1226-1306），字は仁甫，隩州（山西省河曲県）のひと。
220 桀王に仕えた龍逄と紂王に仕えた比干は，暴君を諫めて処刑された忠臣。
221 まちがいのこと。
222 『孤本元明雑劇』第3冊所収。

223 李覯（1009-1059），字は泰伯，建昌軍南城（江西省）のひと。
224 『全宋詩』は「堦基」につくる。「階基」とは建物の入口の階段のこと。
225 『孤本元明雑劇』第4冊所収。
226 関漢卿（1219-1301），大都（北京）のひと。
227 曹組（生卒年不詳），字は元寵，穎昌（河南省許昌）のひと。
228 コオロギのこと。
229 喬吉（1280?-1345），一に喬吉甫につくる，字は夢符，太原（北京）のひと。
230 賈仲名（1343-1422），一に賈仲明につくる，淄州淄川（山東省淄博）のひと。
231 劉時中（生卒年不詳），名は致，時中は字，号は逋齋。石州寧郷（山西省離石）のひと。
232 旅の天気のこと。
233 張国賓（生卒年不詳）。
234 羅虬（生卒年不詳），台州（浙江省）の人。
235 蕭徳祥，生卒年不詳，名は天瑞，徳祥は字。
236 『元曲選』は「敢是你前夫人寄書来麼」につくる。
237 『続修四庫全書』第1760冊。
238 高文秀（生卒年不詳），東平路（山東省東平県）のひと。
239 孔文卿（生卒年不詳），平陽（浙江省）のひと。
240 『古今雑劇三十種』は「竹即」につくる。
241 孟漢卿（生卒年不詳），安徽省亳州のひと。
242 石君宝（1190-1276），名は徳玉，君宝は字，あるいは石君実とも，平陽（山西省臨汾）のひと。
243 『元曲選』は「他不是閑遊的浪子，多敢是一個取応的名儒」につくる。
244 朱凱（生卒年不詳）。
245 文学古籍刊行社，1955年。
246 『霊鶼閣叢書』第三集所収。
247 『宋詩紀事』は「女郎曹希蘊」につくる。
248 北京文學古籍刊行社，1955年。
249 短いロウソクのこと。
250 程垓，字は正伯，号は書舟，眉州眉山（四川省）のひと。
251 晁端礼（1046-1113），字は次膺，開徳府清豊県（河南省）のひと。
252 落ち着くこと。
253 『欽定四庫全書』第1490冊。
254 四庫全書本は巻6。
255 一瞬のこと。
256 『続修四庫全書』第1760冊『古今雑劇三十種』。
257 原本は第24齣につくる。
258 『続修四庫全書』第1768冊『永楽大典戯文三種』。
259 民国年間，青蓮書屋刊本景印。
260 王維（699-759），字は摩詰。河東（山西省永済市）のひと。
261 夏至のこと。
262 うす曇りのこと。
263 朱淑真（1135?-1180?），号は幽棲居士。銭塘（浙江省杭州）のひと。
264 陳亮（1143-1195），字は同甫・同父，号は龍川，浙江省永康のひと。
265 張元幹（1091-約1170），字は仲宗，号は蘆川居士，真隠山人，蘆州永福（福建省永泰県）のひと。
266 呉文英（1205?-1276?），字は君特，号は夢窓・覚翁，四明（浙江省）のひと。
267 石君宝（?-1276），名は徳玉，平陽（山西省臨汾）のひと。
268 尚仲賢（生卒年不詳），真定（河北省正定県）のひと。

269　旅の路上のこと。
270　話したいことを全部話すこと。
271　王重民等輯併校注，1957年，北京人民文学出版社排印本。
272　『敦煌変文校注』は「亦」につくる。
273　顧況（725-814?），字は逋翁，号は華陽山人，蘇州（江蘇省）のひと。
274　まっすぐなさま。
275　やすらかなさま。
276　岳珂（1183-1243），字は肅之，号は倦翁，湯陰（河南省）のひと。
277　かろやかに舞うこと。
278　劉長卿（?-789?），字は文房。河間（河北省）のひと。
279　旅人の夢のこと。
280　崩御すること。
281　補遺，『全宋詩』には未収。
282　旅人のこと。
283　周紫芝（1082-1155），字は少隠，号は竹坡居士，宣城（安徽省）のひと。
284　陸游（1125-1210），字は務観，号は放翁，越州山陰（浙江省紹興市）のひと。
285　山名。
286　李煜（937-978），南唐の中主李璟の第六子，初め名は従嘉，字は重光，号は鐘隠，蓮峰居士，彭城（江蘇省徐州銅山区）のひと。南唐の最後の皇帝。
287　唐の徳宗が翰林院を移した処，転じて翰林学士をいう。
288　禁苑の中にある池，転じて中書省のこと。
289　晁補之（1053-1110），字は無咎，号は帰来子，済州巨野（山東省巨野市）のひと。
290　『全宋詞』は「亳社観梅」につくる。
291　李之儀（1038-1117），字は端叔，号は姑溪居士，姑溪老農。滄州無棣（山東省濱州無県）のひと。
292　張祜（782?-852?）字は承吉，山陽（河南省）のひと。
293　李商隠（812-858），字は義山，号は玉谿生，懐州河内（河南省沁陽市）のひと。
294　花蕊夫人（生卒年不詳），後蜀の孟昶の妃，後に北宋の皇帝太祖（趙匡胤）の妃。
295　薄暗いさま。
296　皇甫冉（718?-771?），字は茂政，潤州丹陽（江蘇省鎮江市）のひと。
297　姜夔（1155-1209），字は堯章，号は白石道人，鄱陽（江西省）のひと。
298　『全宋詞』は「蔔運算元」につくる。
299　ヨモギのこと。
300　石孝友（生卒年不詳），南宋のひと，字は次仲，江西南昌のひと。
301　沈佺期（656?-716?），字は雲卿，相州内黄（河南省内黄県）のひと。
302　章孝標（791-873），字は道正，桐廬県（浙江省）のひと。
303　薛能（817?-880），字は大拙，汾州（山西省汾陽県）のひと。
304　汪宗臣（1239-1330），字は公輔，号は紫巖，婺源（江西省）のひと。
305　唐庚（1071-1121），字は子西，眉州丹稜（四川省）のひと。
306　胡仲参（生卒年不詳），字は希道，清源（福建省泉州）のひと。
307　『汲古閣景鈔南宋六十家集』は「南坡口号」十八首の十八につくる。
308　楊炎正（1145-?）字は済翁，廬陵（江西省吉安）のひと。
309　韋応物（736-791?），唐のひと，京兆府長安県（陝西省西安市）のひと。
310　伏羲の敬称。
311　葛勝仲（1072-1144），字は魯卿，常州江陰（江蘇省）のひと。
312　『全宋詞』は「蔔運算元」につくる。
313　『全宋詞』は「醜奴児」につくる。

314　朱敦儒（1081-1159），字は希真，洛陽（河南省洛陽市）のひと。
315　戴善甫（生卒年不詳），一に戴善夫，真定（河北省正定）のひと。
316　孟郊（751-814），字は東野，湖州武康（浙江徳清県）のひと。
317　李山甫（生卒年不詳），字は明叟・公晦，号は龍渓釣叟。建昌のひと。
318　牛嶠（生卒年不詳），字は松卿・延峰，隴西（甘粛省）のひと。
319　『全唐五代詞』（中華書局　2015年）所収。
320　将来の情況をいう。
321　『明清善本小説叢刊初編』第2輯。
322　牡丹の品種の一つ。
323　『全宋詞』は「蔔運算元　送梅花与趙使君」につくる。
324　格別の寵愛のこと。
325　呂渭老（生卒年不詳），一に濱老，字は聖求，嘉興（浙江省）のひと。
326　張小山（1270-1348?），名は可久，小山は号，慶元路（浙江省寧波）のひと。
327　女性の手指のこと。
328　劉唐卿（生卒年不詳），太原のひと。
329　馬致遠（1250-1321），字は千里，号は東籬，大都のひと。
330　魯迅（1881-1936），本名は周樹人，字は予才。浙江省のひと。
331　『而已集』所収。
332　『続修四庫全書』第1739冊。
333　商政叔（?-1231），字は正叔・政権。
334　宋方壺（生卒年不詳），名は子正，華亭（上海松江県）のひと。
335　李中（920-974），字は有中，九江（江西省）のひと。
336　陳允平（生卒年不詳），字は君衡・衡仲，号は西麓。四明（浙江省寧波）のひと。
337　柳宗元（773-819）唐のひと，字は子厚，河東（山西省永済県）のひと。
338　『全宋詩』は「次韻子由初到陳州二首」につくる。
339　橋の名。長安城の便門にある。
340　周密（1232-1298），字は公謹，済南（山東省）のひと。
341　常建（708-765?），長安（陝西省）のひと。
342　『全唐詩』は「落第長安」につくる
343　陳人傑（994-1041），字は曼卿，幽州（北京）のひと。
344　史達祖（1150-1220），宋のひと，字は邦卿，汴（河南省開封県）のひと。
345　陳亮（1143-1195），字は同甫，永康（浙江省金華県）のひと。
346　趙以夫（1189-1256），字は用父，鄆（山東省）のひと。
347　美人のことをいう。
348　木々を飛び回るウグイスのこと。
349　陳子昂（661-702），唐のひと，字は伯玉，梓州射洪（四川省射洪）のひと。
350　高適（700-765），字は達夫，渤海（河北省景県）のひと。
351　かぶら矢のこと。
352　陽の気のこと。
353　劉仙倫（生卒年不詳），字は叔儗，号は招山，廬陵（江西省吉安）のひと。
354　高く聳えるさま。
355　『御選歴代詩余』巻8には欧良の作とされる。
356　蔣捷（1245?-1305?），字は勝欲，号は竹山，陽羨（江蘇省宜興）のひと。
357　赤い糸のこと。
358　『全元詞』は未収。馮俊傑校注『鄭光祖集』（山西人民出版社　1992年）に収録。
359　宋元の俗語で，憎み嫌うこと。

360　向子諲（1085-1152），字は伯恭，号は薌林居士，臨江清江県（江西省樟樹市）のひと。

361　二日酔いのこと。

362　温庭筠（812-872），唐のひと，字は飛卿，太原（山西省）のひと。

363　『全唐詩』は「秋登蘭山寄張五」，あるいは「秋登萬山寄張文儃」につくる。

364　李益（748-827），唐のひと，字は君虞，鄭州のひと。

365　『全宋詩』は「石氏画苑」につくる。

366　『欽定四庫全書』第1477冊。

367　周紫芝（1082-1155），字は少隠，宣城（安徽省宣城市）のひと。

368　曽茶山（1084-1166），名は幾，字は吉父。号は茶山居士。

369　『全宋詩』は「次韻子由論書」につくる。

370　曹鄴（816-?），字は鄴之，桂州陽朔県（桂林）のひと。

371　施枢（生卒年不詳），字は知言，丹徒（江蘇省）のひと。

372　原典は「籙」字に作る。

373　王昌齢（698-755），唐のひと，字は少伯。

374　胡曽（生卒年不詳），晩唐の詩人。

375　王禹称（954-1001），字は元之，済州鉅野（山東省）のひと。

376　汪藻（1079-1154），字は彦章，饒州徳興（江西省）のひと。

377　『全宋詩』未収。

378　情愛の深いさま。

379　寺院のこと。

380　万物を構成する四つの要素。仏教では地・水・火・風のこと。

381　李白（701-762），字は太白，号は青蓮居士，西域に生まれ，幼少期に蜀の青蓮郷（四川省江油県）に移り住んだといわれる。

382　九月十日は小重陽ともいう。

383　『欽定四庫全書』第1490冊。

384　譚宣子（生卒年不詳），字は明之，号は全庵。

385　紀君祥（生卒年不詳），または紀天祥とも。大都のひと。

386　趙次公先後解輯校『杜詩』丙帙巻2。

387　戎昱（744-800），荊州（湖北省江陵）のひと。